
【真・恋姫†無双】天の御使いは2度死ぬ！？

もっこりーず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【真・恋姫†無双】天の御使いは2度死ぬ!?

【Nコード】

N5130T

【作者名】

もっこりーズ

【あらすじ】

もう何番煎じになるか解らない恋姫の二次創作。
今回の主人公は天の御使いである北郷一刀だけでは無く、彼を保護した朱然という男も物語に大きく関わってきます。

絡み合う外史内外での思惑・・・
最後に笑うのは誰なのか？

そして彼の見る外史の行く末とは？

ちよつとした説明

ひよんな事から三国志の世界に飛ばされてしまった高校2年生の北郷一刀。

しかもこちらでの有名所の武將は皆可愛い少女！？

こんなハーレムウハウハな中で一刀はどう生きていくのか！

などという甘つちよろいストーリーではなく、大陸に飛ばされてきた一刀はある男に保護される。

その男は自らを三国志の武將、朱然と名乗る。

厳しすぎるこの乱世を一刀は生き残ることができるか！？

そして、朱然と一刀が織り成す無限の螺旋とは？

物語は今、動き始める♪

銅鏡と見知らぬセカイ（いわばプロローグ）（前書き）

恋姫のキャラ上手く再現できるかな？

まあ頑張ってみるb b

銅鏡と見知らぬセカイ（いわばプロローグ）

私立聖フランチェス学園

北郷一刀はいつも通りの日々を過ごしていた。

普通に学校に通い、普通に授業を受け、普通に部活に行き無心に剣を振るう。

そんな日常が卒業まで続くんだろうなと一刀自身もそんなことを思っていた。

春先のうらかな午後、いつも通り昼飯のパンを級友の及川と食べていると、及川が言ってきた。

「なあ、かずピー。自分、宿題は終わったん？」

「宿題？そんなんあつたっけか？」

フランチェス力は元が超お嬢様学校であつた。

その名残か校則は厳しく、宿題などもいつも多めであつた。

「あるで〜。確か世界史のレポートやったで。」

「まじかよ・・・で、締め切りはいつなんだ？」

期限まで多少の余裕はあるだろうとふみ、パック牛乳を口に含む。

「ああ、明日の朝や「ブフォアアアー！！」うおおおお！？」

「なんやかずピー!？」

お約束というべきか口に中の牛乳をすべて及川にプレゼントしてしまっ
た。

無理もないだろう。何せフランチエスカの出す課題はその殆どがレ
ポート用紙十数枚に及ぶ。

決して無理な訳ではないがそうするには1日の残りを全てこの
課題に捧げることになってしまう。

「なあ、及川・・・」

「何やかずピー？」

「俺達、友達だよ・・・？」

「・・・かずピー・・・」

及川は憐れみの目を一刀に向ける。

「な、なんだよ・・・(汗)」

「自分、ワイを道連れにしヨーっちゅうハラやな？」

「ウツ・・・!」

及川はヤレヤレだぜ、と肩を竦め校舎の外、ちょうど美術館棟があ
る方向を指す。

「この課題にはなあ、普段使われていない美術館を生徒に使わせよ
ーっちゅう学校側の考えがあるんや。せやから世界史の課題は言わ

ばあの中にある美術品のレポートでもあるんやで。」

一刀はへえと答え、美術館棟を見やる。

何故一介の学校に美術館棟があるかという、それは元超お嬢様学校だからである。

「しかたない、今日は部活休んであそこに行くか。な！及川！」

「何でいつの間にかワイが行くことになっとなねん！」

いいツッコミくれるが行かないとは言わない。これは一緒に行ってくれるということだ。

1年生の時から付き合いである一刀にはそれが解っていた。

放課後になり、職員室に今日は部活を休むと顧問の先生に伝えた一刀は、外で待っていた及川と共に美術館棟に行った。

「なあ、及川。お前は課題終わってるのか？」

「何言っとなねん。終わってないからかずピーに話しかけたんやないか」

「お前なあ・・・」

呆れて声も出なかったが及川は構わず、中庭の道を進んで行く。

歩くこと3分ちよい、2人は体育館くらいある建物の前にやってきた。

壁に埋め込まれた看板には【聖フランチェスカ学園 美術館棟】とあった。

一刀や及川と同じなのか、中にはチラホラと生徒達の姿が見えた。

「ほな、ど・れ・に・し・よ・う・か・な」

及川は鼻歌を歌いながら色々な展示品を次々と指差していく。

そんな中一刀の意識はあるコーナーに釘付けになっていた。

そのコーナーは約1800年前、後漢末期、つまるところ三国志の時代のものであった。

昔の兵士が使っていた剣や鎧などが羅列する中、ソレは一際異様な雰囲気を出していた。

一刀はソレを食い入るように見つめた。

錆びてはいるが豪華な装飾が入った銅製の鏡、銅鏡だ。

「なんや、ヤケにお気に入りやないかい、ソレ。」

後ろから及川が茶化すように声を掛けてくる。

「なあ、及川。これ、借りられないかな？」

「借りるって、持って帰るんかい！？それ。」

驚いたような呆れたような声でツツコむ及川。

それには目も暮れず一刀はその辺にいた職員に借りられないか話し

掛けていた。

及川はそれを、黙って見ていた。

「まさかホントに借りて来るたあな。かずピーどうしたん？」

「いや、淒く気になってな。」

自分でどうしたんだろう？と思いつながら銅鏡を大事に抱える一乃。

「さて、帰ったら早速課題やらないとな！」

「せやな。ワイも課題の題材見つけたしの。」

「あれ？お前も見つけてたのか？」

自分が銅鏡に夢中になりすぎていて気づかなかったのかもしれないが、とても何か借りたようには思えない。

「随分な物言いやな、自分……」

及川のライフは着実にゼロに近づいていた。

「それで、お前の題材は？」

及川は気を取り直して答える。

「おお、それはな「あぶない！！」へ？」

声のした方を見るとちょうどソフトボール部員がこちらに向かってきていた。

練習でバッターが打った打球と共に。

「ゲッ!?」「アカン!」

このままでは2人のどっちに直撃コースだ。
しかも突然のことで2人は混乱し、とても避けられそうに無い。

「かずピー! 避けえな!!」

及川はその場から飛び退くが一刀は重い銅鏡を抱えているため速く動けない。

そして、勢いのついたボールは一刀の胸の辺り、一刀の持っている銅鏡に吸い込まれていった。

「ぐああ!!」

「かずピー!!」

パリーン! という音と共に銅鏡のガラス部分が粉々に砕け散る。

その瞬間、目の眩むほどのまばゆい光が辺りを包み込む。

一刀はその光が銅鏡から出ると気づいた時にはもう意識を失っていた。

「――ツツ！ いったあゝ！！」

突如目が覚める。

「こっちは……？ 及川は？」

あまりのことに頭がついていけず、ただ周りをキョロキョロと見る。そして気づいた。

「うう……どうだ!？」

見渡す限りの荒野。最早地平線が見えるレベルだ。

日本じゃないんじゃないかと思い、携帯を開けるも、ディスプレイに表示されるべき電波を表す3本の線は今は無く、ただ赤文字で圏外と表示されるだけだった。

どうせなら叫んでしまおうと思い、腹に力をいれ空気を吸い込む。

「どっだー——！！！！！！！！！」

「！！」

銅鏡と見知らぬセカイ（いわばプロローグ）（後書き）

先行き不安な作品ですがどうぞ宜しくお願いします。

どんなENDにするかはまだ未定です><

黄巾の乱って結構続いたけど張角は初めの1年くらいで死んだらしいよ（前書き

恋姫の看板使っておいてなんですが
ホントに書きやすい！

ちゃんと設定してある世界観に上塗りしていく感じで楽しいですb

b

黄巾の乱って結構続いたけど張角は初めの1年くらいで死んだらしいよ

ソフトボール部の打球をくらって気絶して、気付いたら荒野にいました。

「笑えねえな・・・これ・・・」

北郷一刀は荒野のド真ん中で胡坐をかいて悩んでいた。
何せ起きたら学校の保健室の天井かと思ったら満天の青空だ。

誰かに放置されたという線も捨て切れないが頭の中の「ありえないモノリスト」に書き足しておく。

「とりあえず、これからどうしようか。近くに町とかあればいいんだけどなあ・・・」

照りつける日光を長時間受けていたようで身体は熱い。
ひとまず近くにあった森で一休みしようと森に近づく。

そのとき、森の中から3人の人影が現れた。

やった！人だあ！！

（とりあえずここはどこかを聞いて・・・いや！まずは言葉が通じるかどうか。でもここは人に会わせてくれた神様にありがとーう！！）

「よお兄ちゃん、イイ服着てるじゃねえか。」

「身包み全部置いていけやあ！でねえところすぞ？」

「お、置いていくんだな。危ないんだな。」

（神エ・・・何故俺にこのような試練を与えたもつか・・・FUC
K！）

頂垂れて心の中で神様に中指を突きたてていると黄色い服を着た男
達は何も答えない一刀に怒り出した。

「オイ兄ちゃんよお、俺達がこうやって優しくしてる内に出すもん
出した方がいいぜえ？」

「とつとと出せやオラ！！」

「だ、出すんだな・・・」

（やべえ！いつの間にかせつかく会えた人を怒らせちまった！）

一刀はかなり焦っていた。

相手の3人はどうみても好意的な感じではない。むしろ敵意しか感
じない。

「チツ、だんまりかよ・・・まあいい、お前ら！腕の1本や2本折
つちまっついていいから身包み剥がしてこい！」

「オウよ！」「わ、解つたんだな。」

チビとデブがジリジリと寄ってくる。

「え？ちょ、ちょっと待ってくれよ！」

「もうおせえんだよ！！」「だな！！」

2人は一刀に飛び掛った。

「わああああああああ！！！！」

叫んでみたが助けは来ないんだろうなあとか思いながら一刀は迫り来る2人の持つ剣を見た。

そして、2人の刃は一刀に届くことは無かった。

ギーン！という金属同士がぶつかる音と共に2人の男はぐうと呻く。

「！？・・・一体？」

思わず瞑っていた目を開けると、白い服を身に纏い赤い槍を持った女性が一刀を庇うように立っていた。

「丸腰の相手を襲うなど、剣を振るうものとして恥とは思わんのか！」

女性は3人に向かって一喝する。

「うるせえ！俺達賊には関係ねえことだ！！」

1人後ろにいた兄貴格の男が前に出てくる。

手に持っているのは一刀が毎日使っているような竹刀ではなく、しっかり切れる真剣だ。

一刀がゴクリとノドを鳴らすと同時に女性はフンと鼻を鳴らす。

「そうか、賊か。賊なら遠慮はいらないな！」

言うやいなや女性の姿が消えた。

いや、消えたかの様な高速移動で一瞬で3人の目の前に現れる。

「何!？」「なアツ!？」「だな!？」

3人は驚いた。だが、驚いただけだった。

女性の手元が見えないほどの槍捌きで3人の剣を根元から叩き折り、3人は女性に対してなす術が無くなっていた。

そのまま兄貴格の男の首筋に穂先をつける。

「どうだ?これでもまだ抵抗するか？」

「グッ、お前ら!」

「残念ながら、お仲間はまだ逃げたぞ？」

兄貴は慌てて後ろを振り返るも、2人の姿は森の奥へと消えかけていた。

「さあ、どうする?私を殺すか?それとも私に殺されるか？」

「く、クソッ!」

兄貴は顔を顰め、諦めたかのように頂垂れた。

「それが答えか。なら、遠慮なく・・・」

「えっ!？」

一刀は思わず叫んでいた。

「？コイツは賊だ。賊なら殺すのが通りであろう。」

「そんな通り聞いたこと無いよ！そのオッサンが何したか知らないけど命を軽々しく奪うなんて・・・」

女性は顔だけを一刀に向けた。

今までその体術や槍捌きに気を取られていたが、蒼い髪に整った顔立ち。どこからどう見ても美人だった。

「ではそなたはこやつが今まで奪ってきた命はどうでもいいと申すか？」

「そ、それは・・・」

美しい顔に見とれていたことに気付かれないように顔をそらす。

女性はフンとひと鳴きすると男の首に槍を通す。

ザシュツツという聞いたことも無いような音と共に兄貴は首からブシャアアと血の雨を降らし地面に倒れこんだ。

その光景に一刀は思わず胃の中のを逆流させてしまう。

「ヴツ、おええええええええ・・・！」

女性は一瞬驚いたがそれ以外は何もせずただ一刀を見守っていた。

一通りすんだ後、女性は一刀に尋ねてきた。

「人が死ぬのを見るのは初めてかな？」

一刀は嘔吐を見られた羞恥心から顔を赤くしながら首を上下に振る。

「左様か・・・」

女性は納得したように頷いたがそれ以降は何も言わなかった。

「なあ、アンタは平気なのか？人を殺して・・・」

女性はビクリしたように一刀を見ると、答えた。

「こんなご時世だ。殺られる前に殺らなければ。そなたはどこかの貴族か何かか？そのような光り輝く面妖な服を着ているのだから只者では無いとお見受けするが。」

「あ、自己紹介がまだだったね。俺は北郷一刀。聖フランチエスカ学園の2年生だ。」

それを聞いた女性は混乱したように聞き返してきた。

「ふ、ふらん・・・？ちえ、なんだそれは？呪文か？」

「ちょ、呪文はひどいなあ。やっぱりここって日本じゃないのかなあ。」

フランチエスカは剣道部の主将である不動先輩が全国大会優勝経験者だから一応日本で知らない者はいないはずだと思い学園の名前を

だしたが、知らないようだった。

よほどの田舎者なのかどうかはさておき、ここまで広大な土地は日本には無い。

やはり外国、中国の方かと思い聞いてみる。

「ここはどこですか？日本じゃないようだし・・・中国ですか？」

女性はまた訳が解らないといった顔で

「にほん？ちゅうごく？どこだそこは？この大陸にそんな州や郡はなかったハズだが・・・」

と言っていた。

大陸？州や郡と言っている時点から中国なのは確実なのだろうが目
の前の女性は知らないという。

「まあ、いいや。それよりアンタ「星ちゃん！」ん？」

「心配されるな、連れだ。」

遠くから来る影は2人の女性だった。

（また女の子。頻度多いなあこの辺）

やってきた2人の女性はどちらも特徴的だった。

1人は眼鏡をかけ、いかにもインテリっぽい感じの女性。

もう1人は頭に某太陽の塔みたいな人形を乗せ、ペロキャンを口に

くわえたように、少女だった。

「星ちゃん速すぎですよーもう少し風たちのことも考えてくださいよ。」

「まったくです。いくらなんでも速すぎです。」

2人はそんなに怒ってはいないようだったが口では星と呼ばれた女性に説教をする。

「いや、すまん。この者を助ようと思ひ急ぎすぎてな。」

星（？）が一刀を指し、2人の視線が一刀に向く。

「え、あー、俺は北郷一刀。その人、星さんに助けられて……ん？」

星と呼んだ瞬間、3人が固まった。

俺変なこと言つたっけか？と戸惑っていると固まりから戻った星から明らかな殺気が飛ぶ。

「き、きっさまああああああ！……！」

星が一刀目掛けて槍を突き出してくる。

「え、えええええええええええ！？」

なんとか腰を抜かすことで初撃は避けることが出来た。
しかし、星は次の攻撃へと移行している。

さつき見た槍の速度を見ると次は避けられない。

（クソ！なんなんだここは！いきなり追いはぎに会うし名前呼んだら殺されかけてるし！！）

流石に死を覚悟した。

そう、次の瞬間には彼女の槍が自分の胸を貫いて自分はそのまま死ぬんだろうな、と脳内に明確なビジョンが浮かんでくる。

しかし、その赤い刃が一刀を貫くことはなく、一刀の胸の前で止まっていた。

星が寸止めてくれたのかと思い、彼女の顔を見るも、彼女の顔はまだ怒りに染まっており、瞳孔は開らき、歯を食いしばっている。

「いかなあ、最近の若いのは。すぐに頭に血が昇る。」

「ご主人様、あなた様はまだ24でしょう・・・」

不意背後から聞こえてくる男女の声。

星も気付いたようで目だけを一刀の後ろに向ける。

「オイオイ、力を抜いてくれよ。指が筋肉痛になっちまう。」

「ご主人様、それはないでしょう。」

「まあそうだが、なぜ執拗に突っ込んでくるんだ？」

「なぜでしょうね。」

一刀は自分の前と後ろの温度差を明確に感じていた。

前には殺気を突き刺してくる修羅。

後にはよく解らない一組の男女。

「さあ、剣を引くんだ。」

男の言葉で槍を引く星。

そして男は今度は一刀に話しかけてきた。

「少年、今彼女が怒っているのは君が何かしたからではないのかな？」

「え？さあ、ただ名前を呼んだだけで。」

「そうだ！その男がこともあろうに私の真名を・・・！」

「まな??？」

男は合点がいったように頷くと話を進めた。

「そうだ、少年。今君が彼女を呼んだときの名前は真名。その人だけが持つ真の名前だ。許可なく呼べば今のようになりかかられても文句は言えないんだ。」

男は真名の重要性を一刀に説明した。

「そうか・・・ごめん！俺、自分の国にはそうだったのが無くて、

だから俺も真名なんて持ってないし・・・でも間違えたとはいえ呼んでしまったのは俺のせいだ！！ホントにゴメン！！」

一刀は誠心誠意謝った。

どのようなことがあったとしても真名を呼んでしまったのは自分のせい。

それをよく理解した上での謝罪だった。

（うんうん、現代社会に見習わせたいな）

オイオイ、何言ってやがるそのまだ名乗ってもいない乱入男め！

星（仮）男の乱入と一刀の謝罪ですっかり毒気を抜かれていた。

（ふむ、ここまで素直に謝れるとは。なかなかいい御仁のようだな）

一度は真名を穢された男ではあるが、真っ直ぐな一刀に好意を感じていた。

（しかし、問題はこの乱入男だ。全力の私の突きを素手で止めるとは・・・）

逆に攻撃を止めた男には脅威を感じていた。

「ところで、そなたの名は？」

星（仮）が男に尋ねる。

「ん？俺か。普通は自分から名乗るものだが・・・まあいい。楽しみは後に取っておきたいしな。」

星（仮）はしまったと思いながらも先を促す。

「俺は朱然、字は義封だ。よろしくな。」

朱然と名乗った男は傍らの女性以外をいかにも余裕があるかのように見渡す。

この男と一刀。まるで矛と盾のようなこの2人を見て、星（仮）はワクワクと同時にゾクゾクと首筋が冷えるのを感じた。

黄巾の乱って結構続いたけど張角は初めの1年くらいで死んだらしいよ（後書き

いかん・・・長くしすぎたww

今回は熱中しすぎたので次からはもう少し短くします><

天の御使い始めました（前書き）

今の所、オリキャラの予定は朱然とそのお供（名前は本編で！）以外は出すつもりはありません。

あんまり増えてもねえ・・・

もしかしたら増えるかもですが主要キャラではなく、チヨイ役で出るかもです。

天の御使い始めました

朱然と名乗ったこの男とその傍らにいる女性。

一刀は自分以外の男性を見て少し安心しながら朱然に話しかけた。

「刀はあまり女性と付き合ったことのないチェリー君なのだ。綺麗な女性に囲まれてドギマギしないハズが無い。」

「あのー、すいませんがここは何処なんですか？日本じゃないみたいですけど・・・あの人の人たちの服装も、コスプレですか？」

朱然は落ち着いて答えた。

「フム、君が言う日本という地名は知らないがこの事なら知っているぞ？」

「日本を知らない？そんなハズは・・・」

日本語が通用するならここは日本か相手が日本人としか思えないがフザけているのかと思いい場所を聞く。

「ここは・・・」

無駄に溜めるなあといいながらも黙って先を待つ。

「何処だっけか？」

ズコーン！！

なんて古風な！？

「ここは陳留の近郊です、ご主人様。」

朱然の傍らにいた女性が教えてくる。

しかしその眼は一刀は捉えておらず、朱然だけをその綺麗な瞳に映していた。

「そうそう！ここは陳留の近くだ！少年。」

「いや、解りましたけど。」

「よし、君の質問には答えた。今度は君が俺の質問に答える番だ。」

「え！？」

そんなん詐欺やで！？と脳内の及川も援護してくれる。

しかし脳内及川は実体化することなく彼の援護射撃が朱然に当たることはなかった。

「さて、こちらの質問だが・・・」

どんな質問が来るのか、まあ大したことは聞いてこないだろうと落ち着いていた一刀だったが流石にこれには呆然とするしかなかった。

「君は天の御使いかい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

一体何を言っているんだと一刀は朱然を見る。

戸惑っている一刀を尻目に星（仮）の連れの2人が話し始める。

「天の御使い・・・聞いたことがあります。管路が予言したというこの乱世を終わらせる者。」

「でもあの管路ですしー眉唾モノであとは思いましたけど・・・まさかあのお兄さんがそうなんですかねえー。」

一刀もそれを聞いて初めて知ったがどうやら天の御使いとはそういうものだというのは解った。

それだけに意味が解らなかった。

「あの、俺はただの高校生ですし、そんな大それたものじゃないですよ。」

「そういうのは問題ではない。君の着ている服、この大陸に無い言葉、それらがあれば君が御使いであろうとなかろうと関係は無いよ。」

朱然は不敵に言い放った。

「つまり・・・俺が天の御使いっぽくあればいいってことですか？」

「うむ、理解のいい奴は好きだぞ少年。そういうことだ。」

つまり必要なのは天の御使いそのものではなく天の御使いという「肩書き」があればいいという訳だ。

「でも俺がそんなんじゃないってのは自覚してるし、その3人にもバレてるじゃないですか。」

一刀は3人を指差して言うが

「いえ、おそらく本物でしょう。」 「え!？」

「そうですねー。その光り輝く衣といい、おかしい言動といい、本物と判断したほうがいいかもしれませんねー。」 「なんで!？」

「私はどうでもいいが、真名を知らない人間がいるとは思えないからな。多分この大陸の者ではないのだろうな。」 「マジかよ!？」

「と、言う訳だ少年。今日から君は天の御使いだあー!!」

「ええええええええええええええええ!？」

【一刀は『天の御使い』の称号を手に入れた!】

某小さな遊撃者達風なテロップが頭の中で表示され、一刀は自分が天の御使いであることを認めた。

「さて、これからの君の行動だが・・・」

「いや待たれよ。まだ私達の自己紹介が済んでおらぬ。」

星（仮）が主然の話を遮り、自分達の名前を言う。

「私は戯志才といいます。」

「風は程立ともうしますー。」

「我が名は趙雲、字は子龍。常山の昇り竜でござる。」

戯志才、程立はそのまま彼女達の名前で捉えることは出来たが、趙雲だけは流石にそうはいかなかった。

「ええええええええ！？趙雲ってあの無双の！？」

「ほう、私が無双とは・・・そなたはなかなかの眼力の持ち主のようだ。」

「いやいやいや、趙雲ってどう考えても三国志・・・・・・・・ハッ！」

思えば、最初からそうだった。

無駄に広大な大地、これは中国大陆だ。日本を知らないのは三国志の時代だから？

この人達の名前、まるで三国志の武将のような漢字2〜3文字。さっきの黄色いオッサン達、これは黄巾党だ。

まるでパズルのピースがはまっていくように次々と辻褄が合っていく。

「じゃあ、やっぱりここは三国志の・・・？」

趙雲達は一刀が何を言っているのか解らず、怪訝な表情だけを浮かべる。

「なら劉備とか孫権とか曹操とかいるのかなあ・・・会ってみたいなあ、特に劉備。」

某無双ゲームでは蜀ばかり使ったものだ。

「劉備はしらが孫権はたしか江東の孫策の妹がそんな名前だったかな。あと曹操はこの近くにある陳留の太守だ。」

「おお！じゃあ会えるのかあ。どんな人かな？黄巾の乱の時だし、まだオッサンじゃないよな。」

朱然の隣的女性以外は一刀のその発言に目を見開いた。そんな中朱然が回復し、一刀に話し始める。

「なあ少年。どこでそんな噂を聞いたのか知らないが、曹操は女だぞ？」

「は？」

今度は一刀が固まる番だった。

そういえば孫権も孫策の「妹」だと言っていた。つまり……女？

「じ、じゃあ馬超とか趙雲とか・・・」

「趙雲はそこにいるだろう。馬超はたしか西涼の馬騰の娘だったはずだ。」

また女性・・・一刀の頭がフリーズする。

「さて、気を取り直して君のこれからのことだが……」

「な、なんでだよおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！！！！！！」

朱然の話を遮り、こちらに来て何度目になるか解らない絶叫を披露した。

天の御使い始めました（後書き）

朱然の声は小野Dを想像してくれればokですww

あと朱然の付き人の女性ですが、話が進まず結局名前公開出来ませんでした><

（別に考え中なわけではないぞ・・・よ？）

ちなみに、朱然がコスプレとか三国志とかにあまり反応しないのは別にミスではありません。ちゃんと考えがあつてのことです。

多分

あ、ミスでは無いのは確かですよー！><

感想とか評価とかくれるとうれしいです。

交渉成立（前書き）

説明などが長々しいので読みにくい上にストーリーがぜんぜん進みませんww

それでも付き合ってやんよ！という心の広い方はどうぞ下へとお進みください。

交渉成立

二刀は頭に大きなタンコブを付けて朱然の話を聞いていた。

「ふう……コレに懲りたら次はむやみに大声で叫ぶのはやめような？」

「ハイ」

叫んでいる途中、「うるせええええええ！！！！」という負けず劣らずの音量で振り向いたらそこにはゲンコツがあったという訳だ。

一刀はずつと朱然を見ていた。

上から見ていくと髪は色が少し茶っぽいという自分のソレと同じ髪色で、肩まで伸びた髪を後ろの方で結ぶというラフな髪型だった。

顔立ちは整っていたが右目に縦にはしる傷が端整な顔を少し痛々しい雰囲気に使っていた。

上には黒いワイシャツに酷似した服を着ており、第3ボタンまで空けている。

下には黒いスラックスのようなズボンを穿いており、一見すればワイシャツの黒い学生のようなだったが、上着として羽織った純白の縁に金の刺繍が施された新撰組のソレと似た羽織が学生ではなく、戦国の世だということを教えてくれた。

そして一番目につく、背中に背負った武器。

打ち合ったら折れてしまいそうな細身の剣。しかしそれは決して折れることの無い剣士の魂。

身の丈ほどの刀を背負っていた。

しかし一刀はそれより別な、何か妙なものを朱然の中に感じていた。それはとても集中して意識していないと気付かないほどのほんの少しの違和感。

まるで自分と同じ、この世界に合っていないようなそんな感じだった。

しかしそれは彼と話すことで霧散されてしまう。

「で、君はこれからどうするんだ？行く宛はあるのかい？」

「そんな・・・気付いたらここにいたから行く宛なんてありませんよ。」

そう答えたら朱然は微笑みながら言った。

「ならウチに来ないか？」

「え！？」

一刀は困惑していた。自分のような得体の知れない者を誘ってくるとは思わなかったようだった。

「なに、さっきも言ったが俺が君に望むのは天の御使い『つばさ』だ。君は俺達の知らない知識を繰り出してくれるだけでいい。」

なかなか腹が黒いなと一刀は警戒したがそれは差し出された朱然の

手によって打ち消された。

「これで俺達は仲間だな！よろしく。」

「ハイ、宜しくお願いします。」

「オイオイ、俺達は仲間だ。敬語云々は無しにしようぜ、相棒。」

「あ、相棒！？」

まさかここまで期待されてるのか！？と一刀は思わず敬語を使いそうになるがなんとか押し込んでその手を握り返す。

「解った。ヨロシク、朱然さん。」

すると朱然はニツコリと微笑み

「合格だ。」

と言ってきた。

「よく迷わずに出来たな。その真っ直ぐさをこれからも忘れるなよ？」

「ハイ！！」

これが『天の御使い』北郷一刀と後に『雷帝』の異名をとる朱然義封の出会いだった。

「ところで、君達はどうするんだい？こちらとしては大歓迎だけど。」

「途中空気が課した3人に朱然が声を掛けると、戯志才と程立は話し合い、趙雲はすぐに朱然の前に来て、堂々と言いつつ放った。」

「済まないが、私は断らせてもらおう。」

それを聞いても朱然は微笑んだまま。

「一応理由を聞いておこうか。」

「私はまだ世間を知らぬ身。今は旅をして見聞を広め、しかるべき主に仕官しようと思っている。なので今は誘いには乗れない。」

「成る程、その調子ならこれからも俺にはなびいてくれそうにないな。他の理由が原因かな。」

すると趙雲はビックリしたように目を見開き、その後すぐに笑って言った。

「フツ、やはり貴殿は恐ろしい。たったこれだけの間で心を見透かされるとは。」

「まあ、育ってきた環境と鍛え方が違うからね。」

「左様か。ならば言いましょう。私には貴殿という人間が解らない性格とかそういったものではない、もっと人間の根本的なものが。私に言わせればそこにいる天の御使いより貴殿のほうがよっぽどの世の者とは思えないほど深く黒い。」

その言葉を聞いても朱然は微笑みを絶やすことなく、それに応えたのは朱然の傍らにいた女性だった。

「流石は趙子竜。初めて会ったご主人様のことをすぐに読み取って見せたその洞察力には感嘆する。」

意外すぎる人物の発言に朱然を除く全員が彼女の方を向くが、そこに女性の姿は無かった。

「？あれ・・・？？」

「あれー？お姉さんの姿がありませんねー？」

戯志才と程立が自分の目をこすり頭の上に？マークを浮かべている時に趙雲の立っている所からギイイイイン！という音が聞こえてきた。

「しかし初対面の分際でご主人様のことを悪く言うのは私の逆鱗に触れると同義。」

皆がそこに目を向けると、右手を突き出した女性と、それを槍の柄でガードしている趙雲の姿があった。

「罰はその身を以って償ってもらおう。」

女性が動く。

趙雲はとつさに槍を自分の前に突き出して防御の体制をとるも、掌打と蹴りを織り交ぜた女性の猛攻に押されてしまう。

「朱然さん！あの人を止めないのか！？」

一刀には勝敗が見え、おそらく女性を御せる唯一の存在であろう朱然に声を掛ける。

「ほう、アレを受けきるか。やっぱり趙雲だな。断られたのは痛かったな。」

朱然は独り言を言っており、一刀の言葉を受け付けていない。

「朱然さん、、クッ！」

このままでは歯止めが利かなくなつたあの女性が趙雲を殺してしまいそうだがあのレベルに突っ込むのは自殺行為なのでハラハラしながら2人の戦いを見ることしか出来ない。

不意に、猛攻に耐え切れなくなった趙雲の姿勢が崩れる。それを女性は見逃すことなく、趙雲の懷に飛び込んだ。

趙雲は慌てて払おうとするも既に遅く、女性の掌打を脇腹にモロに受けてしまった。

「ぐああッ！」

とつさに飛び退き女性から距離をとるも、襲い掛かる脇腹の痛み顔に顔を顰める。

「クッ、やる・・・！」

「これ以上は時間の無駄というもの。今止めを刺してやろう。」

（クソ・・・！このまま負けるのか私は！？そんなことは許せない！負けるくらいなら刺し違えてでも・・・！）

趙雲は自分より遥か格上の相手に敬意を持ちながらも、負けられないという自分のプライドが痛む体を動かす。

「来い、どんな相手であろうが私は負けん！」

「いい眼だ。しかし私もご主人様の為、負けるわけにはいかんだ。」

2人の間に岩よりも思い間が生まれる。

そして2人が動き出そうとする瞬間、不意に朱然が口を開いた。

「真羅^{しんら}、そこまでだ。もうやめろ。」

すると真羅と呼ばれた女性は体ごと朱然に向き直り、不満そうに言う。

「しかしご主人様、こやつはご主人様を・・・！」

「俺なら問題ない。まったく・・・5発も入れやがって。」

戯志才と程立はまったく見えていなかったよう所で所々で入れられてたのかと思い、納得しているようだったが、一刀には僅かだが見えていた。

女性が趙雲に攻撃を当てたのは脇腹のときの一回だけ。

つまりあの一回で女性は5発もの掌打を趙雲に当てていたのだ。

「大丈夫か？悪いな、部下の暴走をとめられなくて。」

「いえ、私の方こそ少し出すぎた事を言っただようすな。その人の怒りようを見れば一目瞭然だ。」

「ご主人様は私の命より大切なお方。ご主人様を侮辱されることは私の存在を侮辱されるのと同じなのだ。」

女性は誇らしげにその大きな胸を反らせて言い放つ。

「左様か・・・」

それを聞くと趙雲は考え込み、少しすると顔を上げて言った。

「私は自分の思う以上にひどいことをしてしまっていたようだな。済まない。謝罪の代わりとしてはなんだが、私の真名を朱然殿とあなたにお預けしよう。」

「そうか、しかし俺はまだ君には預けられない。決して嫌っている訳ではないが事情があつてな。」

「私は構わん。趙雲、貴公に私の真名を教えよう。」

「というか、お前はまだ自分の名前すら話してないぞ。」

朱然がそういうと女性は「え！？そうでしたか？」と慌てていた。

ちょっと可愛いと思っただのは一刀だけの秘密である。

「いいだろう、私の名前は朱桓^{しゅかん}、字は休穆^{きゅうもく}、真名は真羅^{しんら}だ。」

「ありがたい。私の真名は星。よろしく頼む、2人とも。」

「おう。」「ああ。」

3人が真名を交換（1人除く）している時、一刀はあまりの蚊帳の外感に思わず言ってしまう。

「あのー、俺は？」

「貴殿に預ける理由があるのか？」

趙雲はジト目で一刀を見る。

「いや、一応この話は俺よりの物語だし、いちいち趙雲趙雲って打つのが面倒くさいんだ・・・」

「??なんだか言いよつの無い説得力を感じる・・・まあ、いいだろう。さっきは貴殿も引き合いに出した品。我が真名は星。よろしく頼む。」

「ああ、俺は北郷一刀。真名はないから北郷でも一刀でも好きなほうで呼んでくれ。」

「うむ、それでは北郷殿とお呼びしよう。」

2人が話している内に他の場所でも話が進んでいた。

「それで、君たちは？」

朱然が程立と戲志才に尋ねる。

「私もご遠慮します。星と同じく私も世間を知らぬ身。やはり旅をして見聞を広めたいのです。」

「風もやめておきますー。ここまで強い人がいれば策も必要なさそうだし稟ちゃんがいなきゃ嫌ですからねー」

「そうか、解った。強要はしないからな。全滅なのは悔しいが君たちの旅路の無事を願うことだけやらせてもらおう。」

「ありがとうございますー」

「良かったの？風。あの人の下なら天下をとれたかも知れないのに・・・」

「稟ちゃん。風は稟ちゃんがなければ天下なんてどうでもいいのですよーだから仕官先は稟ちゃんと同じがいいのです。」

「風・・・」

2人が話していると朱然が遠くの大地を見て言った。

「いいところ悪いが、どこかの軍がこっちに向かってきている。漢軍ではないようだからおそらく陳留の曹操だろう。」

その言葉に戲志才、程立、趙雲改め星はいそいそと出発の準備をする。

「今ここで曹操様に会うのは面倒ですからねーここらでトンスラしましょうかー」

「うむ、では御三方、また会おう。」

「短い時間でしたがお世話になりました。それではお元気で。」

3人は言い終わる内に準備を済ませ、もう出発してしまった。

「行っちゃった・・・」

こちらに来て初めて会った人達だけに別れてしまふのは悲しいものがある。

ましてや今は乱世。次に会えるかどうかの保証も無いのだ。

「まあ、彼女達は強い。星は武力で、あの2人はおそらく知力でな。だからこれが今生の別れになることは無いだろう。」

「ええ、あやつらは乱世を生き抜く力を持っている。だから心配はいりません。」

朱然と朱桓はそういつて自分達の準備もし始める。

一刀は荷物も無く、やる事が無いので朱桓に話しかける。

「あの、さっきも言ったけど俺は北郷一刀です。よろしく願います。」

一刀が自己紹介したあと、朱桓は一刀を睨み付け、厳しい口調で言った。

「先に言っておくが、私はお前を認めた訳ではない。ご主人様の方針だからだ。」

あまりの物言いに一刀はう、と呻き引いてしまふ。

そこに朱然が助け舟を出す。

「まあまあ真羅、これから一刀は仲間になるんだ。真名くらい預けたらどうだ？」

「ご主人様はまだ真名の重要性をお解りでないのですか！？いいですか？そもそも真名とは……」

そう言いながら説教を始める朱桓。

「えっと……俺は別に構わないですけど。」

「いや、そうは問屋が卸さねえぜ！真羅、一刀に真名を預ける。これは命令だ。」

「ご主人様！！」「朱然さん！？」

2人は揃って叫ぶ。

「って、そーいや俺の真名を預けていなかったな。悪い悪い。」

「え？いいんですか？」

一刀は聞き返すも朱然は笑って「いいぜいいぜ」と言っただけ。

「俺の真名は陽炎だ。^{かげろう} ヨロシクな!!」

「はい、俺、頑張るよ!」

「いい返事だ。さあ、真羅。」

「う、ぐう……ご主人様が渡されたということはつまりそういうことなのだろう。よかろう! 私の真名は真羅! この真名くれてやる!」

「いや、あげちゃだめでしょ。」

「うるさい! 貴様は黙ってご主人様に尽くせば良いのだ!! さっさと行くぞ、早くしないと来てしまう。」

「誰が来てしまうですって?」

「誰って、曹操に決まっておろう! ……って……」

3人が突如聞こえてきた声に驚き、そちらを向く。

そこには赤いチャイナドレスを着て大剣を持った長い黒髪の女性と青いチャイナドレスに蒼い髪の女性を両脇に従えた金髪のクルクル頭の少女だった。

「もう一度聞くん。誰がここに来るのかしら?」

いつのまにか3人は黒の甲冑を着込んだ兵士達に囲まれていた。

交渉成立（後書き）

華琳様〽<!!!!

やっと登場させることができたb b

本当はプロローグから出したかったけど意味の解らない話になってしまつので（え？今も意味が解らない話だって？またまたご冗談をw w）

次の話は華琳様無双にしたいです！

真羅（朱桓）の服装については次回説明するつもりですのでしばしばお待ちを。

曹操の霸道（前書き）

中間テストなんかかなりそうなのでこうして投稿しますb b

曹操の霸道

曹操 猛徳

一般で言う三国志ではずる賢く卑怯で、劉備達を苦しめる悪役として登場していた。

しかしその才は類稀なるものがあり、三国の中で最も近い魏国の前身を作ったほどである。

そんな曹操と目の前の覇気をまといながらこちらを見る少女が同一人物だと一刀はとも思えなかった。

「あなた達が太平妖術の書を持った賊？とても賊には見えないけど・・・」

曹操がこちらを見定めるように見てくる。

「俺は荊州の劉表の客将をしている朱然だ。こっちは部下の朱桓とさつき仲間になった北郷一刀だ。」

陽炎が前に出て自己紹介をする。

「やはり賊では無いようね。しかしここから荊州まで結構あるけど何故このような所に？」

「ちよつと野暮用でな、悪いが詮索は遠慮してほしいな。」

「貴様！華琳様が尋ねているのだから素直に答えぬか！！」

赤いチャイナドレスを着た女性が朱然を睨み付けながら叫ぶ。

「なんだと、貴様！我がご主人様に指図するとは何事だ！！」

真羅が前へ出ようとするも陽炎の手に制されて踏みとどまる。

「真羅、俺達はケンカをしに来たんじゃないだぞ？多少のことには目を瞑ってくれ。」

「ご主人様・・・グッ！」

真羅は悔しそうに呟くと一刀の隣に戻ってくる。

「すまない、部下が失礼した。」

「いいえ、いい部下を持っているようね。そしてあなたも上に立つものとして申し分ない素質がある。」

曹操が何かを発見した子供の様に目を煌かせて言う。

「春蘭、あなたも人の事情に易々と踏み入っちゃだめよ？」

「しかし華琳様、こやつは華琳様に無礼を・・・」

「いいの、こっちは陳留の一太守、向こうは州牧よ？これくらいは許されてもいいわ。」

春蘭と呼ばれた女性は不服そうに唸るも納得したようだ。

「こちらの自己紹介がまだだったわね。私は曹猛徳、こちらは夏侯

惇と夏侯淵よ。」

赤いチャイナは夏侯惇、青い方は夏侯淵と言うらしい。
これまた有名な武将を見つけたものだと言は二人を見る。
まるで夏侯惇は『動』夏侯淵は『静』と全然似てない姉妹だった。

「ところで、その北郷という男・・・何者？」

曹操は一刀を訝しげに見る。

「コイツはさつき仲間になった奴でな、俺が思うにコイツは天の御使いだ。」

天の御使いという単語に曹操側の全員が一刀を見る。

「ふうん・・・こんなひ弱そうなブ男がねえ・・・」

「ぶ、ブ男！？・・・」

「あら、何か違って？」

あまりの言い様にたじろぐ一刀。

（そんなに顔悪かったかなあ？）

一刀が自分の顔を引っ張ったりして弄くついていると陽炎は一刀を指を指しながら言った。

「いやいや、何気にコイツは結構やる男だ。」

「へえ、そこまで強いのか？」

「いや、武の方はからっきしだが色々とな。」

「そう・・・ところであなた、私の所に来ない？劉表のように客将ではなく正規の官として。勿論部下の人と一緒に。」

曹操が真羅を舐める様に見ながら陽炎に持ちかける。

「あれ？俺は？」

また除外された一刀。

「あなたなんか部下にとって何をするのよ。」

「いや、一応称号天の御使いだし・・・」

「いないわ。」

一刀が胸に見えない槍を刺されたとき、陽炎が笑いながら助け舟を出す。

「悪いが、その誘いには乗れないな。」

「貴様！華琳様のお誘いを断るとは・・・叩き切ってくれろ！！」

夏侯惇が大剣を振りかぶり陽炎に襲い掛かる。

「春蘭！」「陽炎さん！」

既に大剣は陽炎の目の前にあった。

誰もが次の瞬間には陽炎が真っ二つになるだろうと予想する。

ただ真羅だけは冷静に状況を見ていた。

「まったく、血の気が多いな。」

「ば、馬鹿な!？」

陽炎は涼しい顔をして右手一本で夏侯惇の大剣をつまんでいた。対して夏侯惇は驚いた顔をしながら空中で止まっていた。

「だが相手との力量の差を見極められないと怪我するぞ?」

陽炎はつまんだ大剣を放し、夏侯惇が地面に降り立つ。

「貴様……一体……」

夏侯惇はまるで恐ろしいものを見るような目で陽炎を見る。

「まあ、これが戦場でなくて良かったな。そんな時は気をつけることだ。」

陽炎がそう言うのと夏侯惇は警戒しながら曹操の後ろに下がる。

「驚いたわ……あなたは一体……」

曹操もかなり意外だったようで食い入るように陽炎を見る。

「なに、ただの客将さ。」

「フン、ご主人様に挑むとは命知らずめ。」

真羅が小声で呟く。

「陽炎さんってどんだけ強いのか？」

一刀だけには聞こえていて、真羅に尋ねるが

「私の3倍は強いな。ちなみに私は呂布より強いぞ。」

「マジかよ・・・」

一刀は戦慄した。

呂布といえば三国志で最強と言われていた無敵の武将だ。

それより強い真羅と真羅の3倍の陽炎。

もう理解不能の次元がそこに存在した。

「まあ育った環境と鍛え方が違うからそうなったただけだな。」

真羅は懐かしむようにそう言う。

（あれ？どこかで聞いたことがある言い回しだけど）

陽炎が星に言った言葉。

真羅もそう言うということとはかなり違うのだろうと一刀は想像する。

そうこうしている内にも向こうの話は進んでいた。

「あなた、本当にウチに来る気は無い？あなたなら軍団長レベルになれると思うのだけれど。」

「悪いな。俺にはやらなければならないことがある。それを達成するにはアンタの下では無理なんだ。」

「へえ、私に出来ないことねえ・・・」

「ああ、そうだ。アンタだけじゃなく俺の目的を達成するのは諸侯の下じゃだめなんだ。」

「そう、ならいいわ。」

「華琳様！？」

「いいのよ春蘭。この男の目的とやらが達成できたら改めてこの男を貰うとするわ。」

「そうか、ありがたい。」

「でも、あなたの部下はいいでしょ？」

「何！？」

急に話を振られた真羅は驚いて抗議する。

「いいわけなかつ！私とご主人様は一心同体。死ぬまで共にいるのだ！！」

本当に陽炎の事になると感情をむき出しにするなと一刀は真羅を見やる。

その姿からは必死さがごく伝わってくるのだった。

「あら？あなたはこの男の目的とやらに関係あるの？」

「おおありだ！なんのために私とご主人様があんな地獄を・・・」

「真羅、それ以上はだめだ。一刀もいる。」

陽炎の鶴の一声で真羅が止まる。

「あ・・・申し訳ありません、ご主人様・・・」

真羅は落ち着いて後ろに下がる。

「部下をそこまで御せるその能力、やっぱり欲しいわね・・・どうかしら？私達これから頭に黄色い布を巻いた賊を退治しに行こうとしていたんだけど。」

「それを手伝って欲しいってか？」

「話が早いわね。そうよ、どうかしら？」

「黄色い布って・・・黄巾党か・・・」

一刀のその弦きを聞き逃すことなく

「あら、いいわねその呼び名。これからはあいつらの事を黄巾党と呼びましょう。」

曹操は1800年後にまで有名になる総称を彼らに付けた。

「で、この誘いは受けてくれるのかしら？」

「ご主人様・・・」

「解っている。これはいい機会だ。俺達の力を世に広める為のな。」

小声で話す2人にもう一度曹操が問いかける。

「で、どうなのかしら？」

陽炎は曹操に向き直り言い放つ。

「いいだろう、俺と真羅と一刀はこれから黄巾党の殲滅に同行しよう。」

曹操はニヤリと笑い答えた。

「よろしい、ではあなたに部隊を・・・」

「いや、いらない。ついでにそっちは黄巾党に攻撃しなくていいぞ。」

曹操側の人間は驚いて陽炎を見る。

「それはどういう意味？」

「そのままの意味だ。部隊もいらないしそっちは攻撃する必要も無

い。」

「あなた正気なの？相手は3千の軍隊なのよ？」

「なあに、たった3千くらい俺ひとりでヒョイツと捻ってやるよ。」

陽炎が右手をクイツと捻る。

「その言葉、嘘偽りはないわね？」

「ああ、出来なかったら腹切ってやるよ。」

「フフツ、解ったわ。ならいいでしょう。あなたの力見せて貰うわ。」

「ああ。」

陽炎はそう言って一刀たちの元に戻ってくる。

「いいんですか？あんな約束して。」

「ん？大丈夫だ。3千くらいものの数じゃないさ。」

「そうなのかなあ・・・」

「ちなみに呂布は独りで3万倒したっていう話だ。」

「さ、3万！？」

陽炎が今から倒そうとしてる数の10倍だ。

しかし3万人を独りで倒すという光景を想像できない。

「なに、俺だつて3万くらい余裕だぜ？地獄の10万人組み手で生き残つて見せたからな。」

「なんだそりゃ・・・」

まさか10万人を大陸中から集めて戦つたのではないかと戦慄する。

「昔の話さ・・・」

何故か哀愁が漂う場に曹操が割り込む。

「さあ、そうと決まれば出発よ。敵はとの距離はもう5里しかないわ。」

手を叩きながら皆をまとめる曹操に付いていく3人。

「でも本当に良かったのかな？3千人はいいとして曹操の所にいかないのって・・・」

「一刀、さつきも曹操に言つたが俺には目的がある。今はまだ話せないがその目的にはお前も必要なんだ。」

「じゃあここまで来た野暮用って・・・」

「ああ、お前を拾いに來たのさ。」

「何で俺がここに落ちることを？」

「予言されていたのさ。管路という占い師にな。」

「管路……」

この世界にとってまったくのイレギュラーの自分を予言した。
ならその管路とは何者なのか？

疑問が疑問を呼び頭の中で連鎖する。

「だがな一刀。」

陽炎の言葉に思考が止まる。

「俺もお前が来ることは知ってたんだぜ？」

「えっ!？」

一刀は陽炎を見る。

陽炎は一刀を見ず、ただ地平線に見える黄巾党のもたらす砂塵を見つめていた。

曹操の霸道（後書き）

すみません、真羅の格好また書くことができませんでした！><
なのでこの場を借りて書かせていただきます

真羅 格好

髪。。。少し長い黒髪を後ろで結んでいる。翠の黒髪版？と思って
くれればおk

上。。。黒い長袖のシャツに白の半袖のゆったりとした無地の服。
手には手甲を

つけている。

下。。。黒のタイツに膝、腰に銀色の鉄甲を装備している。足には
皮に鉄を貼り合 わせたブーツを装備している。

顔？んなもん美人に決まってんだろーが！！

という訳でまだまだ続きますー

感想・評価をどしどし下さい！><

それぞれの戦い方（前書き）

ストーリーが頭の中を駆け巡って行く！！

大まかなストーリーはもう頭の中では出来上がっているので後は文章にしていこう。

問題は文才の無さだけがww

それぞれの戦い方

黄巾党は久しぶりの対軍戦で興奮していた。

「野郎ども！！久しぶりの獲物だあ！一匹の残らず食い散らかしてやろうぜえ！！！！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

大將らしき男の言葉に黄巾党の連中はときの声を上げる。

（ついにこの時が来た！この乱世に乗じて俺も一角の勢力に成り上がってやるぜ・・・！）

大將の男は野心家であった。

「さあ、てめえら！総員突進！させると思っているのか？」何！？」

男の視界が一瞬霞み、グラツとした後ずれるように視界が落ちていく。

男がやっと自分が切られたと感じた時にはもう遅く、目の前に純白の羽織を着て細長く反った剣を持つ若い男が視界の隅に見えるのが黄巾党の大將の最後の光景だった。

「さあ、始めようか・・・」

男の呟きが黄巾党に染み込むように伝わっていった。

黄巾党との距離はもう一里ほどしか無かった。

曹操軍には適度な緊張感が行き渡っており、これから戦争をするということを実感させていた。

「さて、そろそろ接敵するけれど・・・本当にいいのね？」

試すように聞く曹操に陽炎は不敵に答える。

「ああ、さっきも言ったとおりそちらは軍を動かさなくていいぞ。俺独りで殺る。」

あまりの自信に思わず夏侯淵が曹操に耳打ちをする。

「華琳様、よろしいのですか？」

「構わないわ秋蘭。あの男から言い出したことなのだからこちらに非はないわ。それにあの男が死んだら心置きなく朱桓を仕官させられるでしょう？」

「そうですか、なら私から申し上げることはありません。」

夏侯淵は安心したように下がり、自軍より黄巾党に近づく形となる場所に立った3人を見ていた。

「朱然に朱桓。そして・・・北郷一刀か・・・」

夏侯淵の興味は陽炎や真羅よりも一刀に向いていた。

曹操は薄っすら気付いているようだったが夏侯淵は一刀の事を見抜いていた。

（あの男はなかなか侮れないな）

「さて、行つてきますかな。」

「御武運を、ご主人様。」

「ああ、一刀を頼むぞ。」

「ハッ！」

「陽炎さん、いつてらっしゃい。」

「おう！・・・時に一刀。」

急に陽炎が一刀に近づき尋ねてくる。

「お前ならどうやってこいつらを倒す？」

「え！？そんなこと急に聞かれても・・・」

「なに、この問いに答えは無いさ。お前の思つまを言つて欲しい。」

陽炎の真っ直ぐな眼差しに心が裸になっていくのを感じながら一刀はゆっくりと答えた。

「本当だったら俺は黄巾党の人達に呼びかけて降伏してもらえようにしたい。でも・・・」

「でも？」

「陽炎さんはさっき真羅に『力を見せ付ける』みたいなこと言ってたよね、だから今陽炎さんがやるべきことは・・・」

陽炎と真羅は黙って聞いてくれている。

「思いつきり暴れて陽炎さんが強いって事を天下に示すことだと思う。」

そう言った瞬間2人はフツと笑い陽炎は一刀の頭をグシャグシャと撫でる。

「そうだな、俺が今成すべきことはそれだよな。」

「一刀はやはりご主人様に似ているな。いい眼をしている。」

一通り終わった後で、改めて黄巾党に向き直る。

「いいか一刀、剣術には1対1の戦いだけではなく1対多数の場合も考えなければならない。」

向こうを向いたまま一刀に話しかける陽炎。

「お前の剣術もいつかは必要となる時が来る。だから一刀・・・」
最後の一言だけ顔を向けて一刀に笑いかける。

「今は見て学べ。お前の眼は劇的にいい。だから見るもの全てがお前の力になるはずだ。」

そして陽炎は背中中の剣に手をかけ、一気に引き抜いた。

陽炎の刀は刀身が青白く、電光を纏っているかのようなだった。そして峰側の鏢にローラーのようなものが付いており、そのレールは剣先まで届いていた。

「はあああああああああ！！」

掛け声と共に一気に黄巾党に突っ込んでいく陽炎。
彼の通った後には切り刻まれた人間の死体が残るばかりだった。

大将らしき男を斬ったあと、陽炎は20人くらいを斬り殺していた。
既に黄巾党の攻撃対象は陽炎1人になっており、3千人もの人々が陽炎の方へ襲い掛かっていくのだった。

しかし陽炎はまったく余裕で次の攻撃方法を思案するほどだった。

（次はどうするか・・・ただ殺すだけでは噂になりにくいしなあ・・・っと！）

すれ違いざまに黄巾党の1人を縦に真つ二つにする。

（流石にそろそろ飽きてきた頃だし、アレやるか！！）

周りの黄巾党を斬り捨てたあと、陽炎は構えを解き、刀を自分の目の前に横に寝かせるように持つ。

そして刀の峰部分に付いていたローラーが剣先へと凄まじい速さで滑るように向かっていく。

ローラーが通ったあとの刀身は更に青みを増し、青白いスパークが迸っていた。

「よく見ておけ、一刀・・・曹操・・・」

独り言を言いながら刃を地面に向ける陽炎。

「これが俺の・・・戦いだ！！！！」

一気に地面に刀を突き刺す。

その瞬間、バリバリバリと地面が激しくスパークする。

陽炎以外の人間が電撃を浴びた瞬間にはもう内部から焼かれており、一気にローストビーフになってしまった。

そしてその波紋は黄巾党全体に渡り、陽炎が突っ込んでから約30分後。

黄巾党3千人は電撃による内部火傷で全滅した。

プスプスと焦げ臭い煙を出し横たわっている死体の大地の真ん中で、

陽炎は刀を鞘に収め威風堂々と立っていた。

「終了だ・・・」

そのあまりの速さに味方は全員啞然としているのだった。

曹操は驚いていた。

あの朱然と名乗った男は自らの言葉通り、身一つで黄巾党に突っ込んで行き、見事全滅させてみせた。
しかも雷を操ってた。

焦げた死体の真ん中で立つ彼を見た瞬間、曹操は背筋をゾクリとさせた。

（あの男・・・何者なの？）

五胡の妖術使いなのか仙人なのか。
招待不明の男に曹操は激しく心躍らせるのだった。

（あれを倒してこそ我が覇道は成るというもの・・・！）

朱然は曹操の下には来ないといった。
つまりは遠からず敵になるということだ。

果たしてあのような化物相手に勝てるのか・・・

まともに戦ったらとても勝てそうにない。
自分の軍が全滅させられている光景が容易に頭に浮かんで来る。

だが勝たなければならない。

何故なら自分は霸王なのだから・・・

「よう、戻ったぞ。」

「陽炎さん!!」

一刀が物言いたそうに陽炎を見つめるもなかなか言葉が出てこない。気持ちが先行しすぎて言葉が追いついていないのだ。

それほど陽炎の戦いは凄まじいものだった。

「一刀、まあその話はまた今度にしようや。今は曹操と話をつけなきゃな。」

一刀のすぐ後ろを見る陽炎。一刀が振り向いたその先には夏侯惇と夏侯淵を傍らに控えさせた曹操が立っていた。

「あなた・・・本当に何者なの？雷を操るなんて聞いたこと無いのだけれど・・・」

「コイツア妖術でも無ければ仙術でも無いぜ。れっきとした原理があるんだ。」

「へえ・・・その原理とやらを教えてもらえないかしら？」

「残念だが企業秘密だ」

（オイオイそんなに軽々しく断っているのかよ・・・またか夏侯惇

が・・・ってアレ？)

一刀が夏侯惇を見るとただ警戒したように陽炎を見る彼女の姿があった。

(珍しいわね、春蘭が襲い掛からないなんて・・・)

それは曹操も同じで夏侯惇の異常さを感じていた。

「あなたはその力でああなたの目的とやらを目指すの？」

「ああ、そうだ。」

「そのためなら私と敵同士になるのも厭わないと。」

「当然だ。」

曹操軍の面々が殺気立ち始める。

いきなりの宣戦布告まがいの宣言にたじろぎながらも君主を守らんと必死な顔立ちだった。

「だが今は時が満ちていないんでね。悪いが今は相手は出来ない。」

「そう、良かったわ。あなたとやりあったら多分、いや絶対に全滅だったろうね。」

「ありがたい。それでは俺達はこれで荊州に戻るとしよう。」

「待ちなさい。」

一刀達を手招きして行こうとする陽炎を引き止める曹操。
その瞳には僅かに心配の色があった。

「その北郷一刀とかいう男。何故あなたについているの？」

「たまたま俺が通りかかったただけでまったくの偶然だ。」

嘘だ。と一刀は言いたかったが陽炎に不利な方に話が進みそんな感じだったので黙っておく。

「そう、偶然。ねえ。」

曹操は一刀と陽炎を交互に見やる。

「私には必然にしかみえないけれど、まあいいわ。それじゃあね。荊州の雷使いさん。」

曹操はそれだけ言って自分の軍隊をまとめて陳留のあるであろう方向に向かって行った。

一刀はずっと見ていた。

夏候惇の奇襲と黄巾党の殲滅。

夏候惇の時は意識していなかったが黄巾党の時は言われたのでちゃんと見た。

真羅に守られながらだったが、しっかりと陽炎の手元、いや陽炎を見ていた。

見た理由は陽炎が見ると言ったから。

（あれ？その前に・・・）

陽炎は自分が剣術をやっていたことを知っていた。

（俺陽炎さんに剣道部所属だって話したっけ？）

確か話してなかった。自分のことは『天の御使い』としかこの世界では言っていない。

何故陽炎は知っていたのか？それとも自分で話したのか。

胸に出来た靄のような疑問は荊州に入るまで一刀の胸中を苛み続けるのだった。

それぞれの戦い方（後書き）

いやゝ陽炎って何者なんでしょうねゝ？（オイ

今までの文で矛盾もあつたかも知れませんがそれは今後への伏線と
いうことで納得して下さいm（- -）m

次回からは荊州編（？）に入ります。

またまたマイナーながらも個人的に大好きな人をだしますよーb b

ご意見・ご感想・評価をどしどし受け付けております。

ちよつとしたことでも作者の励みになるのでヨロシクお願いします。

徐庶の奇妙な冒険（前書き）

タイトルは思いつきでつけましたww

あれ・・・？

今思った・・・

徐庶は・・・

そんなにマイナーじゃない！！

にゃあああああああ！！！！！！

という訳で徐庶ファンの皆さんすみません。
題名通り出します。

なにせね・・・好きなんでねww

徐庶の奇妙な冒険

曹操と別れてから5日。

一刀達3人は既に荊州に入っていた。

3人は商隊の護衛を兼ねて馬車の荷台に乗せてもらっていた。

途中、何度か山賊が襲い掛かって来たが、ことごとく陽炎が追い返しているため商隊は無事に荊州に着いた。

陽炎は荊州の中で最北の新野を任されているらしく、荊州入りしてからというものの、訪れる村々で

「おお、朱然様、またこのような辺鄙なところへ・・・ありがたやありがたや」

「朱然様じゃねえか！また抜け出して・・・って、今日は朱桓様も一緒に。失礼したね！」

「しゅぜんさまー遊んでー」「遊んでー」

陽炎の人気は新野の中でトップクラスであり、よく政務を抜け出しているらしい陽炎の顔は新野周辺の土地に広まっていた。

「すごいね・・・陽炎さん人気だなあ。」

「ご主人様は時折暇を見つけては街や村へ出掛けているからな・・・暇じゃない時にも出掛けていますか・・・」

真羅がギンツと陽炎を睨み付ける。

陽炎は気付いていない振りをして村人に手を振っていたが、そのこめかみや額には冷や汗が浮かんでいた。

「さて、もうすぐ新野城だが・・・少し寄り道するぞ。」

「寄り道？」

陽炎の提案に一刀は聞き返すも

「なに、野暮用さ。」

曹操に言ったようにはぐらかした。

「ああ、水鏡女学院ですね。」

真羅が進行方向を見て納得したように言う。

「水鏡女学院？」

なんとも甘美な響きに一刀はオウム返しに聞き返す。

「水鏡先生という女性が営んでいる私塾さ。門下生は全員どこかの太守の元に余裕で仕官できるくらいになるんだぜ。」

すごいよなと陽炎が説明してくれる。

「その水鏡女学院ってあとどれくらいで着くの？」

「そつだな・・・ここからだと一刻（2時間）で最寄の街に着くな。」

「一刻かぁ・・・」

随分暇だなと一刀は荷台の中にあつた藁袋に倒れこむ。

「なんだよ、5日間頑張つたろ。一刻くらい我慢しろ。」

「ヘイヘーイ。」

このまま寝ようかと思ひ瞼を閉じる一刀。

そして思つたより早く闇は訪れ、一刀は深い眠りの世界に堕ちていった。

「・・・・・・寝たか？」

「ハイ、寝ました。」

「そうか・・・・・・大丈夫かな・・・俺・・・」

「今更弱気ですか？」

「いや、違うさ・・・ただ、これで良かったのかなって思つてさ・・・」

「ご主人様、貴方は私たち全員の想いを背負つて立つておられる。そのことを努々忘れることの無きよう。」

「解っている。お前には無理をさせるな・・・」

「それは元より覚悟の上、何処までも付いて行きますよ。ご主人様。」

「

真羅はクスリと笑う。

「ああ、頼んだよ。」

2人の間に流れているのは哀愁とも沈黙とも言えない空気だった。

荊州・新野城の近くの街

新野城の近くであるおかげか、この街はすこぶる治安が良く、犯罪も1日に1回あるかどうかというこの時代では非常に稀な街であった。

そこに降り立つ影が2つ。

「真羅、一刀は？」

「気持ちよさそうに寝ていたのでそのままにしておきました。」

「つまり置いて来たと・・・」

「この商隊は今日ここに留まるようですから離れ離れになるということは無いでしょう。」

「いまいち心配だが、まあいいか。」

そのまま水鏡女学院に向かう2人。

「ぐぐぐZZZ・・・むにやむにや・・・」

一刀は荷台の中に置いてけぼりだった。

水鏡女学院

飾り気の無い質素な建物だが内装はしっかりしていて、来た者全員に清楚さと優雅さを印象付けるフォルムを誇っていた。

その中庭で独り洗濯物干しに励む妙齡の女性がいた。

その女性に近づく2つの影。

「あら、珍しいお客様なこと。」

女性は微笑みながら2人を迎える。

「久しぶりですね、水鏡先生。」

同じく微笑みながら頭を下げる陽炎。

この女性こそ教職員3人という少なさで30人の生徒を受け持っている水鏡先生その人であった。

「で、新野の太守様がこんな所に何の御用かしら？」

「やめて下さいよ、今までどおり陽炎でいいですよ。」

陽炎は苦笑しながら続ける。

「この前新しい奴を見つけましてね、ソイツに1人つけてやりたいんですよ。」

「それでウチから誰かを選ぶ気なのね。あ、真羅ちゃん、お茶でも飲む？陽炎君も。」

「もらうとしようか、真羅。」

「ハイ、頂きます。」

そのまま縁側へと移動する3人。

水鏡先生だけはお茶を淹れ台所へと入っていった。

「ここだけは平和なんだな・・・」

もう春は過ぎていたが桜の花びらが中庭に舞う。

「そうですね、まるでここだけ別世界の様・・・」

真羅も穏やかな顔で中庭に舞うピンク色の花びらを見やる。

しばらく春つららな時間を過ごしていたが、その中に人が1人入ってくる。

「おまたせ、さあ、お茶菓子もあるわよ。」

人数分のお茶とお茶菓子を盆から取り出す水鏡先生。

ここに一刀が居たら「大和撫子だあ」と言い出したであろう。

それほど絵になる人物であった。

「それで、その新しく入ったっていう子は？一緒じゃないの？」

お茶を飲みながらしまったという顔をする陽炎。

「げ、置いて来ちまった。」

「あらあらまあまあ」

クスクスと口元を押さえながら笑う先生、年甲斐も無くドキリとしてしまう陽炎。

「ご主人様……？」

真羅の痛すぎる視線で赤みが差していた顔が一気に青くなる。

「どうせならその子に選ばせるべきね。」

「ごもつともかな……」

「おそらく一刀なら自力でここまでこれるでしょうが……心配ですね。」

「あら、真羅ちゃんが陽炎君以外の子の心配なんて珍しいこともあるものね。」

真羅は心外だと言う感じで首を横に振る。

「ご冗談を、一刀はご主人様が求めた人材。それ相応のモノを持つ

ていなければ勤まりません。」

「ということは……始めるのね？陽炎君……」

「ええ……いよいよですよ。」

クイツと湯飲みを傾け中のお茶を飲み干す陽炎。

「俺達の願いはね。」

一刀は街の中でおもいつきり迷っていた。

眠っている所を商隊の人に起こされて既に2人は居ないといわれて慌てて飛び出したらいいものの、初めての街で人ごみに押される内によく解らないところに来てしまっていた。

「どうしよう……学院の場所も解らないし……知らない場所だし……」

現代っ子の一刀には人に聞くという選択肢はあまり無かった。

そんな一刀の目に1人の少女が目に入る。

白いワンピースのような服を着て日光を跳ね返すほどの流した長い銀髪を持つ14歳くらいに見える少女だった。

その少女は危なっかしく買った物の入った買い物籠を運んでいた。

「つとと、わわっ！？」

その少女が一刀の目の前に来た辺りで転びそうになる。

「あ、危ない・・・！」

とつさに一刀は少女の体と買い物籠を掬い上げる。

少女の体と買い物籠は地面に付くことなく、一刀が全て無事にしていた。

「つと、大丈夫かい？」

「あ・・・ハイ！ありがとうございます！！」

少女は一刀から離れると深くお辞儀をする。

「いや、それより怪我はないかい？」

「ハイ！何処にも怪我はありません！」

結構不自然な敬語を使ってくる少女だったが、

（これはこれでありだな・・・！！）

一刀のストライクゾーンは広がった。（つたくよあ・・・エロゲ野郎がよあ・・・）

「ところで君は・・・」

「あつ、私ですね。私は徐庶、字は元直といいます！」

「へえ・・・徐庶ちゃんね。」

「はう！？ちゃん付けですか！？流石熟練度が違うのです！」

いきなり何を言い出すんだ！？と一刀はたじろぐもコレがこの世界なんだ×2と自分に言い聞かせる。

「えっと・・・ちゃん付けは流石にだめだったかな？」

「いえ！むしろ歓迎と言うかこの歳でちゃん付けは恥ずかしいというか・・・」

徐庶は赤面してイヤンイヤンしている。

「この歳って、君何歳？」

「はう！？初対面なのに歳を聞かれちゃいました！！」

ああ、めんどくさい・・・

そう思いながらも紳士な一刀は相手のペースに合わせる。

「ゴメン、失礼だったね。」

「いえ、大丈夫です・・・ただちよつと興奮しちゃって。」

なんとか冷静になった徐庶に自分の行き先を尋ねることにする。

「そうだ、俺水鏡女学院って所に行きたいんだけど・・・知ってる

かな？」

すると徐庶は驚いたように一刀を見て答えた。

「はう！？まさかの私の行っている私塾ですか！？」

「ええ！？じゃあ君は水鏡女学院の？」

「ハイ、水鏡女学院の生徒です。」

まさかの出会いに喜ぶ一刀。

「あの、もし良かったら用事が終わってからでいいから案内してくれないかな？」

「あ、もう買い物は済んだので今から学院に帰るところでした。案内します。」

（ああ、いい子だなあ・・・この世界で今まで会ってきた人の中にここまでいい人が居ただろうか・・・）

思わず涙が出そうになる一刀。

なんとか涙を飲み込んで彼女に付いていった。

水鏡女学院に着いたのは太陽が西に傾きオレンジ色に変わっている頃だった。

「つきましたあ！」

改めてこの世界の人はずいと思う。

街から1時間くらいの山道を同じペースで歩いたのだ。

もちろん現代っ子の一刀に耐えられるはずは無く、着く頃には足が棒のようになっていた。

「ハア・・・ハア・・・やっと・・・着いたか・・・」

「はう！？どうしました北郷さん？さては欲情ですか？興奮ですか！？」

「興奮してるのは君だよ・・・徐庶さん・・・」

徐庶の話を聞くと歳は「ピー！」歳らしく、「えええ！？そんなとs「やめてくださいーい！」ぐふおお！」というやり取りがあり、一刀はちよつとだけ上に見ていた。

「はう・・・すみません・・・」

またもや赤面する徐庶。

そうやら彼女には妄想癖があるようだと一刀は頭の人物ファイルに書き足しておく。

「あそこです！あの建物ですー！」

ピョンピョンと飛び跳ね山の上にある建物を指差す。

確かに学院っぽい建物がそこにはあった。

学院の前に来ると徐庶が元気な声で帰りを告げた。

「水鏡せんせい！ただいま帰りましたー！！」

（ああ、かわいいなあ・・・お持ち帰りしたいなあ・・・）

一刀が手をワキワキして今にも飛び掛ろうとすると奥から声が聞こえてきた。

「お帰りなさい、買い物は済んだのね。」

静かな女性の声と

「おう一刀、よくここまで来れたな。褒めて使わそう！」

聞き慣れた男の声が聞こえてきた。

「・・・なんで居るんですか陽炎さん・・・」

心底呆れた一刀の声が学院の門に響いた。

「おや、一刀。よく来れたな。」

真羅まで同じ事を言ってくる。

「俺を舐めないでよね・・・」

流石に陽炎と同じ轍は踏むまじと虚勢を張る一刀。

「ふん、か弱い少女に体力で劣っているくせに何を言うか。」

「見てたのかよ!？」

「やはりそうか。」

フフンと鼻で笑う真羅。

鎌をかけられてしまったという表情をする一刀。

どうやら口でこの世界に勝てる相手はいなさそうだと察する一刀に真羅が追い討ちを掛ける。

「その様子ではこの大陸に口で勝てる相手はいないな。」

もうやめて!一刀のライフはもうゼロよ!!

水鏡女学院の学長室。

いわゆる校長室のような場所に5つの影。

西側に窓が設置されたその部屋は5人の影を扉側の壁まで伸ばしていた。

影の正体は一刀、陽炎、真羅、水鏡先生、徐庶の5人。

「さて、陽炎君の言っていた話だけれど・・・」

ゲンドウポーズで仰々しく話し始める先生。

逆行が混じって場がかなり重々しい雰囲気になる。

「先生、そこまですることは無いでしょ・・・」

陽炎の陽気さでさえ敵わない。

しかし先生は構わず続ける。

「その一刀君にウチから1人付けたいという話のことだけれど・・・」

先生は未だポーズを解かない。

一刀は陽炎から既に話を聞いていたのでさほど驚かない。

「この子はどうかと思うの。」

先生は右手を使い徐庶を指す。

「えええ！？」「はうう！？」

一刀と徐庶は同時に驚く。

「あなた達2人はさっき街からここまで行動を共にしたのでしょう？お互いどんな人が解らない人を付けるのは危険だし、あなた達ならその心配も無いしこの子もそれを望んでいるようですものね。」

「はう！？水鏡先生、それは・・・その・・・」

赤面し俯く徐庶。

少なくとも嫌がってはいなかったようだが・・・

「すごいな一刀、もう手を付けたのか？」

陽炎がニヤニヤしながら聞いてくる。

「まったく、女癖の悪い男だ……」

真羅は汚物を見る目で一刀を見ていた。

どうしたものかとあくせくしていた一刀だったが徐庶の声に救われる。

「……解りました……不肖、この徐元直。誠心誠意本郷様にお仕えます。」

最初は水鏡先生に言い、その後で一刀に臣下の礼を尽くす徐庶。

「ええつと……何も言えないけど……」

そこまで言ったところで陽炎が肘でこついてくる。

「一刀、彼女は君に仕えると言っているんだ。受けるかどうかはお前次第だ。」

そう言って下がる陽炎。

見ると徐庶は下げた顔を真っ赤にしていた。
彼女も必死なのだろう。

（ここで断るようなら……男じゃないよな。それに……）

「解った。徐庶さん。ヨロシク頼む。」

そういつて右手を差し出す一刀。

徐庶はその手をキョトンと見る。

「あの、これは？」

「握手だよ。これから俺達は仲間だ。」

初めて会った時の陽炎のように握手を求める一刀。

心の中で陽炎を意識しているのか、それとも自分の行動なのか。

それは一刀自身にも解らないが、

（それにこんな可愛い娘と一緒に居られるなんて夢のようだぜえ！
！）

そこに邪な気持ちがあるのは確かだった。

おずおずと徐庶が右手を掴む。

笑いかけてあげると徐庶はとてつもなく赤くなり俯いてしまった。

「これからヨロシクな、徐庶さん。」

「……つむぎです……」

「ん？」

「紡つむぎです……私の真名……」

「真名、俺に預けてくれるのかい？」

徐庶――紡はまだ俯いたまま。

「これから私の主様あるじとなるのですから、真名くらい当たり前です。それに呼び捨てで構わないです。」

「そうか・・・じゃあこれからヨロシクな、紡。」

「ツツ、ハイ!!」

顔を上げる紡。

その顔は赤くなりながらも、元気な笑顔を見せてくれた。

徐庶の奇妙な冒険（後書き）

水鏡先生――司馬徽さんの事についてはアニメ版を見てくれれば
okです。

徐庶かぁ・・・また難しいキャラを出しちゃったぜ・・・w
イメージ的にはクドを思ってくれればいいですが性格的には尽くす
女という感じで行きたいと思いますヨbb

感想・評価をドシドシお待ちしております!!><ノ

新野城の仲間（前書き）

やっと新野に着きました・・・

今回は陽炎の仲間が出てきますよー

え？またオリキャラ出す気かって？いやいやww

ちゃんと原作キャラをだしますよbb

陽炎チームの人々にはそれぞれ称号をつけるか・・・

新野城の仲間

水鏡女学院のある街から1日、一刀、紡、陽炎、真羅の4人はすでに新野城下の街に着いていた。

その街は平和そのもので道行く子供達の顔は笑顔のみ、聞こえてくる商人の呼び込み声は威勢がよく一区域先まで届かんばかりの大声だった。

「やっぱりすごいです。学院の近くのまちより活気がある街はここ以外に挙げられません。」

紡は人ごみを一生懸命かわしながら笑顔で陽炎の街を褒め称える。

「確かに・・・陳留からここまで色々な街を見たけどコレには流石に劣るなあ。」

一刀も陽炎に付き合わされて道中色々な街を見て回ったがこの街以上の平和さは初めてだった。

「当たり前だ。ご主人様の治めるこの地に平和以外の文字は存在せん！」

真羅がその大きな胸を張って誇る。

「それより私達の居ない間かなり仕事が溜まってそうですし・・・」

「なあ！一刀、紡。後で街を見て回らないか？今なら裏通りまで全部教えちゃうぞ！！」

陽炎が焦りながら真羅から目を逸らすも真羅がそれを逃がすはずは無く、

「ご主人様。見回りも結構ですが政務を惰つてはこの平和もすぐに去ってしまいます！」

乱世の中で平和というものは砂上の城なのだ。

擬似的なものといえどそれを維持するには今の陽炎のように顔を青くしてまで頑張る必要があるのだ。

「解つてるよチクショー・・・何故俺だけこんな目に！」

陽炎は抗議をしたいだけするも、いくら言つたところで城の中に待っているであろう政務が減ることはないと言陽炎自身がよく知っていた。

紡はといえば襲い掛かる人ごみに悪戦苦闘しながらも懸命に付いて来ていた。

「主様ー！助けてくださーい！！はああああうううううー！！」

（嗚呼・・・可愛い・・・）

当の主様はそんな紡を見てハアハアしていた。

しかしこのままでは紡が遭難してしまうので一刀は人ごみから紡を救い出す。

「ハア・・・ハア・・・ありがとうございます、主様！」

少し乱れた衣服を整えながら息を切らしお礼をいう紡。

その姿に思春期の一刀が興奮しないはずが無かった。

（ヤベエ！ギョツってしてえ・・・！！）

もう限界だと一刀は手をワキワキさせながら紡に近づいていく。

しかし一刀の手は紡に届くことは無かった。

「お、見えてきたぞ！アレが俺の城だぁ！！」

まるで自分のおもちやを自慢する子供のようにはしゃぐ陽炎。

どうしてそこまではしゃぐのかと一刀は陽炎を見ると陽炎は一刀にアイコンタクトをして来た。

なにになに・・・

『お前の好きにはさせないぜ、一刀！まだお前は童貞を卒業するに早すぎるぜ！！』

『なっ・・・！この野郎！！』

その内容はとてつもなくひどいものだった。

「着きましたよ、ご主人様。」

真羅が到着を告げる。

目の前には人5人ほどの高さのある門だった。

「はうゝ高いのです。」

紡は感慨深そうに城壁を見上げる。
首を痛めそうな光景だった。

「さて、入ろうか。」

陽炎の顔は門の警備兵にまで知れ渡っており、最早顔パス状態だった。

新野城内・玉座の間

何気にこの世界で始めてみる中華風の部屋に感嘆していた一刀と初めて入る玉座の間に緊張したような呆けているような表情をする一刀。

2の様子から解るのはどちらもおのぼりさんっぽいことだった。

「ちょっと待っててくれ。俺の仲間を紹介したい。」

1人玉座に座りながら言う陽炎。
その傍らには真羅の姿もある。

「主様ゝあれって何ですか！？剣が何本も壁に刺さってますよ！」
見れば壁のそこら中に剣やら槍やらが刺さっている。

天井も同様だった。

「いや、真羅がたまに暴走するもんでな。その名残だ。」

「誰が暴走させてると思ってるんですか誰が・・・」

真羅は早速槍を構えていた。

それにしても遅いなあと思っているところに、扉からの声が混じる。

「陽炎、入るぞ。」「失礼しますよ、陽炎様。」

そう言って入ってきたのはゆったりとした白い道士服を着た2人の男だった。

「なっ！？北郷一刀！何故ここに・・・！」

2人の内銀髪青年が一刀を見て驚いたように声をあげる。

「オイ陽炎、コイツはどういうことだ！？」

その疑問の矛先は陽炎に向いたが、陽炎は気にすることなく

「拾って来た。これで始められるぞ？」

何を始めると一刀は思ったがこの場に介入しない方がいいと判断し何も言わない。

「始める？まさか北郷を使うのか！？」

「左慈、どうやらそのようです。ここは従いましょう。」

左慈と言われた銀髪の青年はぐうと呻くも納得したように一刀達の所にやってくる。

紡はいきなり大声をあげた左慈に怯えたようで、一刀の後ろに隠れていたが左慈は構わず言う。

「どうせ奴のことだから俺達には何も言っていないんだろう。俺の名は左慈。字や真名は無い。」

(字に真名が無い！？それって・・・)

まるで自分と同じじゃないかと聞こうとするももう1人の眼鏡を掛けた黒髪の青年に遮られる。

「それでは私ですね。私の名前は宇吉。左慈と同じように字と真名がありません。」

左慈と名乗った青年は武道家のように真っ直ぐな性格にも見える。逆に宇吉と名乗った青年は曲がってそうで、かなり油断ならない男という印象を与えてきた。

「俺は北郷一刀。さっき俺の名前を言ってたけど俺のことを知っているのか？」

一刀のその問いに左慈が答える。

「俺達は管路とかいう占い師風情よりよっぽどいい情報があるんだよ。あんまり気にするな。」

言い訳を許さないといった感じで捲くし立てる。

「そ、そうか・・・あ、ほら紡、挨拶挨拶。」

やっと一刀の影から紡が出てくる。

「は、はうゝじよ、徐庶です。字は元直なのです。」

緊張と恐れが混じっているようでかなりガチガチになってしまふ紡。

「ほう、これはまた左慈が喜びそうな子ですね。」

宇吉がとんでもないことを言う。

「馬鹿野郎！だれが（21）だ！！」

何故そんな言葉を知っているんだ・・・

そんな一刀の疑問は口から出ることはなく、紡の援護をすることは叶わなかった。

「はうゝ！？主様ゝ！」

半べそになりながら一刀の腰にしがみついてくる。

「アンタ・・・ロリコンなのか・・・？」

一刀も若干白い目で左慈を見つめる。

「グッ・・・！貴様のせいだ宇吉！！」

左慈が宇吉に蹴りを繰り出す。

武道家顔負けのその蹴りを宇吉は避けることなく受け止めていた。

「アアッ！痛い・・・！左慈の愛が痛い！」

オイオイ・・・（汗）

（大丈夫かコイツラ・・・）

一刀は癒しを求めて紡を見るが、紡は頬を染めて2人のやりとりを見つめていた。

紡君・・・お前も腐か・・・！

「ハア・・・今更ですが本当にこの面子で良かったのですか？」

「・・・ゴメンちょっと後悔してる・・・」

真羅はため息を抑えようとせず、
陽炎は目頭に指を当てていた。

「陽炎さん、仲間って言ってたのは・・・」

「ああ、この2人だ。数で言えば2人しか居ないとも言えるがこの2人はかなりやるぞ。」

宇吉はともかく左慈は戦場ではかなり使えそうだった。

「あと一刀。ここではお前に訓練をつませようと思っている。」

「訓練・・・ですか？」

「ああ、それについては左慈に任せる。」

「よし！任せる！！」

左慈が手をパキパキさせながらニヤリと笑う。

一刀はこれ以上無い心配だという顔をしながら陽炎にアイコンタクトするも陽炎は華麗にスルーしてくれた。

「北郷、覚悟しておけ。今までの鬱憤を晴らさせてもらっぞ！」

左慈は若干興奮気味に手をワキワキさせてくる。

とても最初入ってきたクールボイスの持ち主とは思えなかった。

「あとお前には政務もやってもらっからな。お前は字がよめるか？」

そう言って1つの竹簡を渡してくる。

一刀はソレを広げるが中身は漢文で、まったく読めなかった。

「・・・読めない・・・」

「そうか、じゃあこの大陸の字と政務のイロハをそっだな・・・宇吉に教えてもらえ。」

陽炎は真羅と宇吉を交互に見比べたが、宇吉を選んだようだった。

「それから紡ちゃん．．．．紡ちゃん？」

陽炎が声を掛けるが紡は反応しない。

「左慈×宇吉．．．いや、逆転もありかも．．．そこに主様も．．．
ブツブツ．．．」

しがみつかれたままの一刀だけにはその呟きが聞こえていたが、正直聞きたくない内容だった。

「ほら紡、呼ばれてるぞ！」

「そこにまさかの陽炎さんも参戦．．．四角関係．．．趙上級者向けですね．．．ってハイ！！！！？」

「大丈夫か？紡ちゃん。」

「あ、ハイ！大丈夫です！」

やっとトリップ状態から戻ってきた紡。

何故か妄想を膨らまさせていたのに話だけはちゃんと聞いているようだった。

「紡ちゃん。君は一応一刀の部下扱いだが、政務もやってくれるか？」

「私にやらせてくれるんですか？」

「ああ、俺と真羅と宇吉だけでは手が足りないんでな。一刀もその

内加わるがいつになるかは解らない。猫の手も借りたいんだよ、ウチは。」

陽炎の許可を得て顔をパアアと輝かせる紡。

どうやら彼女は学院でも政事面・軍事面での成績は良かったようで、本番が出来ることが嬉しいのだろう。

「ハイ！やらせて下さい！！」

陽炎に向かって深くお辞儀をする。

「あ、大丈夫ですよ主様。私の主はあなた様だけですから！」

「紡……」

満面の笑みでこんなことを言われてはもう一刀はトキメクことしか出来なかった。

「……（ムカツ）さて一刀、紡ちゃん。お前達の部屋だが……」

「私は主様と同じ部屋がいいです！」

「ハアアア！？」

一刀と陽炎は同時に紡を見る。

どうやら紡も自分が言ってから気付いたようで、しばらくすると「は、はう……」と言って顔を赤らめて俯いてしまった。

そんな中真羅が声をあげる。

「いけませんご主人様！この性欲の塊のような男の部屋に紡を放り込むなど、虎穴に赤子を放り込むようなもの！おやめ下さい！」

「アンタに俺のなにが解るってんだよ！！」

性欲の塊という実に不名誉なあだ名をもらって顔を赤くしながらも否定はしない一刀。

底の読める男であった。

「フン、お前が時々紡を邪な眼で見ていたのを私が見逃していたとも思っただのか？浅はかなり！」

真羅が勝ち誇ったように指を指してくる。

一刀は何も言い返せない自分がひどく恥ずかしかった。

（チクシヨウ・・・いいじゃないか、だって可愛いんだもん！抱きしめたいんだもん！）

一刀が心の中で涙を流していたところに左慈の手が肩に置かれる。

「・・・気にスンナ、誰にでも他人に誤解されるような趣味の一つや二つあるさ。」

この時ばかりは左慈がとてつもなくいい奴に見えた。

「・・・ハラシヨ・・・！」

熱い抱擁を交わす一刀と左慈。

熱い視線を向ける紡と宇吉以外の人間には（使用人や警備兵含め）白い眼で見られていた。

（いいなあ、混ざりてえなあ・・・）

新たに生まれたロリコンの集いに全力で参加したい陽炎であつたが、このトップである手前、下手なことは出来なかった。

「まあいい、紡ちゃんの部屋は真羅の隣にしよう。たしかあそこ空いてたしな。あと一刀は・・・まいった、いい部屋がないな・・・」

陽炎が頭を悩ませていると横から真羅が言ってきた。

「ご主人様、あの部屋はどうでしょう。」

「え！？あの部屋でいいの！？」

「ええ、仮にも天の御使い。あの部屋も制することが出来るでしょう。」

勝手に天の御使いという称号を使われているうえに『あの部屋』という不吉なワードも聞こえてくるのを一刀は拒否したかった。

「よし、大丈夫だな・・・一刀。」

「・・・ハイ・・・」

「む、不満そうだな。ご主人様の選ぶ部屋だ。間違いは無い。」

本当かよと食い掛かってやろうかと思つたが真羅相手に勝てる気が

しないので睨むだけにしておく。

「まあ、頑張ってくれ。そのうち引越しも考慮してやるから・・・我慢してくれ。」

（オイオイ・・・何でそんないわくつきの物件があるんだよ・・・不動産会社出てこいよ！）

心の中でインチキ不動産のイメージが沸いてくるがこの時代にそんな会社はないだろうと一刀は思考を止めて素直に従うことにする。

「解りました・・・その部屋にしますよ。」

「ようし！じゃあ決まり！！左慈と宇吉は今後の話もあるだろうか
ら一刀を案内してくれ。紡ちゃんは真羅が案内してくれ。それじゃあ解散！！」

陽炎が手を広げて解散を宣言すると警備兵以外の人間が自由に立ち去る。

「さて北郷君、行きましようか。」

宇吉が一刀に手招きをして部屋へと案内しよとしてくる。

既に紡は真羅に連れられて自分の部屋に行ったようだった。

「何をグズグズしている。さっさと行くぞ！」

左慈も宇吉に付いていったので一刀も付いていくことにする。

その途中、一刀は考え事をしていた。

（まず部屋にいつてすることは・・・）

色々あったがまず思いつくことは1つだけだった。

（左慈とロリの素晴らしさについて一晩語り合うか・・・！）

新野城の仲間（後書き）

一刀の左慈・宇吉への疑問は消えてはいません。

この作品では左慈がかなり壊れます。（原型があるかないくらい）
一刀君も若干ロリコン入ってます
え？作者の趣味じゃないかって？

オイオイ・・・ロリは欲情するものじゃない、愛でるものだろ？

という訳で一刀君と左慈以外ロリには欲情しません

感想・評価ドシドシお待ちしております！><

ある部屋（前書き）

恋姫の小説である「外史に紛れた者」完結しました！

僕の作品では無いのですが作者様おめでとうございます！！
面白いので皆さんも見てくださいいいじゃないでしょうか。

というわけで始まり始まり！

ある部屋

一刀が陽炎に宛がわれた部屋。

玉座の間、兵舎、食堂など城の主要施設に近く、窓は南側という最高とも言える部屋だったが1つ問題があった。

それはその部屋に近づくだけで解るものだった。

「なんだ！？この凄まじいまでのプレッシャーは！？」

一刀はあまりのその異様さにその部屋の2メートル前でたじろぐ。

左慈はそこそ慣れてはいるようだったがそれでも顔を顰めている。

「クソッ！何度来ても胸クソ悪いぜ！」

左慈が吐き捨てるように言うのも別に悪くはない話だった。

ただ宇吉だけは平気そうだったが。

「なに、こういった陰湿な感じは別に悪くはないと思ってますから。」

「テメエの性格が悪いだけだろ！」

流石にちよつと慣れてきた2人のコントもこの部屋の前では場を明るくさせてくれるという絶大な効果を発揮していた。

「なあ、まさかここが・・・」

「ええ、北郷君の部屋ですよ。」

やつぱり・・・と思いながらも予想はしていたのもう諦める。

「入ってみる。」

「えええ！？」

左慈のダメ元でもイイから！と言わんばかりの視線に一刀はオズオズとそのドアのノブに手を掛ける。

扉は思ったよりも軽く、一刀はさほど苦勞無く扉を開けることが出来た。

しかし一刀は開けてしまつてから後悔する。

（なんだこの異様な暗さは！？）

今度は口にするには無かつたがその雰囲気的にも物理的にも暗いその部屋に思わず後ずさりする。

しかしその動きはすぐ後ろに居た左慈と宇吉に止められる。

しかもあるうことか2人は一刀を部屋へと押し込もうとしていた。

「何をやっている、さつさと入れ。」

「ささ、入りましょう北郷君。」

2人の裏切りに一刀は踏ん張りながら耐える。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！何なんだこの部屋は！？」

その問いに左慈が答える。

「ここか？ここは、魔窟だ。」

「まくつう！？」

「・・・ああ・・・」

そう言つて左慈は顔を逸らした。

「ここには魔物といわれるものが住んでいるようでねえ、この雰囲気はその魔物が出していると皆言うのですよ。」

まあ私は好きですけどねと宇吉がまったくありがたい説明をしてくれる。

「だったら尚更帰ろう！今からでも陽炎さんに変更要請を・・・」

「あ、それなら真羅が城の勤務表の部屋覧にお前の名前を赤文字で書いてたぞ。ありや変更は無理だな。」

へへッと左慈が嘲るように一刀に止めを刺す。

一刀は愕然としながら踏ん張るのをやめ、2人に押されて部屋の中に入る。

それに続いて2人も入って来た。

「もしもし、居ますかー？」

宇吉が部屋全体に尋ねかける。

何をやっているんだろうと思いつながら宇吉を見るも、本人はいたって真面目であり、その隣に居た左慈もまた真面目な顔をしていたため、とても何か言える雰囲気では無かった。

「もしもし」

4、5回呼んだところで部屋の雰囲気が変わった。

『何か用か？』

何故か空間から声が聞こえてきた。

「えッ！？」

一刀は思わず耳を塞ぎ周りを見渡す。

しかし少し豪華な部屋の内装と一緒に来た2人以外何も見当たらなかった。

『宇吉か、それに左慈も・・・何かあったのか？』

また声が聞こえてくる。

低い、20代後半の男のような声だった。

「ええ、貴方に用がありましたね。」

宇吉が空間に話しかける。

傍から見たら狂人だが、一刀と左慈にはまったく冗談に見えなかった。

『ほう・・・用とな？』

「ええ、この青年です。」

まるで空間全体が一刀を見るかのような雰囲気になった。

『このガキがどうかしたのか？まさかこのガキが鍵だということのか？』

（鍵？ガキとかけてて語呂がいいな）

そんなふざけた思考を出来る一刀の精神はまだ強靱さを保っていた。尚且つ『鍵』という単語への疑問を持つことも忘れない。

『ふざけた事を考えるなガキ！』

思考が読まれた！？

一刀は驚いて「わ、悪い。」と言ってしまつ。

『フン、このようなガキを選ぶとは・・・乱心でもしたか？』

「いえいえ、なにせ北郷君は『天の御使い』の称号を持つ男。かなりレアだとは思いますが？」

『成る程、やはり北郷を選んだか・・・それで用とは？』

「北郷君に力を授けて欲しいのですよ。そのために部屋の割り当てもここにしましたし。」

『なんと！？北郷はここに住むのか？』

「ええ、新野にいる間はここに住んでもらいます。」

何故自分のことを知ってるのかと一刀は思ったが左慈や宇吉の例があるのでそこには触れないことにした。

すると声の主が少し考える様子になる。

『・・・そうか、北郷を鍵に選ぶか・・・妥当ではあるが少し甘いな。体つきは悪くないようだが。』

一刀は初めて自分に地獄のような特訓を課した祖父に感謝をする。

（ありがとう爺ちゃん！貴方様のおかげで俺は延命しそうです！！）

読まれてんだろうなあと思いながらも心の中で感謝する。

『フン、まあいい・・・しかし我が与えるはきっかけ・・・骨組みを作るだけだ後の肉付けはそちらでしろ』

「ご協力に感謝します。早速始めて下さい。」

一刀だけが訳解らないといった感じだったが自分が何かされるといふことは解っていた。

「ちょ、何をするっていうんだ!？」

「黙って受ける。お前を大幅に強くするための基礎を授けて貰うんだ。」

左慈に制されて一刀は黙る。

『随分と聞き分けがいいな、北郷一刀よ。我が名は着翔ちやくしょう、この世界に住みし精霊のような存在だ。』

「せい・・・れい?」

いきなりすぎる話に付いていけない一刀。
しかし横から左慈が要約してくれる。

「つまるところスタンドって奴だ。」

おお、成る程っておい!怒られるぞ馬鹿!!

「成る程!よく解ったわ・・・って何で知つとんねん!？」

すっかり?納得した一刀。

伊達にBOOK O。Fの立ち読みで全部読んではいなかった。

『何かとてつもなく負の気配がするが・・・まあいい、始めるぞ。
ちなみに我は力を授けた相手の所なら瞬時に移動できるからな。悪いことはするでないぞ?』

「ああ、始めてくれ。」

いいだろう。

その瞬間、霧井気が普通の部屋に戻る。

しかし次の瞬間にはもう一刀の身体に異変が起きていた。

「グッ……何だこれ……！身体が……！焼ける……！」

「我慢しろ。力を得るにはそれ相応の痛みくらいは伴うものだ。」

「クソッ……聞いて……無いぞ……！」

「言つてなかったからな。あと聞かれなかったしな。」

「一刀、それくらい我慢しろ。気合だー！！」

どこのアニマルだと思いつながら歯を食いしばりグツと耐える。

「もう少しですね。ちよつと北郷君のリアクションが地味でこの凄まじさが伝わりにくいんですけど。」

「グッ……オラアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

「おお！その意気ですよ北郷くん！！」

宇吉はガッツポーズをとりながら一刀を励ます。

左慈がふざけるなと宇吉にチヨップを入れた時、一刀の身体は元に戻っていた。

「ハッ！・・・フウ・・・フウ・・・」

一刀はダランと腕を前へ投げ出す。
さながらリフトオフした時のエ。アの様に・・・

『「」「怒られるわ！」「」』

ええサーセンww

『終わったぞ・・・後の処理はそっちがやれ。我はしばらく寝る。』
すると声はもう聞こえなくなり3人がいる部屋は普通の部屋になっていた。

「どうやらそのようです。では今日はもう休みましょうか。北郷君も疲れたでしょう。」

「あ、ああ・・・」

一刀は自分の体を見回しながら言う。

「そんなに早く変化は現れないだろう。本格的な特訓は明日から始めるぞ。」

「それがいいですね。あとハイこれ、明日からの特訓スケジュールです。」

一刀は違和感を感じ2人に尋ねる。

「あれ？なんで漢の時代に横文字が使えるんだ？」

その言葉に2人はアツとした顔をしてため息をつく。

「アアアア・・・もう少し隠しておきたかったんだがな・・・」

「イヤー目敏いですね北郷君。」

そんなことより教えてくれと一刀は目で2人に問いかける。

「まあ、言ってもさほど問題は無いだろう。・・・北郷、俺達はこの世界の人間じゃない。」

本来なら何言つてんだこの中2病はと一蹴するところだが2人の雰囲気が本当の話だと教えてくれる。

「それって本当なのか？」

「ええ、私達は本来、この外史の者ではないのですよ。」

話が宇吉にバトンタッチされる。

「外史・・・？」

「ええ、まずは外史について教えておきましょうかね。とその前に座りましょう。」

すると左慈は押入れから椅子を2つ出し一刀と宇吉に差し出す。

「左慈はいいのか？」

「ああ、立っている方が居心地がいいんでな。」

それだけ言って左慈は宇吉の隣に立った。

「話を戻しましょうか。」

宇吉が一刀の正面に座る。

「外史とは本来の貴方の世界、いわゆる正史から派生し枝分かれした歴史の墓場のようなものです。」

「つまりパラレルワールドってこと？」

「そういうことです。あなたも会ったでしょう？曹操や趙雲といった英傑達を。」

一刀の頭の中には今まで会ってきた有名な武将達を思い出す。

「ああ・・・」

「それもこの外史というものの影響です。外史では英傑と呼ばれる人々は皆女性なのですよ。」

「え！？じゃあ劉備やほかの無双してた人達も・・・」

「ハイ、皆女性です。男にしか興味が無い私が言うのもなんですが、皆結構綺麗ですよ？」

どうです、そそられるでしょう？と宇吉はにやけながら一刀を見る。

（そりゃあそそられるけどさぁ・・・）

「ちなみに10人くらい口リがいた気が・・・」

左慈の呟きに一刀が大きく頷く。

「よし、オールオッケー！続けてくれ。」

「私達は外史の管理者として様々な外史を見たり、時には介入したりして秩序を保ってきました。」

「とりあえず2人は世界を今まで見てきたってこと？」

「端的に言えばそうですね。大抵は北郷君が来て始めて外史が始動するんですよ。」

宇吉がすべては一刀にあるという言い方をする。

「じゃあ殆どの外史にも俺がこの世界に来たってことなのかよ・・・」
「

「そうですよ。色んな貴方がいますよ」天下統一したり軍師になったり御使いとして御輿になったり。」

宇吉は今まで見てきた様々な一刀を説明する。

「・・・ラジバンダリ！！」

「古いわー！！」

左慈は今回ツツコミ役に徹するらしく何処からかハリセンを取り出していた。

宇吉は一通り話したところで一度話を止める。

「しかしこの外史はハッキリ言つて解らないんですよ。」

「解らないって?」

宇吉は始めて不安そうな顔をする。

今までの堂々さからその表情にはこちらまで不安にさせられた。

「私達は通常自らの意思で外史に介入したりするのですが今回は違うのです。」

「俺達は気付いたらこの外史にいたんだ。何も思つてなかったのにな。」

「そして朱然・・・陽炎様の下で働いているという設定だったので。」

本当なら朱然は表舞台に出てこないんですがねと宇吉はため息をついた。

「それって・・・どういうこと?」

「この外史は今までとまったく違ったものであるということです。しかし誰かの強い想いが働いているのは確かですね。外史は人の想いが強く作用されますから。」

「あの朱然・・・陽炎さんは？」

「解りません。我々にとってはまったくイレギュラーですよ、彼は。」

「だから俺達の不安要素はあの男と奴に付いている真羅とかいう女なんだよ。しかも滅茶苦茶強いから俺でも手が出しにくいんだ。」

「じゃあ何で陽炎さんに付いてるんだ？」

「刀はもつともなことを言う。」

「トロイの木馬ですよ。近くに居た方が彼のことがよく解るでしょう。」

「成る程、だけど悪い人じゃなさそうなんだけどなあ。」

「確かに彼からは悪意は感じません。しかし謎は多いですよ。」

「謎？」

「そうですと宇吉は陽炎の武器について話し始める。」

「彼の武器、刀ですよ？しかも帯電していた。」

「一度抜くところを見た一刀はアレが刀だと解っている。電気についてもまた然り。」

「あの武器、一度見せてもらったのですが凄いですよ。峰に付いてるローラー、あれは磁石です。」

「磁石？」

一刀の頭の中にU字型のアレが浮かぶ。

「ええ、しかもかなり強力な磁石です。刀身の部分もまた同様の素材で出来ていました。」

「それと電気って関係あるのか？」

「忘れてしまいましたか？中学校の頃に習ったでしょう？」

「あッ電磁誘導か！」

電磁誘導

磁石を用いた発電方法で動き出すと電気が発生するというものだ。

「しかもあの超協力の磁石・・・現代でもあるかどうかというほどのものですよ。それから作り出される電気の威力は計り知れません。」

「でもどうやってあんな電気をコントロールできるんだろう・・・」

「それは解りません。何万人もの人間を屠れるほどの威力です・・・それをどう操っているのか・・・」

「まあ、そんな化物と味方で良かったなって話だ。」

左慈が端的にまとめてくれた。

「それにいろいろ内政面でもこの時代には無い政策をポンポン出してくるんですよ。」

「まあそれでも民のためと言っているから迂闊に口出し出来ないのが現状なんだ。」

「そうか・・・」

一通り話が終わり、一刀は2人の手を借りて部屋を整理した。

「ふう、終わった」

一体どのくらい使われていなかったのか部屋の中は整理されていなかった。

しかし何故かゴミや埃は無かったのだった。

「そういえばさっきの話、誰かに聞かれてたら・・・」

自分の主にそういう言動は謀反を企んでいると思われるも仕方がない。

しかし2人は余裕の表情だった。

一刀が疑問に思っていると宇吉が答える。

「さつきからこの部屋には結界が張ってあります。話し声はおろか気配すら感じないはずですよ。」

「結界！？宇吉って一体・・・」

「ちよつとした妖術ですよ。北郷君にも教えるつもりですよ。」

「え！？俺妖術使えるの！？」

「まあその話はまた今度。今はこのスケジュールを渡しておきます。目を通しておいて下さい。」

そう言つて宇吉は数十枚の紙の束を机の上に置く。

「もう夜だ。ハラも減つたし飯を食いに行こう。」

左慈が腹を押さえながら言う。

「そうですね、つい話し込んでしまいましたね。では、行きましよう。」

そう言つて宇吉も部屋を出ようとする。

「あ、待つてくれよー」

一刀も部屋を出る。

そして3人揃つて食堂に行くのだった。

その3人を廊下の角から見つめる人影が1つ。

暗がりに溶け込んでよく見ないと解らないほどの気配の消し方はプロのそれだった。

一刀達が見えなくなった頃、廊下に設置された蝋燭の火がその人影を照らす。

長めの黒髪に後ろで結んだポニーテール。

そこに侍女の一人が歩いてくる。

「あれ？どうかありませんか？」

人影は答える。

「いや、なんでもない。陽炎様はもう食事は？」

「もうお済みになっております。」

「そうか、私は部屋でとるから持ってきてくれ。」

「かしこまりました、朱桓様。」

そう言って侍女は食堂の方へ歩いていく。

朱桓・・・・・・・・真羅はそのままフツと闇へと消えていった。

ある部屋（後書き）

以上、長々しい会話でしたー。

外史に働く強い想い、一体誰のしょうねー？

え？作者の想いはいつだって強いからもう作用されませんよー

とりあえず一刀は左慈と宇吉とは一応味方です。

オリキャラ出さないなら前作から出せばいいじゃないb b

というわけでまだまだ続きますよー

感想・評価ドシドシ受け付けておりますーノシ

作者は本当に緑川さんが好きだなあ、文筋に出てるぜ！（前書き）

話数が2ケタになったのに未だ話は進まずw

そろそろ黄巾の乱に介入したいのですが・・・

その前に左慈&宇吉の拠点フェイズもどきをば

作者は本当に緑川さんが好きだなあ、文筋に出てるぜ！

（左慈）

左慈が一刀に課した特訓。

その内容はかなりハードなものだった。

まず体を温めるために城壁周りを10周。

新野は比較的大きな城なので城壁の広さは街1つ以上の広さがある。

その後すぐに左慈との試合。

その日の気分によるが最低でも10番勝負。

その後で筋トレ各100回を10セット。

ウエイト付きで腕立て伏せ、腹筋、背筋、バービージャンプ。

その後で左慈の光速とも言える攻撃をただひたすらに避けまくること。

一撃一撃が全力なので当たると痛い。

その後で「できるかあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

うるせえな、まだ途中なんだよ！

「コレをこなすとか・・・丹下ジムかここは！？」

ところで最近の若いのはおっちゃんを知っているのか？ 作者は高

校生

「うるせえぞ北郷、とっとと走れ。」

余裕の表情で一緒に走っている左慈に背中を叩かれる。

「くそう・・・何でこんな目に・・・」

「ほら、後3周だ。終わったらすぐに試合だからな。気を抜くなよ。」

「うう・・・チクショウ・・・」

一刀が新野に入ってから1週間が経った。

2日目からこの特訓が始まり今に至る。

最初は最後まで走れない、最後まで立つてられない、最後まで回数をこなせない、最後まで避けきれない最後までe t c・・・

とにかく酷いものだった。

しかし一週間経ってようやく一刀も慣れ、最後まで立っていられるようになった。

だがやはり祖父の下に居た時の数倍もの特訓は一刀に負担を掛け、終わった瞬間に倒れて左慈に部屋まで運んでもらうなどはもう当たり前になった。

「どうした北郷、もうへばったのか？太刀筋に出てるぜ！」

左慈との試合、左慈は無手だったが一刀は昔からの得物である刀を使っている。

だが刃を潰した模造刀だ。

「なんの！はああああああ！！」

一刀は左慈の肩目掛けて袈裟がけに斬りかかる。

「だめだ、コイツは抜けさせないぜ！」

左慈は華麗に避けてみせ、一刀の五体に連打を叩き込む。

充分手加減されたはずのその攻撃はそれでも一刀の体にダメージを与えた。

「グッ・・・！」

一刀は思わず膝をついてしまう。

「コレで13連敗だな。」

左慈が不敵に言い放った。

「そんなに弱くてどうする。この世界では体は大事だ。鍛えなければその辺の賊にすら敵わないぞ。」

「けどこんな過酷な・・・出来るかよ・・・！」

一刀は息を切らしながら立ち上がる。

「どうした？もう泣き言か？背筋に出てるぜ。」

何故か左慈は特訓中は変な口癖がついてしまっている。

「だがな北郷・・・やる前から諦めてたら何も見えなくなっちまうぞ。やってダメの時に始めてその言葉を使うんだ。だがお前はまだ失敗していない。まだお前には諦めない資格がある。」

左慈が一刀に竹で出来た水筒を渡してくる。

中身はただの水だったが今まで水分を摂ってなかった一刀には何よりもありがたいものだった。

「だからまだお前は諦めちゃいけないんだ。頼むぞ？『天の御使い』さんよ。」

その時、城の城壁越しに朝日が飛び込んでくる。

「もう夜明けか・・・夜も明けないうちからやって眠いや。」

「何を言っている。まだ筋トレや避けが残ってるぞ。眠るにはまだ早い。」

「その前に永眠しちまいそうだけどな・・・」

一刀は少し笑いながらウエイトを手首足首胴体に付ける。

「それだけ言えりや休憩はもう充分だな。始めろ。」

「おう、早く終わらせヨつと！」

そして今日も一日が始まる。

「宇吉」

「あ、北郷君、コレもやっておいて下さい。」

「北郷君、この案件ですが・・・」

「もしもし北郷君、陽炎様がとつととやれと」

「わあああああああああああ！！！！！！こんな耐えられるか
ああああああ！！！！！！！！」

一刀は自室のドアを蹴破つて廊下へと逃走する。

「そうは行きませんよ」【縛】！「

その瞬間、一刀の体がピタリと止まる。

「クソッ！また妖術を・・・！」

「フッフッフ・・・私からは逃げられませんよ」

「解った！解ったから顔を近づけるなあ！！」

言葉だけで必死に抵抗しているとようやく宇吉は【縛】を解いた。

「では、この案件ですが、居住区と市場区はこのエリアに配置する
として食区は・・・」

午後3時くらい

宇吉と陽炎で立てた案件を一刀と紡で肉付けしていくという修行まがいの政策の方針を決めてやっと一刀は一息ついていた。

「ふう・・・紡の淹れてくれたお茶は美味しいなあ・・・」

「はうゝそ、そんな主様・・・私が美味しそうなどと・・・」

うん通じてないね。何なんだろうこの子。

一週間経ってやっと解ったことだが紡は腐な上に妄想癖のある変態さんだった。

ただ彼女に腐と言うと「腐ってません！これは新しい物を探求するための活動ですー！」と凄い剣幕で怒られた。

「さて、もう今日の仕事は無いし・・・やっと休めるや・・・」

「そうですね、ここ最近ともに休めていませんでしたからね。」

しばらく一刀の部屋にほんわかムードが漂う。

その空気に入ってくる者が1人。

「失礼しますよ北郷君。特訓の時間です。」

「あ、宇吉さん。どうもー」

紡と宇吉は何故か仲が良く、たまにお互いを同志と呼び合う仲になっていた。

「あ、紡。そろそろ特訓だから陽炎さんの所でやってくれないか。」

「解りました。夜ご飯の時間になったら呼びに来ますね。」

そう言っただけで紡は書類を持って部屋を出て行った。

部屋には一刀と宇吉だけが残される。

「さて、今日も始めましょうか。昨日教えた【縛】はもうマスターしましたか？」

「ああ、なんとか落下物は止められるようになったよ。」

宇吉の特訓、それは一刀に妖術を教えることだった。

「そうですね、特訓を重ねればどんなものだろうと止めることが出来ますよ。今後も精進を怠らないように。」

実は着翔が一刀に行ったのは妖術の基礎の覚醒、つまり氣の覚醒だった。

おかげで今の一刀の氣は常人の23倍はあり、常人の50倍ほどある宇吉の半分くらいは到達していた。

何故妖術なのかというのを鍛えただけでは英傑と言われる武将達と会った時に太刀打ちできないからだそう。

だからある意味反則技と言える妖術を一刀に伝授するしかなかった

のだ。

「何度も言ってますが妖術の基礎は氣です。氣が無ければ何も出来ませんし氣の使い手には全くではありませんが効きません。氣を付けて下さい。」

「ああ、解ってるよ。所で今日の特訓は？」

一刀がお茶を飲み干しながら宇吉に問いかける。

「今日はいよいよ【繰】に入ろうかと思っています。」

「【繰】？どんな技なんだ？」

「【繰】とは【縛】と対の妖術。物体を自由に動かす能力です。」

おお・・・と一刀は感心してその後で自虐的に呟く。

「だんだん俺も人外になってきた気がするよ。」

「ハッハッハ、なんなら化物を目指しなさい。化物になって吹っ切れると見えないものも見えてきますよ。」

宇吉が笑いながら一刀に一巻の巻物を差し出す。

「一応やり方です。いいですか？【繰】は【縛】より氣を使います。ただ止めるのと動かすのでは大きく違ってきますからね。」

一刀は巻物に目を通しながら頷く。

「しかし極めてしまえばどんなものでも動かすことが可能です。ですからあの技も・・・」

「ああ、あの技をやるために俺は今まで頑張ってきた。」

「ええ、コレを極めれば貴方にも出来る・・・」

「「ファンネルが!!」」

やはり男の夢は共通していた。

「そう、そうです。もっとイメージを働かせて・・・実際に物体を動かしている感じで。」

・・・

・・・

・・・

もう日も沈む頃、一刀は部屋にあった壺くらいなら持ち上げて空中で自由に飛ばすことが出来るようになっていた。

「うむうむ、やはり北郷君は筋がいいですね。たった数刻でものに出来てしまうのですから。」

「いや、宇吉の教え方も良かったよ。ありがとう。」

「どういたしまして、そろそろ紡君も来る頃じゃないでしょうか?」

一刀が窓の向こうを見るも、既に外は暗く、街の明かりがチラホラと見える程度だった。

その時ドアがトントンと叩かれる。

ノックを教えたのは紡だけだったのでそれが紡だということは瞬時に解る。

「主様へ宇吉さんへご飯ですよ」

まるで子供のようなその呼び声に2人は思わずクスリと笑ってしまふ。

「行くか。」

「行きましようか。」

2人は食堂へと行くべく立ち上がる。

廊下で待っていた紡が妄想により顔を赤くしているのは最早当たり前のことであった。

作者は本当に緑川さんが好きだなあ、文筋に出てるぜ！（後書き）

少し日常の事も書かないと物語が進みませんな。

ちよつと短めでしたが次は陽炎、真羅、紡のターンです。

感想・評価バシバシお待ちしております＞＜

平和を目指すために（前書き）

今回は陽炎のターンです。

なんか登場させた方がいいが書きにくいキャラだなww

平和を目指すために

「なあ紡……いつになったらこれは終わるんだ？」

「おそろくずつとこのままかと……」

一刀の自室で2人は黙々と政務を続けている。

陽炎に修行として任された案件はとても簡単とは言えず、一刀の世界ではそれなりに有名だった徐庶こと紡でも難しいものだった。

「あ、主様。お茶はいかがですか？」

「もうつよ。」

そう言つて紡は食堂に行き、一刀は独り部屋に取り残される形となった。

「はぁ……そついや何で俺政務なんてしてるんだろ……」

元の世界ではただの学生だっただけに世を動かすといったものに実感がなかった。

しかし現にこうして民の為に働いている。

一刀にはまだ事の重さが解つてはいなかった。

「主様、お茶をお持ちしました」

紡がウエイトレスよろしく部屋に戻ってくる。

「あ、ありがとう、紡。」

紡の持つてきてくれたお茶は机仕事で疲れた一刀の体に染み込んでいった。

「おいしい、美味しいよ紡。」

「えへへ、そこまで言っていただけと淹れたかいたというものです。」

どうやら紡が淹れてくれたらしかった。
意外な才能であった。

「じゃあ少し休もうか。せっかくのお茶を濁したくはないからね。」

「ハイ。」

2人がお茶を飲んでいる間静かで落ち着いた空気が流れる。

ここに琴の音があれば最高なんだろうなと思う自分に一刀は苦笑する。

（俺もここに慣れちゃったのかな・・・）

「主様、なにかいいことでもありましたか？」

「ん？いや、お茶が美味しいなあと。」

そう言われて照れる紡。

可愛いなと思いつつも手を出せないこの状況に悶々とする一刀。
最早彼の理性は疲れと相まって限界に近づいていた。

「おう、進んでるかー？」

そんな一刀とは裏腹に陽気な陽炎が入ってくる。

「あ、陽炎様。ごきげんよう。」

「ああ、ごきげんよう。ところで、一刀貸してくれるか？」

そう言つて一刀に歩み寄る陽炎。

「いいですけど・・・まだ仕事が終わってないんですよ。」

「そう言うことだから、どうか行きたかったら好きにしてー」

「あれ？否定的ながらも行く気満々！？」

紡には悪いと思いつつもこの仕事から抜け出せるいいチャンスだと
一刀は陽炎にホイホイ付いていく。

「うっ、主様恨みますよー！」

半べそで呪詛の視線を突き刺してくる紡を尻目に一刀は「頑張れよ
！」の一言とガッツポーズを残して部屋を去る。

残されたのは一刀の分の仕事を任され刃物を構えた紡のみだった。

新野城下町・北大通り

新野城は東西南北の門のちょうど真ん中に位置しており、門から城までの大通りがちょうど城でクロスすることになっている。

その4つある大通りの中でも北は一番賑わっていて、一番開発が進んでいる所でもあった。

「いつ来ても凄いなあ、ここは。」

陽炎に付いてきた一刀は通りの脇に出ている露店の多さに感嘆する。

「そうだな、まあ一番力入れてる区域だからな。」

陽炎も顔を綻ばせながら言う。

「それより良かったのか？ホイホイ付いてきて。俺は真面目な奴だって構わないで外に誘っちまう人間だぜ？」

ええ？それ言っちゃう！？じゃあこう言い返すしかねえぞ！？

「いいんです・・・俺、陽炎さんみたいな人、好きですから。」

ああ、言ってしまった・・・ついにこのネタも解禁か。

「嬉しいこと言ってくれるじゃないの。じゃあ、とことん楽しませてやるからな。」

何を！？どうすると！？トイレ見つかりませんように！

「それよりあの店いいな。最近話題らしいぞ？」

そう言つて露店に駆けていく陽炎はどう見ても一城の主には見えなかった。

「お、コレはいいものだ！」

「目が高えな兄ちゃん！そいつあ魔・苦辺^{マ・クベ}つて昔の朝廷の偉い人が岸理^{キシリア}亜つて当時の皇帝のお后様に送ろうとした壺らしくてな。叩くという音がするらしいぜ。恐ろしくて叩けねえけどな。」

「へえ・・・」

陽炎が白い壺を叩く。

キンツという小気味のいい音が響いた。

「フム、いい音色だな。」

そう言つて陽炎はその壺を購入した。

「なに買つてんだ・・・」

「だっていい音色なんだぜ？」

それは解る。だがこれは既に死亡フラグだろうと一刀は恐れたがなんとなく陽炎なら大丈夫だろうと何も言わないでおく。

そんな感じで2人は雑踏の中へと消えていった。

新野城・玉座の間

普段は静かな雰囲気のはずの玉座の間は今、かなり慌しかった。

「ええい！ご主人様はまだ見つからんのか！？」

「ハイ！北のほうへ行つたとの報告は入っておりますが・・・」

「北だと？一番開発されている区域ではないか！」

「既に斥候の訓練生部隊を派遣しております。すぐに見つかりましよう。」

「訓練生ごときにあのお方が見つかるものか！私も出る！！」

「あ、朱桓様！」

真羅は槍を持って独り出て行った。

「ううゝ真羅様ゝ主様が・・・ってアレ？」

「あ、徐庶さん。朱桓様ならさつき出て行きましたぞ。」

「はうゝ誰も私の苦悩は理解できないのですね・・・」

そう言つてとぼとぼと出て行く紡。

その背中からは大きな疲労が見て取れた。

「なんだ？今日も朱然様は無断外出か？」

「ああ、そうらしい。朱桓様が怒ってたからな。」

「新しく来た・・・天の御使いと徐庶さんも大変だな。」

「まあ、じき慣れるさ。俺達みたいにな・・・」

「・・・ああ・・・」

陽炎と一刀は大通りからかなり外れた所・・・所謂裏通りに来ていた。

「何だってこんな所に・・・」

「まあまあ、結構掘り出し物とか扱ってる店もあるんだぜ？」

確かに裏通りで陽炎がチェックする商品は興味深い物もあった。

あらかた探し終えたといった陽炎と一刀は表通りに戻ろうと歩を進める。

その瞬間、陽炎に向かって飛んでくる光る銀色の物体があった。

ソレが投げナイフだと気付いた時には遅く、陽炎に刺さる直前であった。

しかし陽炎は慌てることなく一瞬で背中に背負っていた刀を抜き放ち、ナイフを叩き落とす。

「陽炎さん!？」

「大丈夫だ、気にするな。」

陽炎は余裕に言う。薄暗い路地裏を見やる。

「・・・暗殺者か・・・」

すると路地裏の影から人影が4人、スウツと浮き出てくる。

「コイツ等・・・一体？」

「下がってる一刀。コイツ等の狙いは俺だ。」

一刀は下がり陽炎を見守る。

相手は4人・・・不安なものであった。

「朱然義封・・・貴様を殺す・・・」

その内の1人が話し始める。

「へえ、誰かの以来かい？」

陽炎が警戒を解かずに聞き返す。

「悪いが俺達は荊州では名の知れた殺し屋兄弟。依頼主を言うわけ

にはいかない。」

「ほお・・・名の知れたと言う割に随分間抜けなんだな。」

「なに？」

顔は隠してあつて見れないが相手は少し頭に來たようだった。

「その服・・・」

陽炎が空いた左手で4人の服を指差す。

黒が基調の忍者のような服装だった。

「ウチの斥候の訓練生の服のようだが、それに忍び込んだのか。」

「そうだ。ただの志願だから潜入は容易であつたぞ？」

「ハア・・・今度はもっと身元調査とかやらせよつと。」

陽炎が頭をかいてため息をつく。

「フン、その頃にお前はこの世にはおらぬわ。」

「アン？何を寝ぼけたことを言つてやがる。」

「なんだと・・・？」

あ、かなり頭に来てるなと思ひながらも一刀は陽炎を見る。

陽炎は最初と変わらず余裕の表情だった。

「俺を殺すのに4人しか連れてこないなんてな。だから間抜けって言っただよ。」

陽炎が片手で身の丈ほどのある刀を4人に向ける。

4人も腕ほどしかない短い剣を抜く。

「その言葉、後悔させてやろう。散！」

その瞬間、4人が陽炎を包囲し彼を刺し殺そうと剣を突き立て一気に4方向から殺到する。

「ハア・・・だからダメなんだよ・・・」

陽炎の姿が消える。

いや、正確には消えたかのような高速移動で上に跳んだのだ。

4人には見えていなかったようで周りをキョロキョロしていたが一刀には見えていた。

「俺を」着地と同時に1人の首を横に切り裂く「誰だと」そのままの勢いをキープしたまま2人目の胸を深く斬る「思ってたんだ」そして返す刀で3人目の腰を斬り上半身と下半身をお別れさせた。

一気に3人分の死体が地面に崩れ落ちる。

残ったのは最初に陽炎と話していた暗殺者と陽炎のみだった。

「き、貴様一体・・・！？」

残った1人は怯えながら陽炎を見る。

今まで名の知れていた兄弟を倒したのだから無理も無かったが。

「だから言っただろ、たった4人じゃ駄目だって。」

そのまま陽炎は暗殺者に歩み寄る。

暗殺者は足がすくんだように動かなかった。

「じゃあ、サヨナラだ・・・」

そう言っただけで陽炎は暗殺者の心臓を一突きにする。

暗殺者は何も言わずに刀を抜かれるとドサリとその場に倒れる。

もう何度か人が死ぬのを見たことがあるとは言えこの光景はまだ刀には慣れない物だった。

「・・・優しいな、お前は。」

顔に出ていたのであろうか、陽炎は刀を拭いて背中中の鞘に収めると一刀の顔を見てそう言った。

「だがな、平和な時代ならともかくこれから来る乱世ではその優しさは命取りになる。時には非情になることも重要だ。覚えておけ・・・」

陽炎は静かにそう言った。

少し落ち着いた一刀は陽炎に聞いた。

「陽炎さんは、この世の中で何を目指すというんだ？」

陽炎は一瞬顔に陰を見せたが表通りの方を向き「今は表通りに戻ろう。」と言った。

一刀は彼に言われるがまま表通りに戻る。

裏通りの惨状とは裏腹に表通りはさつきと変わらぬ賑わいを見せていた。

その光景はまるで今大陸で起こっている黄巾の乱など何処吹く風といった感じに平和な光景だった。

「『偽りの街』・・・」

「え？」

一刀の横に居た陽炎が突如言う。

「大陸でのこの街のあだ名みたいなものさ。ここだけ泰平の世が訪れたかのように平和でまるでこの街だけ別世界。世の大衆は皮肉の意も込めてここをこう呼ぶのさ。」

さつきみたいに暗殺者もたまに来るしなと陽炎は少しばかり自虐的に言う。

「でも、ここの人々が平和に暮らせれば・・・」

「ああ、だけどな一刀。俺はこの街だけじゃ駄目なんだ。もつと多くの人を・・・大陸中の人々にこの街のような平和を味わって欲しいんだ！」

これは押し付けなのかなと陽炎は一刀に問いかけるも一刀は彼を励ますことしか出来ない。

「確かにそうかもしれない・・・でも俺が陽炎さんと同じ立場だったら同じ事を思ってると思う。」

一刀の言葉を受けて陽炎は元気を取り戻したように空を見る。

「そうだな・・・じゃあ目指すか・・・！」

「目指す？・・・まさか天下を・・・？」

すると陽炎は一刀に満面の笑みを見せたあとまた空を仰ぎ見る。

一刀もつられて見てしまう。

「ああ、天下さ！俺はこの大陸の人々の為に天下を獲る！それが俺に出来る方法だ！！」

「俺も・・・陽炎さんを手伝うよ。何が出来るか解らないけど・・・」

「一刀、俺にはお前が必要だ。お前が居なけりや多分天下なんて取れないさ。だから一刀、一緒に天下を獲ろうぜ！！」

「・・・うん!」

2人は揃って首が痛くなるほどもう一度空を見る。

見えた空はどこまでも蒼く、どこまでも広い空だった。

平和を目指すために（後書き）

まずは陽炎です。

次の話には真羅と紡2人ともやります。

感想・評価ドシドシ受け付けておりマッスル

真羅編〜仲間〜 紡編〜第一回腐った奴等をどう潰すか会議〜（前書き）

今回は一気に2人やります！

いよいよついに黄巾党を倒す感じの話にしていきます。

真羅編く仲間く 紡編く 第一回腐った奴等をどう潰すか会議く

く 朱桓く

新野城・真羅の部屋

普段は本人か紡以外入れない部屋のはずだったが一刀はその部屋で真羅と政務をしていた。

「なあ、何で俺は自分の部屋じゃなくてここで仕事をしているんだ？」

「貴様・・・そんな事を言えた立場では無い事を思い知らせてやるうか？」

槍を構える音を聞き一瞬で机に向き直る一刀。

もうこんなやり取りが5回以上は続いていた。

「まったく！ご主人様と街に出て行っと思ったたら暗殺されそうになるわ変な壺は買ってくるわで・・・私を過労死させる気か！？」

真羅は昨日（前話）の事件にて陽炎達の搜索に出たのだが行き違いになって2人が帰ってきたため骨折り損のくたびれもうけになってしまったのだ。

（別に行き違いになったのは俺達のせいじゃなくね？）

心ではそう言うが決して口には出さない。

ここで過ごした時間が一刀に自重というスキルを身に付けさせたのだ。

「な、なあ・・・話が」

「何だ!!」

まるで戦場の敵に送るかのような殺気を一刀にプレゼントしてくる。

「ま、まあ落ち着いて。ほら、槍もしまって!」

「チツ・・・まあいい、何の話だ?」

真羅が槍をしまったところで一刀が質問を開始する。

「真羅と陽炎さんって会ってからどれくらい?結構長いようだけど・・・」

すると真羅は一度暗い影を落とす。

「何でそんな事を聞く?」

一刀はその変化に戸惑いつつも負けじと続ける。

「だって仲間じゃないか俺達。仲間のことを知りたいと思うのは間違ってるのか?」

すると真羅はフツと笑い一刀に微笑む。

「・・・仲間か、そうだな。私達は仲間だったな。」

真羅はしばらく笑い続け、ようやく笑い終わった後静かに話し始めた。

「・・・私があのお方に会ったのは遙か昔、最早忘れてしまいうな時だ。あの時ご主人様に会わなかったら今の私は無かった。」

真羅は遠くを見るように目を細める。

おそらくその時を思い出しているのだろう。

「あれから数年・・・いや、感覚的には数十年だな。私達はがむしやらに走り続けてきた。私は常にご主人様の矛になり盾になる。ご主人様の目的が達成されるまで私は倒れるわけにはいかんだ！」

真羅が珍しく怒る時以外に感情を出してくる。

どれくらい長いかは解らなかったがかなり長いということは解った。

「目的って、天下を獲るって言うあれ？」

一刀は昨日の陽炎の決意を思い出してそれが目的だろうと言ってみたが真羅は少しばかり驚いたように一刀に聞き返す。

「それは、ご主人様が仰っていたのか・・・？」

「う、うん。天下を獲ってやるって昨日言ってたよ。」

「そうか・・・やはりご決意なされたか・・・」

真羅は万感の思いで遠くを見つめる目になる。

「真・・・羅・・・？」

「おっと、すまない。」

「陽炎さんの目的って天下統一じゃないの？」

「・・・まあ、そうだろうな。私達の目的に天下統一というのは通
過点に過ぎん。いや・・・私達の目的はもう誰にも叶えられないか
もしれんのだ。」

「だから曹操の誘いも？」

「ああ、曹操や孫策。英傑と呼ばれる将だからこそ不可能なのだ。」

「だから劉表に？」

「知名度・実力・地理等を考えてここが一番天下に近いからな。ご
主人様はあまり乗り気ではなかったが私がなんとか押し通したのだ。」

「へえ・・・」

真羅ならやりかねないと思っただけに怖い。

「だからここに・・・」

「ああ、正直私にとって天下などどうでもいい。むしろ興味がない
と言ったほうがいいか。」

「え！？でも陽炎さんは・・・」

「あのお方は優しい方だからな。野良犬にはついついご飯をあげてしまう方なのだ。」

一刀は大陸の人々のことを野良犬扱いした真羅に戦慄した。

（この人・・・本当に陽炎さんの・・・？）

しかし会った当初の彼女を思い出し何故かあまり驚きはしなかった。

「しかしご主人様の天下ならもしかしたら私達の目的を成し遂げることが出来るかもしれないのだ。なら私もご主人様に従い天下への道を指し示してくれる！」

真羅の握っていた竹簡がギシギシと悲鳴を上げる。

「ま、まあそれは後にして今は政務を片付けようよ。」

「む、そうだな。では夕飯時までには終わらせよう。」

そう言つて2人は机に向き直り仕事を再開する。

「そつえば・・・」

「ん？どうしたのだ？」

「陽炎さんの目的ってなんなの？」

真羅は手を止めずに言う。

「私達のことを聞くより自分達のこと話して欲しいものだな。」

「俺達？」

「いつも自室で男3人何をしているのやら・・・」

「え、アレは・・・」

一刀は反応してしまってから後悔した。

そんな反応は自分はクロですと言っているようなものだからだ。

場に奇妙な沈黙が流れる。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・まあいいさ。お互い隠したいものはあるということだ。」

結局陽炎の目的も聞けぬまま終わってしまった。

しかも自分達の動きが監視されているということを知らされたというオマケ付きでだ。

「結局・・・何なんだろう・・・」

なにか煮え切らない感じを残しながら一刀達は揃って食堂に向かうのだった。

（徐庶）

その部屋は普段とは違って暗かった。

いつもは開け放たれているはずの窓は締め切られ、いつもは点いているはずの部屋の部屋の角の蠟燭は消されていて、いつもは点いていないはずの机の上の蠟燭だけが点いていて、その付近だけほんのりと明るいという秘密を持ったかのような雰囲気がかもしだしていた。

そんな机を挟んで向かい合うように座っているのは部屋の主である北郷一刀とその同志（性癖的な意味で）である左慈。

「よし、それでは始めようか・・・」

左慈が先陣を切る。

「ああ、そうだな・・・」

一刀が合いの手を入れる。

「「第一回腐った奴等をどう潰すか会議を。」」

まず左慈が一巻の竹簡を取り出す。

「まずはコレを見てくれ。」

「コレは？」

「これは宇吉の野郎が立ち上げた『男×男愛好会』略して『おとお』といわれるBLファンクラブのメンバー表だ。」

一刀は受け取った竹簡を広げ、会長：宇吉と書いてある欄と同時に副会長：紡という欄も発見してしまった。

「・・・やはり紡も・・・」

「・・・ああ・・・」

一刀は机に突っ伏しそうになるが左慈がそれを止める。

「嘆くのはまだ早いぞ北郷。」

「でもつ・・・！相手はあの宇吉に紡だぞ！？勝てる訳が・・・」

「無いと言い切れないぞ、北郷。」

一刀はガバツと起き上がり左慈を見る。

そのどや顔は今回ばかりはありがたいものだった。

「どうやって？」

「いいか、会長の宇吉は事務処理能力はあるが街全体を巻き込んだこの組織を束ねられる程ではない。問題は・・・」

「事務処理に長けた副会長、紡か・・・」

左慈は無言で頷いた。

「今のところ紡に対して圧倒的優位に立っているのはお前だ。だからお前が紡の目を覚まさせるんだ。」

「だけど、俺なんかにできるのか・・・」

「出来る出来ないではない、やるかやらないかだ！重要なのはD oであってC a nではないという事を忘れるなよ。」

左慈の激励を受けもう一度竹簡を見る。

確かに発足したとは思えないほどの人数が参加していた。

そしてその人数はそのまま敵の人数に換算される。

敵は強大だった。

しかし負けるわけにはいかない。

一刀は自分の肩に左慈や他の男達の想いが乗っかっていることを改めて感じ、紡の目を覚まさせる事を決心したのだった。

「俺に掛けられる言葉は少ないが・・・グッドラックとだけ言っておこう。」

「ああ、ありがとう。ところで、これ借りていいか？」

一刀が指したのは『おとおと』のメンバー表だ。

「ん？構わないが、作戦を立てるつもりか。」

「ああ、徐庶に勝てる気はしないけど、紡にはノーマルな道を歩んでほしいんだ。」

「解った。俺も出来る限りは協力しよう。」

「頼んだぞ、左慈・・・いや同志よ！」

「ああ！期待してるぞ！！」

そういつて蝋燭を消す。

後に残るのは2人の燃え上がる闘志の残滓のみだった。

彼女の部屋には何度か来たがこういった気持ちで入ったのは初めてであった。

「しかし驚きましたよ、いきなり兵法書を貸して欲しいなんて・・・」

紡がけっして片付いているとは言えない部屋を整理している。

その整理している品の中に桃色の本があるのを一刀は見逃さなかった。

（チクシヨウ・・・まさか紡がこんな・・・）

左慈の言葉を嘘だとは思ってはいなかった。

しかし本当の本当だとは思わなかったのだ。

「紡・・・」

「ハイ・・・？」

紡が一刀の方を向く。

もちろん、桃色の本をベッドの下に追いやることも忘れていなかった。

「最近街である噂が広まってるんだけど。」

「どのような噂ですか？」

一刀はここで1つの策を練る。

「最近『おとおと』っていう連中がいてさー」

その単語を聞いた瞬間紡が凍りつく。

（さあ、見せてもらうぞ徐庶元直！お前はコレをどう凌ぐ！？）

少しもしないうちに紡は元に戻り一刀に聞き返す。

「それはどんな噂ですか？」

「ああ、何でも人を襲っては裸にして食べているらしい。しかも男性限定でな・・・」

「それは・・・」

紡がなんとも言えないような顔をする。

そんな顔をするのも仕方の無いことだった。

これは一刀の策。

もちろんこの噂も虚報で紡に対して逃げ道を作っているのだった。

「私には解りかねます。そもそも噂なんてその程度のものでしょうか。」

「何だ？ いやに噂に否定的だなあ。」

すると紡はハツとしたように一刀を見、そして恨みがましい視線を送ってくる。

「クッ！・・・主様。」

「ん？ なんだい、紡。」

紡が謀りましたねと一刀を見るも遅く、すでに一刀の術中にはまっていた。

ここで一刀は既に勝ちを確信していたが紡からの一手で窮地に立たされる。

「しかし・・・何故私に？」

「それは、お前が副会長だからさ。」

紡はフツと笑い一刀を見下すように見る。

「副会長？何の？」

（しまった！功を焦りすぎて戦局を見誤ったか！）

「・・・『おとおと』のだよ。」

もうこうなった以上は仕方が無いと一刀は左慈から借りた竹簡を取り出す。

「そうですか・・・主様もついに知ってしまいましたか・・・」

紡は普段からはとても想像できないような冷たい気配を漂わせている。

それはまるで推理物の小説で犯人だとバレたにも関わらず奥の手を隠している犯人のように。

「紡・・・率直に言う。『おとおと』を脱退するんだ。」

一刀はそう言うも紡は首を横に振る。

「いいえ、主様。男×男はこの世の至宝。混乱に満ちたこの大陸を救うことの出来る唯一の方法なのですよ。何故コレが解らないのですか？」

紡の言い分に思わずたじろいしてしまうがここで引いたら負けだと思
い一刀は踏みとどまる。

「いいや紡。男から見たらその世界はかなりヤバイんだ。解つてくれ。」

「でも宇吉さんは・・・」

「あれは別！この世の者じゃないから！」

確かにこの世間の者ではないけれどもそういった意味でもこの世の者ではない。

「ですが主様、既に私は手を打っている。例え私を降ろしても第2第3の才女が私の後を継ぎます。」

「第2第3・・・？」

「ええ、あの2人は私以上の才を持つ人間。既にブツも送りましたし主様といえどあの2人は・・・！」

紡は何かにとり憑かれたかのように淡々と喋る。

一刀はそれを困惑しながら見ていた。

（アレ？これ日常パートだよね！？別にシリアスにする必要ないよね！？）

B L に対してはこれくらい強くしておかないと駄目なの！！

「クソッ！俺は諦めない！この世から同性愛（女性同士以外）を消してやるー！！」

「いいでしょう、宣戦布告です。主様・・・私に勝てると思いますか？」

「勝つてやるさ・・・絶対にな・・・！」

まるで長年の因縁があるかのような振る舞いをする2人。最早ここに突っ込み役は居なかった。

「ええ、それでは私は用事があるのでコレを。」

そう言つて渡してきたのは孫子兵法書の第1巻。

「確かに貸しましたよ・・・では。」

紡は一礼して出て行った。

残されたのは孫子を持ちながら静かに闘志を燃やす一刀のみであった。

水鏡女学院

「朱里―雛里―、あなたたちにお届けものよー。」

入り口の門で2人の名を呼ぶのは例の如く水鏡先生。

「わあ！紡ちゃんからだー！」

「中身は後で確認しなさいね。」

「「ハイ！」」

寮・2人の部屋

「は、はわわゝ雛里ちゃん、これって……」

「あわわ……男の人同士でこんなこと……紡ちゃんはどうつもりなのかな？」

「そう言いながらもしっかりと見てる雛里ちゃんもどうつもりなの……」

第2第3の徐庶は確実に育っていた。

数日後・新野城玉座の間

今ここには陽炎や真羅といった城の重鎮が揃っていた。

「皆揃ったな……それでは軍議を始める。」

陽炎が口火を切る。

「今回、黄巾党の本体と思わしき軍団がこの近辺に現れたとの報告があった。俺たちはそれを殲滅する。」

「黄巾党……やっぱり来るのか。」

一刀はこれから起きるであろう戦いに不安に駆られる。

「大丈夫ですよ主様。報告にあつた兵数は約1万とのこと。こちらには有能な将もいますし兵数も8千と負けていません。」

紡が励ましてくれる。

「そうだぞ北郷、こんなポツチの戦いでビビッてどうするんだ。」

「北郷君、これからの為にも今は慣れることから始めましょうね。」

左慈と宇吉もそう言つて励ましてくれる。

「まあ一刀はいきなりで解りにくいだろうが自分の身は守れるようにしとけよ。」

陽炎もそう言い一度竹簡に目を通す。

「奴等の場所はまだ解っている。出発は明日の昼前！真羅と左慈軍備を、宇吉は情報活動。一刀と紡は・・・心の準備を！」

「ハッ！」「ああ。」「了解です。」「あれ？俺イラナイ子！？」

「主様、初めてですから。」

「各自しっかりと明日に備えて今日はグッスリ寝ろよ！それでは解散！！」

陽炎の号令でそれぞれが自分の持ち場に行く。

一刀と紡はやることもないので陽炎の傍に居た。

「陽炎さん、やっぱりやるのか。」

「ああ、それとこれはまだ定かではないが俺たちの狙いと同じ軍を袁術も狙っているらしい。」

「袁術？」

「名族袁家のお嬢様ですよ、主様。」

「そういつこつた。そのお嬢ちゃんが手柄欲しさに乗り出したんだろつな。」

迷惑なこつたと陽炎は肩を竦める。

「でも天下を獲るには……」

「ああ、俺たちは止まれねえ……前を向いて進むのみさ。」

そう言つて陽炎は玉座の間を出て行く。

残された一刀は紡に話す。

「紡……俺は決めたんだ。大陸中の人々が笑つて過ごせる世の中を作ろうつて……」

「主様……貴方様ならきつと出来ますよ。貴方は『天の御使い』なのですから。」

一刀は歩き出す。それに続いて紡も。

そして各地に散らばった諸侯も動き出す。

乱世が・・・始まろうとしていた。

真羅編〜仲間〜 紡編〜第一回腐った奴等をどう潰すか会議〜（後書き）

やっと本編に戻れますw

次は黄巾党殲滅戦です。

お楽しみに〜

感想・評価ドシドシ受付ーbb

武器と初陣（前書き）

バイトやらイベントやらが重なって更新できませんでした。

すみませんm（- -）m

武器と初陣

軍議から一夜が明けた一刀の部屋

「主様、準備はよろしいですか？」

「うん、後は宇吉から武器を受け取るだけだよ。」

甲斐甲斐しく準備を手伝ってくれた紡を先に行かせ一刀は宇吉の部屋に向かった。

「おい、宇吉いるか？」

扉をノックすると中から「ハイ、少し待ってください」と聞こえてきたので一刀は扉の前で待っていることにした。

待つこと2分くらい、扉から出てきた宇吉は一刀に少しばかりの謝罪を述べつつ一刀にある物を渡してくる。

「コレが北郷君の武器です。数がありますが本郷君なら問題なく扱えるでしょう。」

そう言つて宇吉が渡してきたのは6本の剣と10本の短剣だった。

「なあ・・・俺のことタコかイカかなんかと勘違いしてないか？」

一刀はジト目で宇吉を見るが当の本人は涼風が通っているかのようにニヤニヤしている。

「いえいえ、ファンネルがやりたいならコレくらいの数は無いと。それに北郷君の【繰】なら今は難しくても訓練すれば自在に扱えますよ。」

宇吉は一旦剣の束を置いてそれから2本の黒いベルトを取り出した。

1本は一刀のズボンに使っているベルトと同じような規格でもう1本は一刀の肩と同じくらいの幅くらいの大きさだった。

「これに剣を納めて持ち運びましょう。こっちの小さい方は長剣用の奴で今身に着けているベルトと取り替えて使ってください。」

言われるがままに渡されたベルトに付け替える一刀。

「それとこっちは短剣の収納用ですね。まあ肩から掛けるやつです。」

一刀はその大きいベルトも肩に掛ける。

「お、動きやすいなコレ。」

ベルトは一刀の体にフィットし、多少動いても外れる気配は無かった。

そのベルトには短剣を収納できる穴が10個あり、一刀はその全てに短剣を納める。

腰のベルトには鞘を付ける小さいフックが6つ付いており、剣を納める鞘をしっかりとめることの出来る逸品だった。

そのフック全てに剣を掛け、少し窮屈そうにする一刀。

しかししばらくすると慣れてきたようで、自然にその武器を身に着けていた。

「うんうん、よく似合ってますよ。少し重装備そうなのが見た目マイナスですけどね。」

「だったら数を減らしてくれよ、結構重いんだぞこれ・・・」

「ハッハッハッ、それじゃ頑張つて下さいね」北郷君。

一刀は少し息を切らして宇吉を睨む、しかし宇吉はそれを助けることなく城門に向かってしまった。

「チ、チクシヨウ・・・これどうするんだよ・・・」

一刀は集合地である城門前を目指してよろよろと歩いていった。

「ねえ、アレ・・・」「やあねえ、いくら出陣だからって・・・」

「ねえ、かか様」アレ何？」「見ちゃいけません!」

大通りを選んだのが失敗だった。

遅れるわけにはいけないと時間のかからない大通りを行こうと一刀は決めていたが、流石に後悔していた。

この重装備は人目に付きすぎる。

道行く人が3メートルくらい離れて歩いているのだ。

（クソウ！俺は諦めねえ！なんとか城門まで行けばあとは・・・）

新野城・東城門前（外）

「・・・・・・・・・・そう思っていた時期が俺にもありました・・・」

武器を手に取らない民間人だから駄目なんだ！普段から剣や槍に慣れ親しんでいる（？）兵士達なら大丈夫だと思っていたんだ！！

だが実際の兵士達の反応は住民のソレとさほど変わらないものだった。

「なあ、アレ・・・」「天の御使い様・・・だよな？」「あれほどの戦好きだったとは・・・」

一刀はもう泣きそうだった。

「あ、主様！こっちです」

「お、紡か。」

先に行っていた紡が手を振って一刀を呼んでくれる。

「ここに主様の・・・ヒッ！ヒイイイイイイイ！！」

紡は一刀の変わり果てた（？）姿にビックリした紡は反射的に体を一刀と真反対に向け、逃げ出してしまった。

「つ、紡！？つむぎイイイイイ！！！！」

一刀は追おうとするが重装備の重さで走れずに追いかけることすら出来なかった。

「うつつ紡にまで・・・鬱だ・・・この戦いが終わったら死のう・・・」

一刀は開き直り軍団を回る。

一通り終わった後で会ったのは左慈だった。

「北郷、こんなところで何をしている？」

「あ、左慈。」

一刀はようやく自分に話しかけてくる人を見つけられて嬉しかったのだった。

左慈は一刀を見てしばらく考え込む。

「北郷・・・鎧とか着てないのか？」

てっきり左慈も怖がるのかと思っていた一刀は安心して答える。

「うん、持って無いしこれ以上重くしてもね。」

一刀は肩のベルトをひらひらさせて重さをアピールする。

「そうか・・・じゃあコイツを持っていけ。」

そう言って左慈が懷から取り出したのは黒い靴だった。

左慈がほれ、と片方を渡してくる。

受け取った瞬間一刀はその靴の重さに驚愕した。

「ウワツ！なんだこれ・・・鉄！？」

一刀が驚いているのを尻目に左慈は涼しい顔をしてもう片方を弄っている。

「師錬靴しれんかって言ってな、ちよいと特殊な金属で出来てるんだ。まだ試作品だが使用者・・・履いた人間の脚力を限界を超えて高めてくれるんだ。」

俺も履いてるぞと言う左慈に対し一刀はやっと重さに慣れてきたので師錬靴をまじまじと見る。

言われてみればそんな感じもするようないようなと思っていたら左慈に「早く履け」と言われたので履くことにする。

もう片方も受け取り両足とも履き終わった後、足元からキイイイインという音が聞こえてきた。

「何の音だ？これ。」

「師錬靴の目覚め、ようするに起動音だ。」

すると両足に履いた師錬靴がほんの少し青く光っているのが見えた。

「あんまり酷使しすぎるなよ。ダメージを負いすぎるとダメになつてただの重い金属の塊になっちまうからな。」

「え！？それじゃあ気を抜いたらオシマイじゃん！」

一刀は不安そうに師錬靴を見るも左慈は落ち着けと一刀を制す。

「安心しろ、コイツは利口でな、ダメージを色で示してくれるんだ。」

「色？」

左慈がそうだと言って取り出したのは一刀に渡したのと同じ師錬靴だった。

「既に起動済みだ、今は青いがダメージが溜まってくると・・・」

左慈がフンと力を入れ握り締めると師錬靴が青から黄色へと色が変わってくる。

「おお・・・」

一刀はただの金属が何でここまですごいのかよく解らなかったが左慈の力が師錬靴以上だということはよく解った。

左慈が力を込めていくと共に靴の黄色が増してくる。

「これが限界まで達すると・・・！」

左慈がここ一番で力をだし、靴を思いっきり握り締める。

するとヒュウウウウンという音と共に師錬靴は真っ赤に光り、そして光らなくなった。

「これって・・・」

「ああ、こうなっちまったらただの重い靴だ。だけどこうなるにはかなりのダメージが必要だからな、そう簡単には壊れねえよ。まあ英傑との一騎討ちになったら保障は出来ねえが普通の戦場なら心配はいらねえよ。」

左慈はバキバキと駄目になった師錬靴を粉々にすると「じゃあな」と言って自分の率いる部隊の指揮に行ってしまった。

「まあ・・・大丈夫だろ。」

一抹の不安はあったがもう出陣時間も近いので一刀は陽炎のいる所に行くことにした。

陽炎のいるところは他のところより高い峠で、8千の軍勢が見渡せる位置にあった。

そこには陽炎の他に紡と真羅がいた。

「お！なんだその重装備は！殺る気満々だな！！」

「なんだお前か・・・」

まったく持つて対照的な2人だった。

「あ、主様。・・・さっきは申し訳ありません、主様がまさかあんな格好をしているとは思わなかったもので・・・」

「いや、もう気にしてないから大丈夫だよ。」

そう、左慈との会話で一刀の心はリフレッシュされていたのだ。

紡の頭を撫でてやると「はう」と言い身を委ねてくるので一刀のつばは突かれまくりだった。

しかし真羅のわざとらしい咳払いに一刀は心中舌打ちをして紡から離れる。

離れた瞬間紡が「アツ・・・」と切なそうな声を出し、一刀は喜び、真羅にはムカつきという感情を付加させていた。

「北郷一刀、私の目の黒い内は女に手を出せると思うなよ・・・」
とんでもない宣戦布告をしてくる真羅。

「誰がなんと言おうと、恋愛は個人の自由だろ？」

一刀が負けじと言うと真羅はフンと鼻を鳴らし何処かに行ってしまった。

「あいつも部隊を任せてるからな、その指揮に行っただよ。」

一刀の心中を察してか陽炎が説明してくれる。
何気に空気の読める男であった。

「それより準備はいいか？もう号令かけちまうぞ。」

「あ、もう大丈夫だよ。」

すると陽炎は峠の崖に立つて号令を始めた。

「聞け！新野の勇者達よ！！」

さつきまでざわついていた8千人が一斉に黙り込む。

「ついに散々上等なことをしてくれた黄巾党を討ち果たす時が来た！俺たちはこれを気に天下に号令する！敵は1万に対しこちらは8千、こちらの方が少ないのは明らかだ。だが恐れるな！！お前達は俺の訓練に付いてこれた精鋭中の精鋭だ！！最早この大陸にお前等に勝てる軍はいない！しかも見る！この『天の御使い』の装備のいかつさを！！」

隣に居た一刀に話が行き、兵達から「おおおお・・・」と感嘆の念が聞いて取れた。

「やっぱ御使い様も戦うのか」「ああ、あの重装備だぜ？」「近頃は左慈様が自ら訓練なさっているらしいし」「なに！？なんと羨ましい！」

穴があつたら入りたいという言葉が一番似合う一刀の心は最早ブレイク寸前だった。

（あああああああ！俺全校生徒の前にも立ったこと無いのにこんな大人数の前なんてええええ！！）

現代っ子一刀はシャイだった。

「よって負ける要因は一切無し！皆のもの剣を取れ！俺達の力を天
下に見せ付けてやるんだ！！」

陽炎の助け舟に一刀は感謝し、兵達のボルテージは最高潮に達しよ
うとしていた。

「全軍、東に向け出陣——————！！！！」

陽炎が刀を天へとかざす。

それと同時に兵達から上がるときの声は一刀と紡が腰を抜かすほど
大きく、刀を上げたままの陽炎をちよつとクラツとさせるほどであ
った。

荊州東部・黄巾党駐屯地

既に日も暮れ、夜の闇がドツプリと世界を包み込む。

そんな中、黄巾党の陣中はパチパチとかがり火の音が響き渡る静か
なところであつた。

「なあ、もう深夜だぜ？そろそろ俺達も寝たいよなあ・・・」

黄巾党の見張りがもう1人の仲間に話しかける。

「まあまあ、明日にはまた獲物が見つかるさ、今日くらい我慢しよ
うぜ。」

「でもなあ・・・なんか報告によると西の方から軍勢が迫ってるとか言う話だし、心配にもなるよなあ・・・」

「西つつうと・・・新野か。」

「お前知ってんのか？」

「ああ、昔行ったことがある。いい所だぜ、あそこは。」

「強いのか？」

「よく解らないが、たしか朱然がいたな。」

「何！？あの同胞三千人を一瞬にして灰にした雷使いがか！？」

陽炎の名前はその所業と共にその場に居た曹操軍の兵士によって広まっていた。

「ああ、そんな化物がきたら俺たちオシマイだよ。」

「だがこっちは1万だぜ？そうそう負けるようなことh「敵襲だー
！ーーーー！！！！」何！？」

急な物見の兵の悲鳴に慌てる黄巾党の面々。

しかし既に深夜だったので起きている人間は少なく、起きろ起きろといったまだ起きている人間の怒声が聞こえるだけだった。

荊州東部・黄巾党駐屯地から3里ほど離れた台地

そこには4千ほどの赤い鎧を着た軍勢がいた。

「うゝん、匂うわねえ・・・」

その陣中で1人唸る女性がいた。

赤い服を着て桜色の髪をした褐色の女性であった。

「今夜あたり何か動きがあるわねえ・・・」

「それも勘とやらか？」

「あ、冥琳！」

その背後に立つ黒髪的眼鏡をかけた褐色の女性が呆れたように話しかける。

「まったく、何をいそいそしてるのかと思ったら・・・たまには落ち着けないの？」

「えへへっ、いいじゃない！今夜あたり絶対に動きがあるのよ！」

「まったく、あなたの事を疑っている訳じゃないけど少しは軍師に仕事をさせる。」

そんな2人が話しているところに飛び込んでくる人影があった。

「策殿！来ましたぞー！っと、お主も一緒だったか。」

「どうしたの？祭。」

祭と呼ばれた女性、これまた褐色肌に紫の服に弓といういでたちだったがその胸は最早【爆】の域に達しており胸革命バストレヴオリュションという称号がふさわしかった。

「ええ、策殿！今斥候から報告がありましてな！黄巾党の陣が奇襲を受けたとのことじゃ！！」

すると策と呼ばれた女性は指をパチリと鳴らし嬉しそうに歩き出す。

「ちよつと雪蓮！まさか出陣する気？」

「ええ、この機を逃す手は無いわ！」

「それもいいけど、気を抜かないようにな。」

「あら、心配してくれてるの？」

「それは人並みにはな。」

「フツ、嬉しいわね。でも大丈夫、この孫伯符の戦に負けはないわ！！」

そついつて策……孫策は冥琳……周瑜にウインクして全軍の指揮に取り掛かった。

「まったく、いつもおてんばなんだから……」

少し物思いに耽る周喻に祭……黄蓋が彼女の背中をバシバシと叩く。

「なに！ワシがおれば策殿は死なぬわ！心配せんでええ！！」

「祭殿……そうですね、お任せします。」

「おうとも！お主もいい策、期待しておるぞ。」

「ええ、この周公謹の策略。天下に並ぶもの無きと思い知らせて差し上げよう。」

周喻も火がついたようにやる気になり、全軍の指揮に向かう。

その軍の軍備の速さと出撃後の迅速な動きはまるで虎のようであった。

黄巾党駐屯地より2里ほど西

「よし、真羅の部隊の奇襲はうまくいったようだな。次、左慈隊突撃と伝える。」

陽炎が伝令に指示を出す。

「一刀、お前も出るか？」

「え！？俺？」

「ああ、その重装備ならそうそう死ぬこともねえだろうし左慈が直

々に鍛えてんだ。実戦も経験した方がいいぞ。」

陽炎の言葉を受けて一刀は決心したように頷く。

「うん、解った!」

「よし、じゃあ宇吉の部隊に紛れて行ってこい!」

陽炎の激励を受けて宇吉の部隊に向かう。

初陣の戦場は近かった。

武器と初陣（後書き）

そついや祭さんの一人称の「わし」ってどう漢字変換するんだろう・
・

次は早めに更新します

感想・評価受付チュー＞3<

アイツには斬れない（前書き）

先に言っておくと僕は雪蓮様好きです。

というか恋姫キャラ皆大好きだあああああ！！！！

アイツには斬れない

陽炎の提案した策。

8千の軍を4部隊、2千人ずつに分けて時間差で突撃して相手を疲れさせるというものだった。

陽炎曰く「とりあえず疲れさせりゃこっちが有利になるだろ」とのことだった。

それに夜襲が加わり、黄巾党の陣内は大パニックに陥っていた。

「よし、頃合だな。宇吉隊、突撃！」

陽炎が伝令にそう伝える。

（さあて、見せてもらおうじゃねえか）

陽炎が色々思考錯誤していたら横から紡が話しかけてきた。

「あの、主様も出ると聞いたんですけど・・・」

「ん？ああ、一刀も戦場に出るぞ。アイツにも実戦の空気を吸ってもらわないとな。」

「それは解りますが・・・主様無事でしょうか・・・」

「その点は問題ないだろう、色々武器も背負ってたしな。」

「ハイ、あの人なら戦果も「イヤ・・・」え？」

「俺にはアイツがうまくやれないと思えるんだよ。」

いつもは陽気な陽炎の神妙な告白に紡は少し慌てながら聞き返すがそれは聞き間違いなどではなく真っ直ぐ紡の耳に飛び込んできた。

「紡ちゃん・・・アイツには斬れないよ、人は。」

一刀は戦場に居た。

比喻表現などではなく本物の戦場だ。

人の怒声やときの声、悲鳴や歓喜の声と様々な声が聞こえてくる。それを彩るBGMは人が走ったときの足音や剣と剣がぶつかる音、人を斬った音や刺した音だった。

一刀はその『戦場』を肌で感じていた。

真っ先に浮かんでくる感情は『戸惑い』

色々な情報が脳内に流れ込んでくる一刀に恐怖や昂ぶりといった感情は二の次だった。

「これが・・・戦い・・・！」

なんとも臭い台詞を吐いてるなあと思いながらもそれ以外の言葉が見当たらない。

一応剣は抜いていたが未だ誰も斬っていない。

近づいてくる敵は【縛】で動きを止めるか師錬靴で逃げるかしてきたのだ。

何十回も全力で走ったりしてきたが師錬靴はまったくダメージを負った様子は無く、一刀を少しだけ安心させていた。

少し疲れたので休んでいたら次の敵が剣を手に襲い掛かってきた。

「クソツ、死ねええええええ！」

妖術を使い集中力の切れた一刀は簡単には反応できない。

「なっ！【縛】！！」

敵の動きが剣を上には振りかぶったところで止まる。

「なっ！？うぐけねえ．．．！」

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……！」

一体何なんだ

次々とやってくる敵が解らない。

殺氣満々で切りかかつてくる奴もいればおどおどしながら突っ込んでくる奴も居る。

「賊は一種類じゃないのか！？そんな単純じゃなかったというのか！？？」

様々な思惑が一刀の中で交錯する。

「テメエ、何しやがも黙っててくれ！」

一刀は動きを止めた相手に怒鳴ってしまう。

「なんなんだよ・・・なあ、一体何なんだよ・・・」

一刀の呟きになす術がない黄巾党の兵。

「なあ、オッサン。何でアンタは戦ってるんだ？」

「・・・それよりこの変な術みたいなの、解いてくれないか？」

オッサン呼ばわりされて少し力チンときたようだったがそこは大人の対応を披露してくるオッサン。

一刀は【縛】を解きオッサンを自由にする。

動けるようになったオッサンは警戒しながらも一刀の問いに答え始めた。

「俺んとこの村は長年の食糧難でな、皆お仲空かしてたんだ。それなのに役人の奴等は俺たちから税をとることしかしやがらねえ！だからこうして飯を食っていくしかねえんだよ！！」

村での生活を思い出したのかオッサンは少しずつテンションが上がって来ていた。

一刀はそれを黙って聞いていた。

いくら黄巾党とは言え人間は人間。

現代の道德の授業を片耳ながらも聞いていた一刀にはやはり人を殺すのには抵抗があつた。

だがそれでは駄目なのだと一刀はよく知っている。

「なあオッサン、俺はどうすればいい？」

一刀の独白がはじまる。

「俺はあの人の目標の手助けをしたい。でも・・・やっぱり俺には人殺しなんて出来ない。」

一刀の抱えた矛盾、陽炎の目標・・・天下統一への道のりには多くの血が流れるだろう。

しかし一刀は出来ることなら人は殺したくない。

手助けをすると心に決めたのにやはり人殺しは悪いことだと幼い頃より植えつけられた世間体になんて抗ってしまう。

未だ1人も斬れていないのはそれが原因でもあつた。

「なんだかよく解らねえけどよ、俺も村が貧しくなけりゃ好きで人なんて殺さねえよ。ただどお前の場合はメンドクせえなあ。」

オッサンは少し考える素振りを見せた後よし！と言って続けた。

「お前さんは今必死になって自分を守ろうとしている。だけどその目標とやらには自分を殺さなくてはならない。これは生半可なこと

で解決できる問題じゃねえ。だから今は悩んで、その上で最善の結果を歩んでいけたらいいんじゃないか？」

一刀は初めて会った、しかも敵同士の子供に何故ここまで真摯に聞いてくれるのか解らなかったがオッサンの親切心が伝わってきて嬉しかった。

「ありがとな・・・オッサン・・・」

「いやだからオッサンってのは「どけどけどけえ〜！」何！？また新しい敵か！？」

その場に踊りこんでくる赤い鎧を着た軍勢。

一刀にはその軍に見覚えがなかった。

あの城門前に居なかったのだから当たり前だが別働隊という訳でもない。

まったく謎の軍隊だった。

「チクシヨウ！応戦するぞ！！」

オッサンが部隊の先頭に立つ赤い服を着て桜色の髪をした女性に斬りかかって行く。

一刀はその女性が寄ってたかって切り刻まれるシーンを想像したがほんの数秒後にその予想は裏切られた。

女性の持つ剣が振るわれるたびに黄巾党の兵達の首が飛んでいく。

その光景は文字通り皆殺しであった。

決してそれはオッサンも例外では無く、

「ぐぎゃああ!!」

「オッサン!!」

一刀の目の前でオッサンが女性に袈裟懸けに斬られる。
真つ二つになったオッサンの胴の片割れが一刀の前に落ちてきた。

一刀はそれを呆然と見下ろすことしか出来なかった。

ドサリと腰が落ちてしまう。

「あら、アナタも賊？」

全員を斬り終わった女性が一刀に話しかけてくる。

一刀は何も言葉を発さずにいた。

「だんまり、か・・・なら、仕方ないわね。」

女性はそれだけ言つて一刀に向けて剣を振りかざす。

一刀は動くことなくその剣が自分の肩口に来るのを見ていた。

「なんだって？雪蓮が数人の部隊を連れて本陣に突撃しただと!？」

陣の天幕の中で報告を受けた周喩は持っていた竹簡を机に叩き付け

た。

「ハッ！黄蓋様も知らなかったようでした、現在別働隊を組み後を追っています。」

周瑜はそれを聞くと黄蓋も向かわせるように言って伝令を下がらせた。

椅子にもたれかかりフウとため息を漏らす。

「これもアナタの勘だと言っの？雪蓮・・・」

その問いに答えが返ってくることは無く、天幕には外の戦時中ならではの慌ただしさが伝わってくるだけであつた。

「そんな・・・何なの？一体・・・！？」

孫策はあまりにも唐突のことに面を食らつた。

体が動かないのだ。

目の前に居るのは変な白く輝く服を着た重装備の若者1人。彼が何かしたのは明らかだつた。

「なんなの？アナタ・・・！」

孫策は若者・・・一刀に疑問をぶつけるが一刀は何も言わずにただ立ち上がるだけだつた。

「答えなさい！アナタは「俺は・・・」」

一刀は孫策など気にも留めてないかのようにユラリと立ち上がった。
腰から6本のうちの本を抜き放つ。

「確かに俺に人は殺せない・・・」

ゆっくりと孫策に歩み寄る。

「でもな・・・」

いまだ動くことの出来ない孫策。

「世の中がこんなだから・・・」

剣を振りかぶる。

「俺も人殺しなんてしなくちゃなんないだよ！！」

一刀の剣が孫策の肩を捉えた時、

一本の矢が2人の間を通り抜けた。

一刀は思わず2、3歩後ろに飛び退く。

「無事か！？策殿！！」

馬に乗った黄蓋が孫策の所まで駆け寄ってくる。

「祭！？随分早かったのね！」

集中力の切れたせいで【縛】も切れ、孫策が後ろを振り返る。

「ああ、冥琳の指示でな。危ない所じゃったな。」

「ええ、あの子が、ね。」

「ほう、そこまでの豪傑で？」

「いや、そう言うわけじゃないんだけど・・・」

孫策と黄蓋が一刀を見る。

一刀はただただ、孫策だけを見ていた。

「随分と気に入られたようじゃの。」

「そうみたいね、笑えないけど。」

孫策が肩を竦める。

「さあ、策殿お乗りください。もう我等が手を下すまでもなく勝敗は決しておりますゆえ。」

黄蓋が手をさしだすも孫策はいいえと言って一刀の方に歩いてった。

「ゴメンね、祭。ちょっと興味がでてきちゃったみたいなのよ。」

孫策の自由奔放ぶりにやれやれと呆れる黄蓋だったがいつもの事だ

とそのまま馬の上で止まっていた。

「早く済ませての〜」

「ありがと。」

孫策が一刀に歩み寄る。

「待たせたわね、さっきのはなんだったの？」

一刀にも答えられるくらいの余裕が出てきた。

「ちよつとそれは企業秘密かな。」

「あら、随分友好的なのね。」

「さっきはちよつと思いつめてた部分があったのかも知れないからね。」

「あらそう、じゃあその剣しまつてくれない？」

「それは出来ない、オッサンを斬ってくれたアンタにはお礼をしてやらなくっちゃな。」

一刀は剣を正眼に構える。

それは高校に入ってきてからずっと、一刀が目指した先輩の構えだった。

「いいわねえ、その眼・・・すこしゾクゾクして来ちゃったわ。」

孫策もまた、自然体で剣を構える。

「私は孫策、字は伯符よ。」

「俺は北郷一刀。字は無い。」

字が無いとは随分変わってるなと思いながらも孫策は真っ直ぐなその闘志に釘付けにされた。

（・・・やってみるか・・・）

一刀は【繰】を使い探険を4本中に浮かせる。

「凄いわねそれ、どうなってるの・・・」

仮にも時代は三国志。

その世界の住人である孫策にワイヤーアクションなどのトリック（実際タネはないのだが）はだと疑うことはしないので一刀の妖術はかなり驚かれていた。

「これも企業秘密さ。」

「あ、そ・・・それじゃあ」

孫策から凄まじいまでの殺気が飛んでくる。

左慈の訓練を受けていた一刀でもこれほどまでの殺気は想定外だった。

（なんて殺気だ！でも・・・耐えられなくは無い！）

（ふうん・・・これを耐えるか、なかなかやるようね）

久しぶりの強敵に歓喜する孫策。

そんな彼女に対し、一刀は不動先輩の構えを思い出していた。

（毎日見てきたんだ、俺はあの人を・・・）

出来るはずだ。あれだけ左慈の特訓に耐えてきたのだから。

（やってみるさ・・・たとえ相手が英傑でも！）

孫策、三国屈指の武将だった人間が相手でも。

この世の理不尽に立ち向かっていこうと決めたのだから。

覚悟を・・・決める。

頭の中で自分ではない誰かの言葉が響く。

一刀にとってはその声が、

孫策にとってはその動きが、

戦いの始まりを合図していた。

アイツには斬れない(後書き)

リライトいいよリライト・・・

マジでリライトおもしれえ！

予約特典パネエ！！

という訳で皆もリライト堪能しろよ！！・b b

満身創痍（前書き）

てめえ達のブラウザはなくなりました。

新しい話をどう使おうと

こちらの勝手

という理屈なわけだす。

それでは、下へ行ってください。

満身創痍

周りの黄巾党の陣は孫策軍が行った火計によってあちこちから火の手が上がっていた。

その炎が孫策の体をその場に赤く浮き上がらせる。

彼女の体には傷ひとつ無い。

そんな彼女の向く方向には、左腕から血を出して膝をつく一刀の姿。

彼の呼吸は荒い。

これは当然のことだろう。

しかし孫策の息も多少の乱れを感じさせることに、宿将の黄蓋は驚きを隠せなかった。

30分前

一刀は正面にいた孫策に斬りかかる。

師錬靴によるすり足はいつも剣道場でする練習のソレとは大きく違い、まるで滑るように孫策のもとに体を進ませてくれた。

孫策の一瞬の動揺を一刀は見逃さない。

勢いのままに突きを繰り出した。

「なかなか速いわね、でも！」

孫策は余裕を持ってそれを避ける。

しかし一刀に焦りは無かった。

「そうくると思ってたさ！当たれえ！！」

一刀の頭上、孫策の頭上から4本の短剣が降り注ぐ。

上とは人間にとって絶対的死角の1つである。

上を向いて歩こうなんて言葉もあるが実際そんなことは出来ない。

故に孫策は一瞬反応が遅れてしまったのだった。

その一瞬は短剣が孫策に殺到するのには十分な時間だった。

一刀は勝ちを確信し心の中でガッツポーズをする。

しかしその確信は軽い絶望となって一刀に帰ってきた。

「ハアアッ！！」

孫策はその場で回転し、剣で短剣を全て叩き落していたのだ。

カキキキイン！という音の連鎖が一刀の耳にはとても痛いものだった。

「その程度の手品で私の頸はあげられないわねえ。」

孫策が余裕の表情で一刀のもとに走りこんでくる。

その剣先は正確に彼の首筋を目掛けていた。

「グッ！」

慌てて剣を両手で持つてガードするも、ありすぎる力の差が一刀の体を宙に浮かせていた。

「もらったわ！」

孫策が剣を突き出す。

空中で身動きが取れない一刀に、それを避ける術は無い。
しかし彼の顔に諦めの色は無かった。

（だけど・・・防ぐくらいなら！！）

一刀は長剣を残りの5本全部を【繰】で浮かせ、体と孫策の繰り出す突きの間に壁のように入れた。

その考えはドンピシャで、孫策の突きは威力を失い一刀の体に届くことはなかった。

しかし、ガードした剣の方は衝撃により一刀の体に殺到していた。

「なっ！やべえ！！」

一刀はとっさに両腕を顔の前に持つてくる。

運良く3本は一刀の体を外れてくれたが、残りは1本は刀身の腹が足に当たり、もう1本は彼の左腕を掠めていった。

「ウグツ・・・」

地面に着地した彼は左腕を庇っていた。

「・・・残念だったわね、でも容赦はしないわよ。」

「いらぬ心配さ、これくらい・・・」

一刀は苦しそうだったが我慢して孫策を見返していた。

「そう、なら大丈夫ねっ！」

孫策が驚くべき速さで懷に飛び込んでくる。

一刀は右手になんとか右手で握っていた長剣をガードしようと体の前に持ってくる。

しかし目の前に孫策は居なかった。

「こんな簡単な誘いにッ！」

声が聞こえた方向は、後ろ。

振り返ってはいけないと思いながら一刀は思いつき前に踏み込む。

師錬靴がその青い光を強め一刀の脚力を極限にまで高めてくれる。

それが無かったら今頃一刀は背中から真っ二つにされていたことだろう。

それは一刀自身が一番強く感じていた。

（ありがとうな、左慈・・・これがなきゃ今頃死んでたよ）

心の中で左慈に感謝する一刀。

孫策はそんな彼を見て驚いていた。

（今のあの瞬発力は何！？・・・この子は危険ね・・・）

今、彼を見て湧き出る感情は畏怖の念。

この世界の者では無い。それだけはハッキリ解る。

ではどの？最近噂の『天の御使い』なのだろうか？

様々な考察が頭の中を飛び交うが今の速度で懷に飛び込まれたら危険だ。

特に最初の突きは素晴らしいものだった。

（でも、あの子の技じゃないわね・・・見よう見まねかしら？）

だとしてもかなりの再現度だ。

おそらく毎日みてきたのだろうそのマネ突きは一片の迷いも無かった。

「なんだ？来ないのかよ。」

一刀が孫策を挑発する。

これは1つの賭けだった。

孫策との力の差は激しすぎる。

だが上と同時に、後ろも人間の絶対的死角の1つであった。

いくら彼女でもこれは避けられないはず。

そんな打算から一刀はわざわざ危険を冒してまで彼女を挑発した。

（へえ、この状況で誘ってくる、か・・・）

戦闘に関しては天才的な勘を発揮する孫策は一刀の考えがだいたいは読めていた。

しかし、どう攻撃に繋げるのか孫策には思い浮かばなかった。

「言ってくれるじゃない、じゃあ・・・行かせてもらっわ！」

孫策はここ一番のスピードを出し、一刀に斬りかかろうと一気に接近する。

（来た！・・・成功してくれよ・・・！！）

昔から動体視力だけは人一倍以上と言われていた。

孫策の動きもまた、人並みはずれた動体視力でなんとか捉えていたのだった。

故に一刀はこの賭けに出れる。

「今だ、【繰】!!」

操るものはさっき弾かれた長剣4本。

それがある場所は孫策の後方――背後だった。

「ッ!・・・策殿!!」

見えていた黄蓋には気付かれたが、孫策は気付かずに向かってくる。

一刀の操る剣が孫策の背中に刺さるのと彼女の剣が自分の体を斬りつけるタイミングはほぼ同じ。

しかし一刀は恐怖を押し殺し【繰】に使う集中力を高めまくった。

孫策の背中まであと少し。

あと30センチというところで孫策の動きがほんの少し遅くなる。
一刀は剣が刺さったものだと思ったが彼女の表情からそれは考えられなかった。

ならばなぜ?

「残念だったわね。」

「――――ッ!!」

読まれていた!

しかもいとも簡単に。

孫策がくるりと体を反転させすぐそばまで迫っていた剣を叩き落す。

「クソッ！」

ここで【繰】を使って短剣で牽制せず、自ら上段の構えで孫策に突っ込んでしまったのは、彼の若さ故の過ちであった。

「まだまだとんがってるわね。」

孫策は微笑みながら一刀の攻撃を捌き、彼の左二の腕に剣を突き立てた。

「グアアアッ!!」

激しい痛みが左腕から伝わってくる。

あまりの痛み思わず剣を手放してしまい、孫策に絶好の隙を見せてしまった。

孫策はその隙を見逃さず、彼の腹に蹴りを入れる。

するといとも簡単に彼の体は吹っ飛び、剣も抜け、2メートルくらい後方に一刀は飛ばされた。

「うぐうう・・・く、そ、っ・・・」

一刀は立ち上がるも多少のよろめきを残す。

その時、黄巾党の陣内各地から爆発音と火の手が上がった。

「策殿、穩がやったようですぞ！」

その言葉で一刀はこれが孫策軍の仕業だと理解する。

（皆は・・・無事なのか・・・？）

「ええ、じゃあ早速止めを刺してあげましょうか。」

孫策が一刀に近寄ってくる。

一刀は膝が笑っているのに気付き思わず地面に膝をついてしまった。

そして状況は冒頭へ

「あら、諦めは悪い方だと思つてたけどもう降参？」

残念、と孫策は気軽に南海霸王を一刀の首に突きつける。

（チクシヨウ、まだだ、まだ何か手があるはずだ！）一刀は必死に周りを見る。

しかし既に剣は何処かに飛ばされており、武器になるのは肩ベルトにある頼りのない6本の短剣だけだった。

「名残惜しいけど、仕方ないわよね。」

孫策は心底残念そうに言う。

ふと、一刀は気付いた。

自分を救う青い光が足元から漏れていることに。

孫策も一刀の様子がおかしいと感じ彼の顔を覗き込むように見る。

そんな油断が生まれた瞬間だった。

「もらったーーーー！！」

「なっ！？」

一刀が師錬靴のパワーを引き出し、孫策の剣を思いつきり蹴る。

そのあまりの威力に孫策は耐えられず、南海霸王を手放してしまった。

「はああああああ！！！！」

一刀はそのまま立ち上がり、孫策の腹に師錬靴キックを入れる。

孫策は驚いたような目を印象に残し、後方の天幕に突っ込んでいった。

「なっ！策殿！無事か！？」

黄蓋は慌てて天幕に近づくも反応は無い。

「貴様・・・！よくも！！」

黄蓋は怒りの弓を一刀に向け、放とうとするも肩に置かれた手で我に帰る。

「そう・・・慌てないでよ、祭・・・」

「策殿！ご無事で！」

「ええ・・・それよりあの子、凄いわね。」

さつきまで孫策から飛んできた殺気が霧散し、代わりに歓喜の気が及んでくる。

「私が本気になったのは久しぶりだもの・・・！！」

（ヤバイ！）

これは別に自らが誇る動体視力でもなければこの世界に来て目覚め始めた危機察知能力でもない。

生物としての生存本能が、満場一致で「逃げる」と告げていた。

（これいじょう戦ったら本当に死んじゃう！）

師錬靴を見る。

さつきまでは頼りがいのある綺麗な青だったが、今はその光さえも豆電球のように感じられた。

（こりゃあ逃げても追ってきそうだしなあ・・・）

孫策はもう南海霸王を拾ってきており、剣を1本持っただけの一刀にとてつもない猛攻を加えていた。

もう万策は尽きていた。

なんとか凌ぐくらいは出来たがもう限界に近い。

もっと【繰】を鍛えておけばよかったなあ、と今更ながらに思う。

（こんな時に助けてくれる人のことをヒーローって言っただろうなあ）

一刀は諦め気味にそう思う。

だがそう思った時点で一刀は諦め切れなかった。

陽炎の目標の達成を、大陸の平定を手伝い、この目で見納める。

彼の為にも、自分の為にも今ここで死ぬわけにはいかなかった。

一刀の体力が限界に近いのを感じた孫策は止めを刺そうとする。

「神様へのお祈りは済んだ？」

「出来ればあと50年はお祈り続けさせて欲しいね・・・」

まだジョークを言うくらいの気力はあった。
しかし肝心の体力が無い。

万事休すだった。

「そんなには待てないわ。私は短気な女だが、らっ!!」

孫策が剣を振りかぶり、そのまま振り下ろす。

一刀はその凶刃をただ睨みつけていた。

「主様ああああ!!」

不意に、この場にまったく似合わない声が耳に飛び込んでくる。

その一瞬後で、南海霸王に真っ直ぐと飛んでくる影が見えた。

その形状は反り返った棒。

それが刀だと気づいた時には刀は既に一刀と孫策の間に突き刺さっていた。

「・・・これは・・・?」

峰の付け根にあるローラー。

この形状には見覚えがあった。

振り向いて見えたのは、純白の羽織。

「無事か!一刀!!」

ヒーローが、そこに居た。

満身創痍（後書き）

おつかれちま。

というわけでVS孫策終わりました〜
戦闘時の表現はまだまだかな？w w

文才のない自分をうーらーむー

感想・評価どしどし受け付けております！！

持ち掛け（前書き）

期末が近づいて来た・・・

それでは今回も投稿投稿つと

持ち掛け

子供の頃、誰もがヒーローに憧れたことだろう。

ピンチのヒロインを華麗に救出し敵をかつこよく倒す。

王道だがそれ故に人気がある。

そんなヒーローが一刀の前に現れてくれた。

（あれ？今の感じじゃ俺がヒロインみたいじゃね！？）

その辺は言葉のあやさ（キラン！）

「あ、主ざば〜！！！！！」

「陽炎さんならともかく・・・紡まで何でここに？」

そばに駆け寄って来た紡に力なく尋ねる一刀。

紡は半べそになりながらも真面目に答えてくれた。

「だ、だってズピツあるじさばがヒッグ帰ってこないって、かエグツげろう様が。」

もうほぼ泣きの状態の紡をあやしつっ一刀は陽炎の方を見る。

陽炎はちょうど刺さっていた刀を抜いて孫策と向き合っているところだった。

「アンタが孫策か、お噂はかねがね。」

「アナタは？」

孫策が警戒しながら陽炎と向き合う。

勝負を邪魔されたおかげで彼女の機嫌は悪かった。

「俺はここから東にある新野城の主で劉表の客将の朱然だ。」

朱然という単語に孫策と黄蓋の両名が反応した。

「朱然・・・あの陳留近郊で黄巾党三千を屠ったという男か。」

黄蓋の呟きを片耳で聞きながら孫策は臆することなく彼に話しかけた。

「その子、アナタのところの？」

一刀を剣で指しながら尋ねる。

「ああ、北郷一刀と言ってな、『天の御使い』様さ。」

それを聞いた時孫策はやっぱり、と思っていた。

さっき感じた異質な感じは確かなものだった。
それに裏が取れたただけだ。

「あらら、じゃあ私御使い様にとんだ不遜をしてしまったわね。」

悪びれもなく言う孫策。

黄蓋がまずいだろうという表情をしているのには気付いていたがそれでも気にしない。

「いやいや、コイツにもいい経験になっただろうさ。」

一刀は2人に色々言われて悔しいという念はあったがそれ以上に一触即発のこの状況に怯えていた。

もしバトるはめになったら自分が紡を守らなければいけない。

不意に紡の手を握る力が強くなってしまった。

紡もこの状況に怯えているのか一刀の手を強く握り返してきた。

「もう黄巾党は全滅した。俺たちが争ってもお互い何の得もないと思うが。」

陽炎が穏便に話を片付けようとする。

「確かにそうかもしれない。でも売ってきたのはその子よ?」

「え!？」

急に原因とされた一刀。

彼にはまだスルースキルが備わっていなかった。

「黄巾党の連中を斬り捨ててたら急に来てねえ。」

「ちょ、ちょっと待て!そっちが喧嘩腰だったからだろ!？」

「知らない」

そもそも賊と勘違いしたのはそつちだろ！
オッサンを斬りやがったくせに！！

一刀はグヌヌと孫策を睨みつけるが彼女は洗濯物が風を受けたかのようにヒラヒラと気楽でいた。

「まあまあ、とりあえずそつちは何でこんな所に？」

陽炎が2人の間に入り聞いた。

「私も客将の身分でね、飼われてる袁術の命令で討伐に来たのよ。」

「袁術」と言う瞬間だけ嫌な顔をする孫策。

それだけでもかなり嫌っているということが見て取れた。

「なるほどな、それじゃあ俺たちは引き下がるしかねえな。」

その一言にこの場に居る誰もが驚く。

「アナタ気は確か！？せつかくの手柄を自ら手放す気？」

孫策が中々の剣幕で言い寄ってくる。

「ああ、だがアンタは君主の命令で来たんだろ？しかも険悪そうだし失敗したら首でも斬られるんじゃないのか？だからここは譲ってやるよ。」

「・・・アナタ、私を舐めてるの？」

孫策からとてつもな怒気が伝わってくる。

一刀と紡は動けなかった（前者は物理的に）が陽炎は涼しい顔をして受け流していた。

「いやいや、アンタは大物になりそうだからな。だから今の内に貸しを作っとくのさ。」

ニヤリと悪い笑顔を見せる陽炎。

その顔に孫策も怒気が殺がれてしまった。

「ハア・・・解ったわよ、負けたわ。退いてあげる。」

「策殿、今なら何とか太刀打ち出来そうですが？」

黄蓋が小声で尋ねてきたが孫策はそれをやめさせた。

「いいえ、多分向こうもその気になればこっちを全滅させられるはず。それでも攻撃してこないのは向こうに戦う意思が無いということだわ。」

あるいは余裕の表れねと孫策は続けたかったが、喉の奥にしまい込んでおくことにした。

「そうか、じゃあこちらは城に戻る。アンタも達者でな。」

「ええ、私達も撤退するわ・・・いらない借りを作ってしまったけ

どね。」

ため息をつく孫策にへへへッと悪戯が成功した子供の様に笑う陽炎。そんな彼に、孫策もまたクスリと笑ってしまうのだった。

（あんな笑い方も出来るんだ・・・）

一刀が孫策を見て多少の可愛らしさを見出していたら彼女が一刀に近寄ってきた。

ばれたのかと思って一刀は少し身構えるも孫策に敵意は無かった。

「アナタの戦い、まだただけど少し面白かったわ。出来たらまた闘りましょ。」

軽い死刑宣告に一刀は怯えながらも笑って返した。

（ああ・・・向こうから見たらかなり硬い笑いなんだろうなあ・・・）

「それじゃあね、機会があつたらまた会いましょう。」

「ああ、そつちも気を付けてな。」

別れを告げ黄蓋と共に馬で自分の軍に戻っていく孫策。

陽炎は笑って見送っていたがその笑いにはまったく感情がこもっていなかった。

「あゝあ、せっかく盛り上がったところだったのに・・・」

孫策が黄蓋の後ろで愚痴を言っていた。

「まあそう申されるな。ここは手柄を譲らただけありがたいと思うおうではないですか。」

黄蓋は慣れているので冷静に対処していた。

「もう！何が貸しを作る、よ！いいわよ！この火照りは帰ったら冥琳で晴らすもん！！」

「ハッハッハッ！冥琳も仕事に恋に、休む暇が無のう！」

黄蓋はまた慣れていたのでこともなく対処する。

「ハア、これが勝てる相手じゃなかったからイヤなのよねえ・・・」

「なんと、天下の策殿が弱気とな？」

黄蓋は少しばかり驚き後ろの主を見る。

「まあね、見合っただけで実力が解る相手は久しぶりだったもの。」

「なるほど、わしもその内相手にしてみたいものですよ！」

黄蓋はそう言って馬を急がせる。

2人の前には勝利の雄叫びをあげる赤い自軍と、カンカンに起こる

周喩の姿があつた。

「さて、俺たちも帰るか・・・お前には新しい服が必要だな。」

一刀の服はズタボロだつた。

本気の孫策の攻撃を一刀がすべて凌げるはずが無く、防ぎ切れなかった攻撃は全て一刀の服や体に吸い込まれていったのだ。

もはやその辺のホームレスの方がまだまともな格好をしているほどだつた。

「あ、あー！何でこんなボロボロに・・・」

せつかくの一張羅だつたので後が無くなり悲しみに暮れる一刀。彼に助け舟が入るのは城に帰ってからであつた。

「ま、まあそんな主様も素敵ですよ！」

献身的に制服を周りから庇ってくれる紡。そんな優しさが、一刀には痛かつた。

「帰還の準備は3人が進めてくれている。俺たちも帰ろう。」

周りにはもう消し炭となつた黄巾党の陣。

もちろん、斬り殺された死体や焼き殺された死体がそこら中に転がっている。

人が、死んでいるのだ。

陳留の時はあつというますぎてこついった感傷に浸ることは出来なかったが、今は余裕がある。

日本育ちの一刀にはやはり厳しいものだった。

「一刀。」

「ん？」

陽炎が肩を貸しながら聞いてくる。

「お前、何人殺した？」

答えられない。

出陣して1人も殺していないのは流石に敵前逃亡しすぎだと思ったからだ。

しかし陽炎は見透かしたように続ける。

「・・・なるほど、1人も殺せなかったか。」

陽炎は別段責めるでもなく、少しばかりの苦笑を混ぜながら言った。

「主様・・・」

紡がフォロー（？）を入れる。

「陽炎様はこう言ってました。主様には敵は斬れないと。」

一刀はその言葉で自分の限界を知った。

会って間もない陽炎に見抜かれるほど浅い自分の底を。

「だがな、一刀。それは弱さじゃねえ、優しさって言うんだ。」

一刀は黙って彼の話を聞く。

「戦果だけ聞けばお前を弱虫と言う奴もいるだろう、だがそれは違う。お前は元々『仁君』と呼ばれる側の人間なんだ。」

「仁君・・・？」

「ああ、力では無く『徳』を持って世を平定する力。俺とはチヨイと性質の違うもんだな。」

陽炎はおそらく『力』だろうと一刀は想像するがそれは何か違うように断定できなかった。

「だから一刀、俺はお前を利用する。お前の『徳』を使いまくって天下を獲ってやるんだ。」

「うん、別にいいよ。俺は陽炎さんの天下獲りが見れりゃ後悔は無いさ。」

「・・・結構嫌な言い回しを使ったんだが・・・まあいいか。」

「主様、もうすぐ本隊です。休んでしまえますか？」

紡が前方を見ながら言う。

「刀はそれを見てただ「そうか」と言うとそのまま寝てしまった。

「疲れたんだろうな、寝かせといてやるか。」

「あ、帰るまでのお世話は私がやります。」

3人は本隊に合流し、無事に帰路に着いたのだった。

持ち掛け（後書き）

短いですがキリがいいのでここまでです。

下手したらまたオリキャラ出すかもしれん・・・
最初あんな啖呵切ったのに

まあ、そのへんは容認下さい。

帰還（前書き）

期末前日になにしてんだ俺？

帰還

変な空間に居た。

地面しかない真っ白な空間。

地平線が見えそうな気もしたが地面も空も何もかも真っ白で線も何も無いのだ。

あるのはただ地面を踏んでいるという感触だけ。

「なんだ？ここ・・・」

一刀が見ているものは夢か現か、記憶から辿るに夢と解るは解るがいかんせん地面の固い感触がハッキリすぎてるのだ。

「夢、かなあ・・・変なところだなあ。」

覚めろ覚めろと思うも一向に覚めない。
そもそも夢って自分の意思で覚めるのか？

そんなことを思いつつも空間を彷徨っていると目の前に紫色の霧が現れる。

「あら、生き残ってるのね。」

その霧から現れたのは紫のローブを頭から被った少女。
声から少女と解ったが顔が見えないので謎の人物と言うことには変わりなかった。

「アンタは？」

一刀は少し身構えて聞く。

武器のベルトも装備していなかったので丸腰だ。

「そう身構えないで、私はアナタに危害を加えるつもりは無いわ。」

少女は懐から水晶を取り出して光らせる。

「それで未来が見えたりするの？」

その水晶の光は優しい青で、思わず引き込まれそうな深い色だった。

「いえ、これはただのガラス球よ。雰囲気作りにどうかと思ってね。」

「

ちょっと幻滅した。

「私自身、驚いてるわ。まさか黄巾の乱を生き残れるなんてね・・・
アイツが推薦してきた奴だからどこの馬の北郷かと思ったけど、
なかなかやるじゃない。」

骨の代名詞にされたせいでちょっぴり凹む一刀。

「アンタは一体・・・」

「私のことは気にしないで、いつかアナタの方から近づくと
思うから。」

ロープの合間から緑色の瞳が覗く。

その眼は先程の水晶のように深い、だが色は緑色をしていた。

「まあ今はこの調子で頑張ってくれと嬉しいわね。次は洛陽よ。」

洛陽という単語に反応する一刀。

無双では董卓のステージだったからだ。

「てことは、次は・・・」

「ええ、反董卓連合ね。」

無双では絵に描いたような悪役っぷりだったから対して情は湧かない。

「まあ、この次もせいぜい生き残ることね。あんまり興味なかったけど、私も興味が出てきたし・・・」

少女は少しフフツと笑いながら言う。

その姿に一刀は少し不気味な妖艶さを感じたのだった。

「それじゃ、今回は様子見だから私はもう行くわね。」

「あ、待ってくれ。せめて君の名前だけでも・・・」

一刀が呼び止めて少女を止める。

「何よ、駒のくせに生意気ね・・・まあいいわ。名前はまだ言いたくないから言わないけど今は『魔女』とでも名乗っておきましょう。」

言いたくないからって・・・

魔女と名乗った少女は最後に一刀の手にある物を渡す。どちらかというと身長的には魔法少女が相応しい。

「第一ステージを乗り切ったご褒美よ。それは常に身に付けておきなさい。」

一刀の手に渡された物は銀色に光る翼の形を模したペンダントだった。

「男はアクセサリーにも気を使わないと駄目よ。」

余計なお世話だと言ってやりたかったが黙って貰うことにした。

「それじゃ、今度こそサヨナラよ。私が消えたらこの空間も消えるから、目覚めたらゆっくり休むことね・・・あと私のことは口外は禁止でヨロシク。」

そう言っただけ魔法少女（笑）は霧の中に消えていった。

その瞬間、一刀の視界も暗転する。

それは夢から目覚めるという一刀への合図でもあった。

「う、うゝん・・・ここは・・・俺の部屋？」

知らない天井だ。と言いたかったが見知った天井だったので言いそびれてしまった。

（確か・・・変な夢を見ていたような・・・）

あんまりよく思い出せない。

確か妙に大人びた人が出てきたような・・・

まあいいかと思い一刀は身を起こす。

その時、右手に違和感があった。

何かと思って右手を開くと銀色の翼を模したペンダントが中に入っていた。

放つ光は銀で出来ているのか綺麗な色をしていた。

「これは・・・！」

全て思い出す。

魔女と名乗った少女のこと、次の戦いが近いこと、そしていちいち意味深なことを言っていたことを。

（夢じゃなかったんだ・・・）

一体あの子はなんだったのか。気になる点は幾つか浮かんでくるが当の本人はこの場に居ないのだ。

「あ、服が変わってる。」

孫策との戦いでズタボロになったフランチエスカの制服は脱がされており、政務机の上に畳まれて置かれていた。

今一刀が身に着けているのはゆったりとした甚平のような服だった。

（一応中華風なのね）

どこまでも中国大陆な世界に苦笑する一刀。

「さて・・・痛ッ！」

起き上がろうとすると体中に痛みが走る。

孫策の斬撃は少なからず当たっており、一刀の体を制服ごと切り刻んでいたのだった。

（これじゃあ動けない、か・・・仕方ない、寝てよう）

今一度枕に頭を沈める。

ふかふかな枕は一刀の頭を優しく包み、ゆっくりと眠りの世界へ

「オイコラ、来てやったぞ。開ける。」

連れてってはくれなかった。

「左慈、北郷君はまだ動けないですから。それに鍵もかかってませんよ。」

そう言つて宇吉と左慈が部屋に入ってくる。

「なんだ、起きてたのか。」

「ご挨拶だね、左慈・・・ありがとう。」

「なんだ急に、おかしな奴だな。」

急にお礼を言われたじろぐ左慈。

なかなか人に感謝されるのには耐性が無かった。

「師錬靴・・・あれが無かつたら今頃死んでたよ。」

「ああ、アレか。気にすんな、お前に死なれては困るからな。」

「おやおや、アレだけ心配してたくせに随分な物言いですね。」

「なっ！馬鹿野郎！！」

左慈は顔を赤くして宇吉に蹴りを入れる。

宇吉は吹っ飛び壁に半分埋まってしまった。

「まあそういうことだ、それより早く怪我を治しとけ。」

「・・・反董卓連合、だよな？」

左慈と壁から抜け出してきた宇吉が驚いた表情をする。

「お前・・・そんなに三国志好きだったっけか？」

「これは驚きですね、今までのアナタは結構鈍感な方でしたが・・・インテルでも入ったんですか？」

「一刀は夢の話をしたかったが一応口止めされていたので話せない。」

「ふと思いだしたただだよ。気にすることでもないだろう？」

「まあ、そうですね・・・あ、あと北郷君の服を持ってきましたよ。」

そう言つて宇吉が取り出したのはこの世界にやってきた時に一刀が身に着けていたのと同じ、聖フランチェスカ学園の制服だった。

白いポリエステルの光が無駄に懐かしく感じる。

「制服！・・・でも何で2着目か？」

「私達は外史の管理者ですからね、これくらいは用意できますよ。」

宇吉はさも当然といった感じで話す。

「それより、黄巾の乱も収まり都洛陽では政争が多発しています。董卓が台頭するのも時間の問題でしょう。」

「そして戦争か・・・」

「ああ、黄巾党討伐で俺たちの名は上がっている。いつ袁紹からお呼ばれが来てもおかしくない状態だ。」

次の戦いまでの時間が無い。

話を聞くと陽炎は降伏した黄巾党を軍部に組み込んでおり、新しく志願してきた兵を合わせて新野城の軍勢は1万5千に膨れ上がっていた。

これなら諸侯も簡単には手を出さないだろうと踏み遠征に出れる。

これが今の新野の状況だった。

「紡でも呼んで来てやろうか？アイツが一番お前のことを心配してたからな。」

「ええ、寝ずに北郷君を看病していたくらいですからねえ・・・」

（紡・・・）

彼女の可愛さは最早天使の領域へと近づいていた。

「それじゃあ連れてくる。宇吉、後は任せたぞ。」

左慈が出て行った後で宇吉が一刀に話しかける。

「さて、北郷君・・・ここで重要な話があります。」

神妙な顔の宇吉に思わず一刀は真面目に何だ？と答えてしまった。

「北郷君、『おとおと』について嗅ぎ回っているそうですね・・・」

一刀はよほどしまった、と思った。

そう、何を隠そう一刀と左慈の敵である『おとおと』のヘッドは目の前に居る宇吉なのだ。

「宇吉・・・お前の活動にどうこう言う気は無い。だが紡は、紡だけは・・・!」

一刀はどうしても紡を救いたかった。

それが主である自分に唯一できることであろうから。

「無駄です。既に水鏡女学院の人間の大半はBLに目覚めました・・・我等の勝利は近いのです!!」

このイカレポンチめ!!

そう言ってやりたいのは山々だったが下手なことを言つとまた返り討ちに遭いかねない。

今できることはただ左慈が紡を連れてくるのを待つだけだった。

起きた姿を見て紡が一刀の胸で泣いているのを、3人はただ微笑ましそうに見ていた。

1ヵ月後・・・

回復した一刀は玉座の間を訪れていた。

いや、今日は緊急軍議の予定があつたのだ。

「集まったな・・・一刀も、1週間前から随分良くなったな。」

一刀は1週間前はまだ充分に動くことは出来なかったので陽炎はその息災な姿を見て喜んでいた。

「うん、薬が効いてね、ありがとう。」

陽炎はいいってことよ、とかぶりをふると本題に移った。

「さて、一昨日華北の袁紹から檄文が届いた。」

傍らにいた侍女が一巻の紙で出来た巻物を持ってくる。

陽炎はそれをデカイ会議机の上に広げた。

「掻い摘んで言うと、都で董卓とかいうのがのさばっているので一緒に連合を組んでソレを倒そうって内容だった。」

陽炎の元にも来た。

反董卓連合の檄文。

一刀はやっぱりという思いでその巻物を見つめていた。

「主様、どうかしましたか？」

「いや、なんでも無いよ。それより紡、今回の戦いで軍師をやるらしいじゃないか！」

紡は一刀が休養中の間も政務・軍務に励み続け、皆に認めてもらえる程の手腕を見せていた。

「はうゝ」そうなんですよゝ」私、頑張りますよ!!」

いつしか出世した紡の隣に真羅も居る。

何気に真羅は左慈や紡の次に一刀の部屋を訪れる回数が多く、政務の案件や包帯の交換などをしていていた。中々に世話好きな女性だった。

「いいか、一刀。今回は怪我をすることは許されんぞ。ご主人様の目的を内側から妨げるようならその首が胴からオサラバすることになるからな・・・」

しんらは てをパキポキさせ いかくした！

かずとは おびえた！

「既に劉表の許可は得てある。明日の昼には出陣するぞ。」

皆の顔が一気に引き締まる。

「一刀、行けるか？」

「ああ、上等!!」

孫策との戦いで消耗した剣は宇吉が用意してくれた。制服もOK。

横になりながらも妖術を鍛えなかった日は1日も無かった。

準備は万全だった。

しかし、心の準備はそうはいかない。

「そうか・・・今回は斬れるか？」

「・・・解らない、でも俺はもう決めたんだ。どんなに苦しくても、苛まれても、目の前の敵は止めてやるって！」

一刀が声高に宣言する。

陽炎はそれを頼もしそうに見ていた。

「そうか！なら安心だな。お前は今回左慈と共に行動しろ。宇吉は俺と行動、紡は真羅と組め。」

「ああ」「うん！」「解りました」「了解です」「ハッ！」

一同が臣下の礼をとる。

「よし、じゃあ明日の昼前、城門前に集合！左慈と真羅は俺と調練所に行くぞ。」

そう言つて陽炎は左慈と真羅を連れて出て行つた。

「じゃあ紡、俺達は準備でも・・・」

「ご、ごめんなさい主様。私は今回使う作戦の見直しがあるので・・・明日また会いましょう！」

紡はペコリとおじぎをして出て行つた。

「・・・・・・・・・・」

「あ、私も部隊の報告があるので失礼しますよ。北郷君も暇なら妖術の訓練でもしてたらどうです？」

まったくためにならないアドバイスを残し出て行ってしまった。

兵士や侍女も出て行き、残されたのは一刀と机の上の巻物だけとなった。

「・・・・俺、本当に『天の御使い』だね？」

その問いに答えられる人間は物理的に誰も居なかった。

帰還（後書き）

チヨイト急ぎ足で物語が進みます。

おそらく戦闘時にはまた長ったらしい文になるのではないかと・・・

次からは反董卓連合編です！

WindowsXPの標準辞書じゃ「しすいかん」って正しく書けねー！（前書

期末・リアル付き合い・PCオシャカ（これ重要）でかなり遅れて
しまいました。申し訳ございません。

なんとか親のPCでやってますがこれからが心配です。
新しいノート買わないと・・・

WindowsXPの標準辞書じゃ「しすいかん」って正しく書けねー！

新野を出発してから約2週間後、一刀達朱然軍は陳留近くの反董卓連合軍の駐屯地に到着した。

「こりゃあ、壮観だなあ・・・」

風になびく数々の牙門旗、いづれも一刀が政務をしている折に聞いたことのある名前ばかりであった。

連合の創設の片翼を担う曹操と、正史では反董卓連合の総大将を務めた袁紹の牙門旗はその中心にあった。

「主様、あれ・・・」

紡が袖を引いてある牙門旗を指差す。

指が指すその方向には赤地に黒文字で『孫』と書かれた牙門旗があった。

「江東の、孫策か・・・」

陽炎が補足を付け足す。

あの軍には世話になったものだ。

「一刀、解つてるとは思うが今回アイツ等は味方だ。変な気は起こすなよ。」

「解つてる、そこまで引き摺る男じゃないよ、俺は。」

それを聞くと陽炎は頷いて陣門の衛兵に話しかけに行った。

「荊州の劉表の客将、朱然だ。」

「朱然様、ですね。兵数と兵糧をお教え下さい。」

「兵数は2万、兵糧は2ヶ月分はある。」

「了解しました、ではここから先の天幕にて軍議が行われております。ご参加下さい。」

衛兵はそれだけ言って何処かへ行ってしまった。

「ご主人様、誰かお連れになりますか？」

真羅が横から陽炎に話しかける。

「そうだな・・・お前は曹操に狙われてるから無理だしな・・・」

真羅は「そんな!？」と反論していたが陽炎はそれを尻目に一刀のところに歩み寄ってきた。

「一刀、紡、一緒に来るか？」

「えっ!？」「いいんですか!？」

2人は当然の如く驚き、陽炎に尋ねるも本人は「いいってことよ!」と気楽に言い放った。

一刀にとっては軍議に参加すること自体は苦ではなかったが陽炎の後ろ、どう考えても真羅です、本当にありがとうございますな位置から飛んでくる殺気やら嫉妬の念やらに耐えることのほうが苦行であつた。

「ほ〜ん〜く〜ん。」

「呼び名変わつてゐるぞ真羅・・・」

「そんなことはどうでもいい！それより貴様、万が一ご主人様の身に何かあつたら・・・」

チャキン

「なんも無いと思うからとりあえずその物騒な槍しまつてー！」

2人の漫談（？）に陽炎が助け舟を出す。

「そろそろ行くぞ、大切なのは第一印象だ。舐められないようにぶちまけていくぞ！」

「お、男忍！！」

「主様、なんで金髪の付け髪を？」

「リーゼントは男の夢なのさ。」

紡は頭の上に「？」を乗つけていたが一刀は気にせず陽炎に付き天幕に入つていった。

「おゝほっほっほ、おゝほっほっほ、おゝほっほっほ、おゝほっほっほ・
・・」

予想外だった。

いや、読者的には予想の範疇というかど真ん中だったであろう。

流石の一刀も物々しい三国志の世界で金髪ドリルが2人もいてしかもその内の1人がこうしてお嬢様笑いをしているなんて夢にも思わなかったのだ。

陽炎は知っていたのか顔を顰めるだけで済んでいたが流石に堪えられなかった。

紡に至っては気絶一歩手前まで来ている。

「あら、新しい顔ですわね、どなた？」

金髪ドリル（大）の問いかけに天幕の中にいた諸侯の目が一斉に一刀達に向く。

ただその中で金髪ドリル（小）こと曹操と孫策だけが興味深な視線を向けてきた。

「俺は荊州牧劉表の客将の朱然だ。こっちが仲間の本郷一刀と徐庶元直だ。」

朱然という名に一同が動揺を隠せなくなる。
黄巾党殲滅時の名は諸侯にも知れ渡っていたのだった。

しかしいきなり話を振られ混乱するリーゼントの一刀。
そんな彼がこんな行動をとったのはその混乱ゆえだった。と本人は後に話している。

「ウオオラアアア！！本郷一刀だ！！夜露死苦ウ！！」

金髪のリーゼントは一刀にかつて無い程の力を与えてくれた。

しかし

「・・・・・・・・」「・・・・・・・・」「・・・・・・・・」「・・・・・・・・」

（す、スベったーーーー！！）

しかもかなり豪快に。

「え、えつと・・・徐庶です。・・・よろしくお願いします。」

紡の消え入りそうな声がいやに天幕内によく響いた。

それから陽炎には席が設けられ、一刀と紡がその両脇に立つ、という形だった。

ただ一刀はリーゼントを外し後ろの方ですすり泣いていた。

「あ、主様・・・別に気にすることありませんよ。」

「ウウウツ・・・！」

「そうだぜー例えどんなに勢いよくスベっても気にしないのが本場の芸人って奴だ。・・・まあアレはないけどな。」

陽炎の励ましは上げているのか落としているのかよく解らなかった。

そして孫策が笑いを堪えているのを隠そうとしなかったのが一番痛かった。

「さて、朱然さんのところも落ち着いたところであと1組になりましたわね。」

袁紹が気を取り直して話を進める。

「残りの1組ってどこの？麗羽。」

曹操が腕を組みながら袁紹に聞く。

真名と思わしきそれを読んでいるということは2人の関係が親しいということの意味していた。

ちなみに曹操の傍らには夏侯惇と夏侯淵が控えている。

「えーっと・・・どこだったかしら？」

「・・・アナタねえ・・・」

曹操がため息を漏らす。

「な、なんですの！？ちよつとど忘れただけで別に忘れては「どうも、遅くなつてすいません！」ほら来ましたわ！」

ちょうどよくピンク色の髪をした女の子が入ってきて袁紹がドヤあと曹操を見る。

「あ、朱里ちゃん！」

紡が小声で後から入ってきたロリに話しかけた。

そのロリは紡に気づくと笑いながら小さく手を振ってきた。

「友達かい？」

「ハイ、水鏡女学院の後輩で諸葛亮っていうんですよー」

一刀はブツと吹き出し諸葛亮を見た。

（あんな幼女が孔明の旦那あ！？）

諸葛亮といたら羽扇を振りかざして「今です！」と言ってるオジサマしか思いつかない。

改めてこの世界の恐ろしさを知った瞬間だった。

「ってことはあの巨乳様は・・・！」

曹操は袁紹を無視して話を進めた。

「全員揃ったようね、じゃあちゃんとした自己紹介をしましょう。」

曹操に「まずアナタからよ」と言われ飛び込んできたピンクちゃんに白羽の矢をたてた。

「あ、私達ですね。私は劉備、平原の相をしています。こちらは諸葛亮です。」

やっぱり劉備だった。

劉備はいきなりな展開にもすぐに対応し軽々と自己紹介をやっていた。

一刀はそんな彼女にやはり劉備だなという念をかんじたのだった。

意外だったのは孔明がこの時点で劉備軍に加入していることだった。たしか不世出の天才じゃなかったっけか？孔明！

「あれが劉備か・・・」

一番意外だったのはそれまで軍議に興味なさそうだった陽炎が初めて軍議に、いや、劉備に興味を激しく向けていることだった。

「時計回りで行きましょう、次はアナタですわ白蓮さん。」

白蓮と言われた赤い髪的女性が立ち上がる。

「私か、私は幽州牧、公孫賛だ。以後よろしく頼む。」

簡潔にまとめる公孫賛。

手合いがわかったのか他の諸侯も同じように続けた。

「うむ、わらわは袁術なのじゃ！」

「そのお供の張勳です。こちらは客将の孫策さんです。」

なんとも気の抜けた2人の後ろに控えていた孫策が1歩前に出る。

「孫策よ、よろしく。」

かなり無愛想な挨拶で閉めた孫策。

まるでこんな軍議に興味は無いと言わんばかりだった。

「俺は袁術軍一の武将、紀霊だ。」

いかにも「私傲慢です」といつているような鎧を着込んだDQN風味の男が挨拶をして袁術軍の挨拶はおわった。

その後も諸侯の挨拶はつつがなく続き朱然軍の番になった。

その時だけ孫策と曹操の目が本気になる瞬間だった。

「朱然だ、荊州の劉表の客将をやってる。こっちは軍師の徐庶に『天の御使い』本郷一刀だ。」

『天の御使い』という単語にその場の全員がざわめく。一刀自身、その雰囲気の違いにはすぐに気付いた。

ただ曹操と孫策だけはいつもと変わらぬ様子だった。

「ざわ・・・ざわ・・・」「あの男が予言の?」「普通の童ではないか」「ざわ・・・ざわ・・・」

「オホン！次の方、お願いしますわ。」

袁紹が場を静め続きを促す。

結構空気の読める娘であつた。

「陳留太守、曹操よ。こちらは夏侯惇と夏侯淵。」

曹操もかなり端的だつた。

「全員終わりましたわね？最後にこの私、名族中の名族、袁本初の紹介と行きましょう！」

「麗羽のことは皆知ってるだろうから別に名乗らなくてもいいのでは？」

曹操が横から口を挟む。

「そうだな、麗羽はなんたつて有名人だからな。」

公孫賛も乗ってきた。

他の面子もうんうんと頷いているので袁紹はしぶしぶ「わ、わかりましたわ」と言つて座つた。

「それで、今の主題はなんだつたかしら？」

曹操が袁紹に問いかける。

「ええ、今私達にとって最も重要なことを話してましたの。」

「刀はそんなこと話してたっけか?」と思い出してみたがあの高笑いが強烈すぎて思い出せない。

「この連合軍、兵数・兵の質・将数・将の質と全てにおいてあの董卓軍に勝っているこの軍に、唯一足りないものがありますわ。」

「そんなんあつたっけか?」「いや、知らん。」

「一刀と陽炎にはとても思いつかない。」

「それは、総大将ですわ!!」

かなりどうでもいいものだった!

「まあ、理屈から言ってこっぴどくのは祭りの主催者がやるもんだよな・・・」

陽炎がそついうと皆が一斉に袁紹と曹操を見た。

「あら、皆さん私に総大将をやってほしいと?華琳さんは?」

「私はいいわ、あなたがやりたいならやればいいでしょう?」

曹操は面倒くさいと言わんばかりにかぶりをふった。

「他の皆さんもやりたい方がいるのではなくて?」

「だんだん学級委員を決める会みたいになってきていた。」

「えっと、袁紹さんがやりたいならやればいいんじゃないんですか？」

劉備がそついうと袁紹は上機嫌になり高笑いを始めた。

「あら、そう？ならこの袁本初、精一杯連合軍の総大将を努めさせていただきますわ！！」

総大将も決まり、やっと軍議らしい軍議になってきた。

「では、総大将も決まったことですしこの総大将の袁本初が総大将として軍議を進行しますわ。」

議題はこれからの会敵予想地点となる泗水関の攻略についてだった。

「こちらの軍は約30万それに対して泗水関には約15万の兵が居るわ。泗水関の守将には『猛将にして良将』と名高い華雄と『神速』と謳われる張遼・・・この2人をどうするかだけど・・・」

曹操が状況を確認する。

「それより、まだ先陣を決めていませんわ。」

袁紹が空気の読めない発言をする。

「ハア・・・麗羽、今はどう攻めるかの話をしているのだけど・・・」

自分たちが来る前からこの調子だったのだろう曹操には同情を隠せ

ない。

「だからこそ先陣を決めるのは重要ですよ。どの軍を先陣に置くかによって戦術も変わってきますし。」

正論を言われては曹操も納得するしかなかった。

「・・・解ったわよ、アナタが正論を言うなんて・・・明日は雪かしらね・・・」

「いえいえ、それより先陣ですけど・・・誰か我こそは、という人はいらっしゃいませんか?」

袁紹が周りを見回す。

誰も先陣に回されるのを恐れて目を合わそうとしなかった。

しかしほのぼの劉備ちゃんは場の空気を読まずに袁紹と目を合わせてしまった。

「劉備さん・・・アナタやりたそうな顔をしていますわ。」

「えっ!??」

やっぱり劉備は捕まってしまった。

「そうですね・・・先程私を推挙してくださった劉備さんですし、ここは恩返しも兼ねてアナタに先陣という誉れを与えますわ!」

「ええええええええ!??」

哀れ劉備は自分の長所である自由さが短所となってしまうた。

「そ、そんなぁ・・・私達まだ発足したてで兵数も少ないんですよ？」

「そんなの気合でなんとかありますわ。」

無茶すぎる発言に流石の劉備も絶句してしまった。

「流石にそれは無茶が過ぎない？」

見かねた曹操が助け舟を出す。

「そうですね？なら、推挙つながりで朱然さんの軍も先陣として配置についてもりますわ。」

「えええっ！？」

飛び火が飛んできた！

一刀と紡はかなりうろたえたが陽炎は落ち着いた様子で応えた。

「別にいいが、ちょっとしたお願いを聞いてもらっていいかな？」

「なんですの？」

陽炎がニヤリとその表情を変えるのを見ることができたのは同じ所属の一刀と紡だけだった。

「先陣は俺たちがやるから総大将は一切手を出さないでくれ。」

その言葉は場を騒然とさせるのに十分な物だった。

「な、何を言っておりますの！？手柄を全て独り占めするつもりですの！？」

当然袁紹も怒りながら問い詰めてくる。

「なら俺達は先陣を降りるぞ？いやゝ華雄と張遼の突撃を受けるのはどの軍かなゝ楽しみだゝ！」

陽炎はあえて強気に出た。

しかし諸侯や袁紹は言葉に詰まる。

それほどあの2人の突撃は強烈なのだ。

「まあ嫌ならせいぜい頑張って次の生贄でも選んでくれや。」

「麗羽、この男の言う通りよ。被害と手柄を天秤にかけたらどう転んでも被害の方が多いわよ。それならいいんじゃない？」

曹操の説得も受け袁紹もようやく首を縦に振った。

「・・・わかりましたわ、泗水関攻めでは私の軍は行動を起こしませんわ。」

「袁本初はその寛大な心に感謝する。」

陽炎はそう言って一刀達に行くぞと語りかけた。

「じゃあ俺たちは戦の準備があるしな、先に上がらせてもらう。」

「解ったわ。じゃあ私たちも解散にしましょう。各々準備も必要でしょうし、いいわね？麗羽。」

袁紹はふたつ返事で了承しそのまま今回の軍議は解散となった。

「何で先陣なんか受けたんですか？」

紡が陽炎に問いかける。

一刀も同じことが聞きたかった。

「ここらで名を広めておけば後々有利だろ？それに、まあこれが一番の理由なんだが・・・」

陽炎が話に溜めを作る。

その間に2人は疑問を隠せない。

「劉備軍の力を見てみたいと思ってな。」

陽炎から出たその言葉は紡を納得させたが一刀には少しひっかかるものがあった。

（陽炎さんって劉備のこと知ってたっけ？）

初めて会ったときに思わず『劉備』と口走ってしまったがそれ以来は全く言っていない。

しかも劉備はこの時点で諸侯にはそこまで名が知られていないのだ。聞こえは悪いが今は華北の田舎者と言っても過言ではない劉備のことを何故そこまで気にするのかは一刀には理解出来なかった。

「それについては私も賛成です。朱里ちゃん・・・諸葛亮が使える君主ですから暗愚とは程遠い存在だと思いますし。」

「俺も、興味あるかな。」

3人はそんな会話をしながら割り当てられた天幕に帰っていった。

反董卓連合、それは無双ゲームのような綺麗なものではなく、これから始まるバトルロワイヤルに向けて腹を探り合う諸侯達の集まりであった。

WindowsXPの標準辞書じゃ」「しすいかん」「って正しく書けねー！」（後書

これから更新遅くなるかもです。

あと紀霊好きの皆さんにはごめんなさい。

今回彼は悪役です。

華雄 出陣（前書き）

前話からここまで間が開いてしまつて申し訳ありませんでした。

この度新しいpcを買ったので今回からはちゃんと更新できます。

華雄 出陣

朱然軍・天幕内

「主様、お茶がはいりました。」

「ありがとな、紡。」

「紡ちゃん、俺もいいかい？」

「ハイ！真羅様はどうですか？」

「うむ、もらおう。」

反董卓連合の駐屯地内でここだけピクニック気分だった。

兵士は流石に適度な緊張感を保ってはいるが軍の首脳部がこのありさまだった。

そんな中、天幕内に1人の兵士が入ってくる。

「失礼します、曹操様がお見えになりました。」

曹操

その単語に陽炎以外の全員が反応する。

「そうか、通してくれ。」

しばらくすると夏侯惇と夏侯淵に加え、背の低いネコミミフードの少女を従えた曹操が入ってきた。

「久しぶりね・・・アナタの所は観光気分のようなね・・・」

天幕内の空気を感じて呆れる曹操。

「無駄に硬調するより気軽にいったほうが平時の力を引き出せるものさ。」

「ふうん・・・しかし相手は董卓軍きつての武将2人よ？先陣として、そのころはどう思うの？」

曹操が探りの目を向ける。

ネコミミフードも同じように陽炎を見定めていた。

ここで一刀は気付く。

夏侯惇の様子がおかしい。

まだ会ったのは2度目とはいえ前回と様子が違いすぎるのだ。それを確信付けるのは隣にいる夏侯淵の様子。

自らの姉を心配するように夏侯惇を見ている。

夏侯惇は陽炎をずっと見ていた。

睨み付けているのではなく見つめている。

前の時は敵意しか無かったが今の夏侯惇の視線はどこか違っていた。

疑問と、どこかもの言いたげな気持ちがこちらにも伝わってくる。そういった視線だった。

「今回は俺たちの出る幕は無いよ。」

そんな視線を知ってか知らずか曹操の問いに答える陽炎。

「どういうこと？」

「今回は劉備軍に全部持ってかれるって。な、紡ちゃん？」

「はひっ!？」

いきなり話を振られて妙な裏声をあげる紡。

曹操にも「アナタはどうなの？」的な視線を送られしげしげ自分の考えを述べ始めた。

「こ、今回劉備軍はおそらく華雄の独断専行を狙っていると思われます。」

「独断専行・・・華雄をおびき出すということ？」

曹操はおおまかな作戦が解ったようで期待しながら続きを促す。

「ハイ、おそらく華雄を罵り怒らせて出陣させたあと深いところへ誘い込み包囲、殲滅するつもりなのでしょう。」

その言葉に曹操とネコミミフードは納得したように頷いた。

「なるほどね、でも張遼はどうするの？泗水関は華雄1人じゃないのよ？」

「それに関しては大丈夫でしょう。華雄が出撃すれば無論泗水関の防備が薄くなります。そうなれば張遼は分が悪いと見て虎牢関に退却するはずです。」

この小さな軍師は一体どれほどの頭脳を持っているのか。

一刀は彼女が徐庶であることを差し引いてもとてつもない天才だということに改めて認識したのだった。

曹操たちも驚かされたようで感心していた。

「・・・凄いわね。アナタ徐庶、だったかしら？私のところに来ない？」

早速人材マニアの本領を発揮していた。

「ほう、も、申し訳ありませんが辞退させていただきます。」

「あら、どうして？」

「私は主様・・・北郷様についていくと決めたのです。二君には仕えられません。」

紡はハッキリと言い放つ。

（・・・紡）

そんな彼女に一刀は胸を熱くさせられた。

「そう・・・残念だけどいいわ。その内アナ達全員を私の前に膝をつかせてあげるからそれを楽しみにしておくわ。」

曹操はよほど楽しみ、というように一刀達全員を見回す。

すると曹操は何か気付いたかのようにネコミミフードを見た。

「そうだったわ、新しく軍師を迎え入れたのよ。」

そう言つてネコミミフードを前に出す。

「桂花、自己紹介をしなさい。」

「・・・なんでこんな男達なんかに・・・」

「オイ！男は俺と一刀しかいねえだろうが！」

陽炎が間髪いれずに突っ込む。

「何言つてるのよ！男が私の名前を聞けること自体光栄に思いなさいよー！」

官職を飛び越えて性別の格差で来た！

「とりあえず自己紹介なさいな・・・」

「チツ・・・解りました。」

しゅしゅと頷いた。

「荀？よ。字は文若・・・終わり！」

なんとも端的な自己紹介だった。

「・・・まあいいわ。それじゃあもう出陣近いからまたね。」

そう言い残して曹操は天幕から出て行った。

しかし夏侯惇だけが中に残り陽炎に歩み寄った。

「なあ、朱然・・・お前、以前私に会ったか？」

いきなり尋ねられて少し驚く陽炎。

「口説き文句にしちゃド下手の領域だな、それに俺達は陳留の近くで会ったばかりだろう？」

そう言われて口を噤む夏侯惇。

まだ何か言いたげだったが陽炎に「行かなくていいのか？」と言われしゅしゅと出て行った。

「ご主人様、あの者・・・」

真羅が心配そうに陽炎に尋ねる。

「まさかな・・・俺と夏侯惇は会つのは2回目。これでいいはずだ・・・」

何か心当たりが無いでもない陽炎であった。

曹操が出て行ってから約1時間後、またピクニック状態になった天幕内にまた兵士が入ってきた。

「朱然様、劉備様が会いたい、と言っていますが。」

この単語に反応したのは一刀だけだった。

「劉備か・・・同じ先陣だし、会っておくに越したことはないな。」

「では、お連れします。」

すると兵が出て行った2分後くらいに劉備、関羽、諸葛亮に加え新たにロリ2人ほどが天幕に入ってきた。

諸葛亮達を見て紡はすごく嬉しそうにしていた。

（ええい！蜀のロリ率は化け物か！？）

ついでに一刀はびっくりしてた。

「同じ先陣でしたよね！さっきも言いましたが私は劉備、字は玄德です。」

「我が名は関羽、字は雲長だ。以後お見知りおきを。」

「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ！」

「諸葛亮、字は孔明です。」

「ほ、鳳統でし、字は子元でしゅ、あう……噛んじゃった……」

（なにこれかわいい!!）

ロリのうち1名に惹かれつつある一刀だった。

「ああ、俺は朱然、字は義封。よろしくな。」

「わ、私は朱桓、字は休穆だ……」

真羅はどこかやりにくそうにしていたが誰も気づかず話は進む。

「徐庶元直です。よろしくお願いします。」

徐庶の名前を聞いた瞬間劉備の顔がパアツと明るくなる。

「あなたが元直ちゃんなんだ！朱里ちゃん達から聞いてるよ、よろしくー！」

「は、ハイ、こちらこそ。」

「で、こちらの男が……」

陽炎が一刀を指差す。

「俺は北郷一刀、字とかは無いんだ。よろしく。」

北郷一刀と聞いて孔明と鳳統がヒソヒソと話している。

『あれが天の御使いの・・・光り輝く衣っていうのは本当だったね。』

『うん・・・本物みたいだし紡ちゃんが使えるのも納得できるね・・・』

「お兄ちゃんが天の御使いなのかー？なんだか弱そうなのだ。」

張飛が痛い一言をくれる。

「こら鈴々！御使い様になんたるご無礼を・・・！」

関羽が叱りに入り、劉備は苦笑い。

「アハハ、一応『天の御使い』って名乗ってるけど武の方はまだまだだよ。」

一刀も苦笑しながら応える。

「やっぱり弱かったのだ！」

「鈴々！！」

ついに関羽の怒りは昇りつつあった。

「目下修行中ってやつだ。一応孫策と闘り合って生き残ってるからな。」

陽炎が口を挟む。

その言葉に関羽と張飛はふむと考え込んだ。

「孫策といえは江東の麒麟児として有名・・・やはり御使い様はお強いんですね！」

「あのお姉ちゃんすごく強そうだったのだ、ってことはやっぱりお兄ちゃんは強いのかー？」

「いやいやいや、アレは陽炎さん・・・朱然さんが来てくれないと殺されてたし・・・」

確かに孫策と闘って生き残りはしたが体中切り刻まれ後一步のところでギリギリ陽炎が助けてくれたのだ。
助けてもらわなければ今頃一刀はここには居なかっただろう。

「じゃあやつぱり弱いのかー。」

なにやらすごくガツカリしている張飛。手合わせでもしようと思っていたのか。

「ところで朱然さん。」

孔明が不意に口を開く。

「ん？なんだい孔明ちゃん。」

「泗水関攻めですが・・・そちらはどう考えていますか？」

やっぱりきたか・・・

一刀はそういった気持ちだった。が陽炎は予想通りといった感じ。でさっきの考えを伝えた。

「・・・なるほど、やはりそう来ましたか。しかしいいんですか？ 私たちが手柄を持って行って・・・」

「別に俺たちは構わないさ、紡ちゃんも孔明ちゃんならこうするだろうって言うてたしな。」

「朱里ちゃん・・・やっぱり考えることは同じだね。」

紡が懐かしむように言う。

孔明のほうも嬉しそうに微笑み返していた。

「やっぱり紡ちゃんは変わらないね・・・学院にいた時と同じ、頭がいいよ。」

鳳統も懐かしむように言っていた。

「・・・で、問題は誰が華雄を挑発するかだ。」

「その辺についてはこちらにも考えがあります。」

一刀は劉備達を見て思った。

劉備は三国志演技では人徳が服を着て歩いてるような人だった。がこっちの世界でもなかなかにしたたかそうだった。

張飛は演技と性格が似通っており、自由奔放な感じがまったくもって『張飛らしい』という感じだった。

関羽は・・・なんか委員長にしか見えない・・・orz
どこことなく真羅に似てるような感じがして少しだけ好感が持てた。

「・・・関羽か・・・」

ちよつと呟いてしまう。

「流石です!」「えっ!?!」

「複数武将がいるなかで一番適任の愛紗さんを選ぶその眼力・・・
流石は天の御使いです!」

「・・・すごいでし・・・」

いつのまにか尊敬されていた。

「ま、まあね・・・」

ただ呟いただけですとは言えず一刀はただ曖昧に返すしかなかった。

「というわけで愛紗さん、挑発役お願いします。」

「うむ!任せておけ、この関雲長、しっかりと華雄を討ち果たして
見せよう!」

関羽が意気込む。

なかなか頼りになる姿だった。

そんな中真羅だけが顔を赤くして俯いていた。

「どうした？顔が赤いぞ？」

一刀が心配して話しかけるも真羅は俯いたままで何も言わなかった。

「それじゃあもうすぐ出陣だから行きますね！」

劉備が挨拶して劉備軍の皆さんが出て行く。

「武運を祈ってるよ、劉備さん。」

「ハイ！お互い頑張りましょう！！」

そう言い残して劉備も出て行った。

真羅も彼女らが出て行ったのを確認して部隊の指揮に出て行った。

「さて、2人とも。俺たちも出陣準備しようや。」

陽炎がそう言って立ち上がる。

「特に一刀、お前に頼みがある。」

「俺に？」

「紡ちゃんはお外してくれませんか？」

「ハイ・・・（まさか陽炎様は主様と二人きりになりたくて・・・

まさかここで！？は、はう／＼」

紡の2人への視線は熱かったが素直に軍の編成に向かった。

2人になった天幕内が沈黙に支配される。

「さて一刀、今回の華雄との戦い、どう見る？」

あんまり質問の意味は解らなかったがありのままを答えることにする。

「多分作戦通りに包囲・殲滅して終了だと思っけど・・・」

「ああ・・・確かに劉備軍にかかれば華雄は討たれるな。」

「それが何か？」

いまいち陽炎の意図が読めなかった。

「そこで頼みがある。」

陽炎の顔がニヤリと歪んだ。

泗水関

「なあ、華雄、ホンマに出るんか？」

紫色の髪をした羽織の女性がもう1人の銀髪の女性に問いかける。

「何を言っている張遼、今ここで出撃し敵の出鼻を挫くのだ！」

華雄は血氣盛んに言い放つ。

「アカン、アカンで華雄。この状況で出撃しても包囲されて殺られるのがオチや！」

張遼は止めようとするも華雄は一笑にふし出撃の準備を始める。

「あのアホンダラ！今出ても多勢に無勢ってことは目に見えてるやんか！」

「張遼様、どうしますか？」

「・・・華雄が出てもうたら泗水関には兵がそんなに残らへん、虎牢関への退却準備しとき。」

「ハッ！」

張遼は独り泗水関の上で連合軍を眺めながら思った。

（下手したらこの戦負けるかも知れへんな・・・もしもん時のために月を・・・いや、詠もおるし最悪の事態にはならへんとは思っけど・・・）

色々な牙門気が風にたなびく連合軍は張遼にとってまさに死神の軍だった。

（もしかして『アイツ』の言ってた「注意しろ」ってのはこの事を

言うてたんか？)

張遼の脳裏に浮かんだのは洛陽出発前に自分に忠告したある人物だった。

泗水関前

「では愛紗さん、お願いします。」

孔明が関羽に作戦実行を命じる。

「ああ、うまくやってみせよう。」

関羽はそう言ってただ一騎で泗水関の前に出た。

「我が名は関雲長！劉備軍の矛なり！！」

泗水関

「なんや？アイツ・・・」

泗水関の上から張遼は関羽を見やる。

「どうした？」

そこに華雄がやってきた。

「ああ、あそこで関羽とかいうんが名乗ってるんやけど・・・」

「華雄――！！私と勝負しろ――！！」

関羽のその言葉が聞こえた瞬間、華雄はピクツと反応し、出撃しようとする。

「アカン！アレは罠や！！華雄、乗ったらアカンで！」

「ぬう、しかし張遼、一騎打ちを断るのは武人の名折れだ！」

そうこうしている内に関羽は挑発をしてくる。

「どうした！？私の青龍偃月刀を見て恐れをなしたか？猛将にして良将というのは嘘か！？」

華雄の怒りは怒髪天をつきそうだった。

「クツ！言わせておけば・・・！」

「落ち着け！言わせたいやつには言わせておけばええんや！」

張遼が必死に華雄を押さえ込んでいるが時間の問題に見えた。

泗水関前

数々の罵声を浴びせたが肝心の華雄はまだ出てこない。

「ぬう、ここまで粘るか・・・さてどうしようか・・・」

関羽もこれ以上は悪口が思いつかなかった。

「すませーん、関羽さーん。」

不意に後ろから声が聞こえてきた。

「何だ・・・って御使いさま!？」

関羽に会いにきたのは2つのベルトに計16本の剣を装備した一刀だった。

（くそう・・・なんで俺がこんなことを・・・）

一刀はいやな顔を隠しながら関羽に言う。

「華雄が出てこないんで?」

「ハイ、色々やってはいるのですが・・・」

関羽は申し訳なさそうに言う。

それを見て一刀は小声でアドバイスをした。

「華雄を出したいならこう言っただ・・・」

「ハイ?」

泗水関

関羽の罵声が止みやつと終わるかと思ひ張遼は息をついた。

「ふう……なんとかあったのかいな……」

華雄も切れる一歩手前で堪えている。

今はもう大丈夫だろうと油断した瞬間だった。

「華雄のひーんにゅーうー……!!!!」

爆弾が聞こえてきた。

ひーにゅーう！
-んにゅーう！
にゅーう！
うー！
うー！

ブチイッ！

いやな音が華雄から聞こえてくる。

•

「か、華雄？」

彼女は何も言わない。

しかし無言で得物、金剛爆斧を手に使っていた。

「うおおおおおおおおお！……！……！……！……！待っている関羽ウウウ
ウ！……！殺してやるぞおおおおお！……！……！……！……！」

『神速』の異名を持つ張遼でさえキレた華雄のスピードは追いきれ
なかった。

華雄 出陣（後書き）

かゆ・・・うま・・・

ちなみに朱然軍の兵数2万というのは元々の1万5千に劉表から1万もらって2万5千。

それで5千を新野においてきたので2万となっています。

劉備軍は5千です。

ミッションスタート！（前書き）

色々メッセージをくれる方々ありがとうございます。

ミッションスタート！

泗水関前

なんとか華雄の挑発には成功した。

後は陽炎からの指示をまっとうするだけだ。

「大丈夫なのかなあ・・・」

一刀が陽炎に言われた指示は2つ

1つは関羽への助言。
これは既に成功した。

問題は次なのだ。

「来ましたよ！御使い様は下がっててください！」

関羽が一刀の身を案じて下がれと言って来るが一刀は首を横に振る。

「俺はちよつとやることがあるから。大丈夫、劉備軍の邪魔はしないさ。」

関羽はそれでも不服そうだったが一刀は構わずその場から離れていった。

「御使い様！1人では危ないですよ！」

関羽は止めようとするも前から華雄の軍勢が突撃してくる。

「関將軍！早く退かねば被害が出ます！」

兵士の言葉に関羽はしぶしぶながらも撤退を開始した。

（御使い様・・・ご無事で・・・）

そうして関羽は思う。

何故そこまで自分はその男を心配しているのだろうか？

「華雄が出てきたわね・・・」

「華琳様、いかがなさいますか？」

戦場を遠めに見ながら曹操は荀？と策を練っていた。

「朱然達も言っていたでしょう？ここは劉備軍のお手並みを拝見させてもらっわ。」

「では、私達は此度の戦いは動かない、ということ・・・華雄が討たれたら泗水関に向かうおつもりですか？」

荀？の言葉に曹操は愉快そうに笑う。

「フフフ・・・桂花、賢い子は好きよ・・・」

「アアッ！華琳様、こんなところで・・・皆が見てます・・・」

今2人は軍の中心で馬に乗っているので兵士達から丸見えだった。

「フフッ、今ここでしてあげてもよいのだけれど・・・私の桂花が鳴く姿を見るのは私1人でいいわ・・・続きは聞でね・・・」

「ハ、ハイッ!!」

曹操軍の兵士達はもう見慣れたものなので慣れた様子だった。

華雄率いる軍勢の猛攻を捌きながら関羽は思案していた。

（このまま私だけ反転して華雄を討つべきか・・・それともこのまま部隊を率いるべきか・・・）

どちらにもメリットとデメリットはある。

主のためにも手柄を立てたいが今ここで単身突っ込んだら部隊は誰が率いるのか。

今自分の隊は千人しかいないので隊で応戦という選択肢は最初から存在しない。

なによりそれでは何のための挑発なのか解らない。

副将の育成を怠っていたツケがここに来てきたのだった。

「愛紗!!」

不意に前方から声が聞こえてくる。

見ると白い服に二又の赤い槍を持った女性だった。

「星か！ありがたい！！」

これでもし自分が華雄に向かってても部隊は上手く後退出来る。

「うむ、軍師殿からお主が1人で逸らないようにと制止をな。」

「朱里か・・・言ってくれる。」

相変わらず凄い奴だと関羽は舌を巻いた。

「それと華雄隊が近づいてきたら鈴々隊が弓の一斉射をするらしい。速く退かねば我らも巻き添えを食うぞ。」

それならば速く行かなくてはならない。

そこで関羽はふと気づいた。

あの『天の御使い』は華雄隊に突っ込まなかったか？

「まずい！御使い様が・・・！」

「御使い？・・・ああ、あやつか・・・」

どうやら認識があるようだった。

「会ったことがあるのか？」

「ああ、一応真名を預けた仲ではある。」

ムカツ

「これは驚いたな・・・そんな仲だったのか・・・？」

関羽は言いながら一瞬自分の中に湧き出た感情に戸惑った。
何故星が一刀に真名を預ける仲だっただけで今の負の感情が出てくるのか。

関羽には解らなかった。

「・・・無駄話は後だな愛紗、鈴々が動いたぞ！」

「ああ、確認した。まさかもう撃つつもりか？間に合わんぞ！？」

「いや、速度を上げればドンピシャだ。皆の者！速度を上げるぞ！」

兵士達から「オオッ！」と返事が返ってくる。

どうやら問題は無いようだった。

「よし、このまま桃花様の場所まで駆け抜けるぞ！！」

こうして速度を上げた関羽隊は劉備の居る場所まで駆けていった。

「よし、皆ー！いつせーのせで撃つのだー！・・・いつ、せー、のー、っせー！！」

張飛の掛け声で隊の人間全員が一気に弓を引く。

約2千人が一斉に放つ矢はさながら雨の如く華雄の軍に降り注いでいった。

関羽隊に当たった様子は無い。

「よし！もう一度斉射したら愛紗達を迎えに行くのだー！」

張飛には夢にも思わなかった。

いや、陽炎以外このことは知らないどころか想像すらしないであろう。

矢の雨が降り注いだ地点に、皆が『天の御使い』と呼ぶ青年が居たことを。

数分前

「ふう、何とかやり過ごしたな・・・」

一刀は華雄隊が出撃した後ずっと1人で後をつけていた。

師錬靴をフル活用して襲い来る兵士達の間をアイシールドよろしく潜って行ったのだ。

そして今はピッタリと付いている。

「後は華雄隊が劉備軍に当たってくれば・・・って、ん？」

なにやら空に粒々が見える。

「あれって・・・」

キラキラしているということは太陽光を反射しているということ。
それが金属ということが解る。

それはつまり

「矢か!？」

しかも華雄隊を満遍なく狙った斉射だ。

それは勿論一刀のいる後ろの方も例外では無かった。

「これってこのままじゃ危ねえじゃねえか!」

急いで師錬靴を使い離脱しようとする。

しかし矢に気付いた華雄隊の一部が怖気づき反転してきた。

そして気付かれてしまったのだ。

「何だアイツは!？」「敵か!？」「やっちまえ!！」

なんとも単純な頭をした兵士達が一刀に襲い掛かってくる。

「クソッ!今はそれどころじゃねえだろ!！」

剣を2本抜いて二刀流の構えをとる。

いかに華雄の兵隊といえども武に関しては左慈の足元にも及ばなかった。

斬りかかってきた兵士の剣を受け流しながら剣道でいう「胴」のように斬り抜ける。

受けた兵士は脇腹を切り裂かれドサリと倒れた。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ・・・」

斬った感触が生々しく手に残る。

人を斬ったのは初めてだった。

「俺・・・人を・・・」

色々と自問自答したい気分ではあったが状況が感傷に浸るのを許さない。

仲間が斬られたことに怒った兵士達が一斉に一刀に襲い掛かる。

しかしその内の1人が急に倒れる。

その男は肩を矢に貫かれていた。

「もう矢が!？」

一刀は頭上を見上げる。

すると目の前には物言わぬ矢達が無差別に命を奪うべく殺到する光景が広がっていた。

「クツ・・・あの方は無事なのか!？」

劉備のところに戻った関羽は居ても立ってもいられず単騎で飛び出し華雄隊に突撃していった。

既に矢での攻撃は終わっており敵の数は半分以下になっている。

青龍偃月刀を馬上で振るうその姿はまるで無人の野を行くようだった。

「ん？アレは・・・」

死体や武器が散乱する戦場の中で『ソレ』はよく目立った。一応よく見ていたので覚えている。

地面に突き刺さった1本の剣。

ソレはさっき一刀が装備していた長剣の内の1本だった。

「やはりあの方はここに・・・」

だとしたら一刀もただでは済んでいないだろう。下手をしたら死・・・

「クッ！」

焦る焦る焦る。

何処にいるのか、生きているのか、敵と戦っているのか。

さっき会ったばかりの男のことを何故ここまで心配しているのか、
自分自身も解らない。

だがあの男は死なせてはならない。

この思いだけは本当であった。

ミッションスタート！（後書き）

夏休みややエンジョイ中です。

感想・評価をくれると嬉しいです。

急襲（前書き）

マジ恋面白いわーw

Sはいつでるのだろうか・・・

急襲

死ぬかと思った。

あの状況で生き延びた自分を賞賛したい気持ちに駆られるがそうもいかない。

矢の雨が降り注ぐ瞬間、一刀は【操】を駆使し長剣6本を風車のように高速で回し無数に襲い掛かる矢を防いでみせたのだった。

途中操作を誤って1本どこかへ飛んでしまったがその頃には斉射も納まっており一刀はなんとかその場から離脱したのだった。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ・・・！」

予想外の【操】に体が付いていつていない。

「妖術も・・・万能じゃないな・・・」

少し鼻血が出てきた。

どうもノーリスクでポンポンできるほど世の中甘くないらしい。

心なしか体がふらつく。

華雄の隊はどうやらどこかの軍と交戦中のようにだった。

「早く・・・行かないとな・・・」

少し自由になった足と師錬靴を使って華雄隊のところへ向かう。

長剣が1本足りないのに気付かないまま。

「ええい！まだ押し返せないのか！？」

華雄が周りの兵士達に叫ぶ。

「先ほどの攻撃で我らの隊は半数を失っています！敵も勢いづいて
いますし・・・このままでは・・・！」

舌打ちしか出来ることは無かった。

確かに相手・・・劉備軍の力は侮ってかかるような相手ではなかった。

「ここまで来て退けぬ！せめて大将首だけでも・・・！」

華雄が突貫しようとしたその時、不意に声が聞こえてきた。

「うりやりやりやりやー！！」

自分の兵士がまるで竜巻にあつたかのように次々と吹っ飛んでいく。
そしてその竜巻の真ん中にいたのは、まだ年端も行かないように見える少女だった。

「あれがこの軍の大將か！」

華雄は奮ってその少女に走っていく。

「お前が華雄なのかー？」

少女は華雄の姿を確認するなり聞いてきた。

「いかにも！猛将にして良将とは私のことよー！」

「鈴々は張飛翼徳なのだ！悪いけどやられてもらうのだー！」

張飛は言うやいなや華雄に飛び掛る。

（なっ！迅い！？）

華雄はギリギリその蛇矛を弾き反撃をする。

「うにゃ！？なかなかやるのだ！」

楽しそうに一騎打ちを繰り広げるその声は、華雄にとって不愉快極まりないものだった。

張飛が撃っては華雄が受け止めずかさず反撃。

いつまでも続くと思われたその繰り返しは華雄に疲労の色が見えたところで打ち切りとなった。

「どうしたのだ！防いでばっかじゃ勝てないのだー！」

張飛は無限かと思われる程のスタミナで華雄を追いつめていく。

対して華雄は隊が負けそうなのと、自分が負けそうという2重の悩みでどんどん疲れていった。

先ほどから防戦一方でなかなか反撃の糸口が見えない。

「クッ・・・！このままでは・・・」

負ける

そんなことは解っていた。

しかし、華雄の武人としてのプライドがそれを許さない。

「うおおおお！私は負けん！！」

金剛爆斧を振り回し張飛の攻撃を防ぎきり一旦距離を置いた。

「結構粘ったほうだけど、次で終わりなのだ！」

確かに、これ以上張飛の攻撃を受けきる自信が無かった。

しかし、負けるわけにはいかない。

どうにかしなければと思っていたところに張飛の死刑宣告のような声が響く。

「じゃあ、終わりにするのだー！！」

蛇矛が目の前まで迫っている。

「！？しまった・・・！！」

迂闊だった。

目の前の少女の力をなめていた。

同時に自分の力を過信していたことも思い知る。

しかしもうそんなことはどうでもいいという風に、華雄は己を貫こうとする蛇矛を甘んじて受けようとしていた。

しかし、次の瞬間華雄は信じられないものを見る。

5本の剣がまるで生きているかのように2人の間に飛び込み、張飛を牽制しているのだ。

かなり驚くべきことだが張飛も華雄以上に驚いていた。

なにせ宙に浮かぶ剣が自分に襲い掛かってくるのだ。
恐ろしいことだろう。

華雄と張飛が離れきった頃に剣はどこかに飛び去っていく。

2人がその方向を見ると、そこには1人の青年が立っていた。

「ふう、間に合った。」

青年の着ている服は、日光を反射しまるで光り輝いているかのようだった。

「お兄ちゃん!？」

知り合いのようで、張飛は驚いていた。

「どうしてこんなところにいるのだー？」

どうして剣を飛ばしてきたのかと言わない辺り張飛の人をあまり疑わないという感じを覗かせた。

「ちょっと野暮用でね、こんなところにまで物見遊山さ。」

華雄も気になり彼に話しかける。

「貴様は・・・何者だ？」

「名を名乗るなら自分からだろう？」

正論を言われた華雄は不機嫌ながらも素直に答える。

「我が名は華雄!貴様は？」

「俺は北郷一刀、字とかは無いから好きに呼んでいいよ。」

流石に自己紹介にも慣れてきたようで一刀は真っ直ぐ華雄と向かい合った。

「なるほど、最近は猫も杓子も噂していた『天の御使い』とやらが
お前か・・・」

「まあ、そう名乗ってるね。」

なんか「君がああ天の御使いかー」的な反応しか聞けなくてちょっと食傷気味だった。

「聞かせる、何故助けた。天の御使いは連合軍の朱然軍所属のはずだ、何故敵を・・・」

「その辺がちよつとした野暮用なのさ、華雄・・・アンタを連れて行く。」

一刀に託された2つ目のミッション・・・それは華雄の身柄の確保だった。

何故陽炎がこんなことを言ってきたのかは解らなかったがとりあえずひどいことはしないと書いていたので引き受けたが、問題はその方法だった。

華雄の自慢は武、それだけでどうやって連れてくればいいのかは明白だった。

だからあえてすぐ近づくずに張飛と戦って疲れたところを狙ったのだが、なんとなく勝てる気がしなかった。

「私を・・・なんのつもりだ？」

張飛の目もある。

心配しなくてもいいかもしれないが下手にこの状況を言われて反逆したと思われたくも無い。

だから一刀は必死に口説き文句を考えた。

「このままじゃあそつちも負ける。だから隊の皆ごと俺達・・・連合軍じゃなくて朱然軍に来て欲しいんだ。」

あえて連合軍ではなく自分達の名義を使う。

さりげなくこういうところにアピールポイントを混ぜる辺りなかなかに策士だった。

「何を言っている！私は生きている限り董卓様を裏切るような真似はせん！降服が目的なら諦めろ。」

華雄は断固としてこちらに降るのを拒んでいる。

そこで一刀は言葉を変えた。

「別に董卓を裏切るわけじゃないぞ？」

「何？」

「この戦い、俺はこう見てる。」

反董卓連合自体政争の一環だということ、機会があれば董卓も助けるということ、自分達は本来攻撃の意思がないことなど色々と手を尽くして言いくるめた。

「なるほど・・・貴様らは董卓様に味方してくれるのか・・・」

「ああ、そういうことだ（まあ董卓なんざ助けねえしバリバリ攻撃するけどなあ！）。」

かなり腹黒かった。

「よかるう、降服してやる。だがもし董卓様の身になにかあったら・
・・」

ギロリと威嚇してくる。

「解ってる。だが一応格好が要るからな、俺にやられた振りしてくれ。」

すごく不満げだったが董卓の名前をだしたら素直に従ってくれた。

しばらくして、一刀が華雄の首筋にピタリと剣を突きつける。

その瞬間連合軍から歓声が上がったのだった。

泗水関城門前

「華琳様、泗水関の制圧、完了しました。」

「ご苦労様、秋蘭、張遼は？」

「華雄の隊が射られていた頃に虎牢関に撤退した模様です。」

「流石ね、武一辺倒だと思っていたけど、なかなかにも頭もいいようね・・・あの人材、欲しいわね・・・」

「華琳様！また悪い癖が。」

夏侯惇が不満気に言い寄る。

「フッフ、そう妬かないの春蘭。・・・桂花、華雄は？」

「劉備軍の張飛という者が討ち取ったそうです。」

一刀は既に劉備軍に口裏を合わせるように伝えて悠々と自軍に戻っていた。

「そう、関羽じゃないのね・・・」

「華琳様？」

「関羽も欲しいのに・・・名を上げてくれないと・・・」

「かりんさまあゝ！」

夏侯惇がとうとうブーブー言い始めた。

それを制しながら曹操は考えていた。

（朱桓に関羽に張遼・・・そしてまだ見ぬ英傑達・・・フッフ、胸が躍るわ・・・！）

孫策軍天幕内

「・・・そう、華雄は劉備軍がねえ・・・」

孫策と周瑜が話していた。

「張飛という武将が討ち取ったそうだが、噂程度だな。」

「華雄の頸は？」

「解らん。劉備軍に運ばれたそうだが・・・おかしい話だ・・・」

「そうねえ、討ち取ったなら陣中に晒し首にでもすればいいものを・・・」

周瑜が策士の顔になる。

「おそらく華雄は死んではいないだろうな。」

「その根拠は？」

周瑜はひとつ間をおいて言葉を紡いだ。

「さっき言ったように頸をとったというなら見せればいいのに見せない、これはおかしい。それに噂というのもこれは『手段』と考えたほうが妥当だな。」

「手段？」

「ああ、・・・華雄を討ち取ったことにしたい人間・・・が仕掛けた手段だ。おそらくその人物は劉備軍の誰かか劉備軍と繋がりを持つ誰

かだな。」

「なるほどね、で、その人物様の特定はついてるんでしょう?」

「まあ劉備軍内部の人間ではないな。」

「そう?どうして?」

「私が劉備軍の軍師だったら、噂なんて手段は使わないさ。」

「なんでー?」

「劉備軍には優秀な軍師がいるらしい。世間で優秀と言われるほどの者が『噂』なんて即席な手段は使わないさ。よく似た別人を用意したりして絶対的な策を弄するだろう。」

「へえ・・・ウチの軍師様はそう考えるわけね。」

孫策は納得したように伸びをした。

「アナタはどう思うの?雪蓮。」

「んゝ私も華雄は連合のどこかの陣にいると思うな。私の勘だけど。」

孫策も同じ意見ということまで2人の話し合いは幕を降ろしたのだった。

劉備軍天幕内

「鈴々ちゃん、華雄を討ち取ったって言ってたけど・・・」

「嘘じゃないのだ！ちゃんと鈴々が倒したのだ！」

諸葛亮が張飛に問いかけるも当の本人は倒したとしか言わない。

その場にいた兵士達に聞いても口を揃えて「張飛將軍が華雄を討ち取った」としか答えが返ってこないのだ。

なのに肝心の華雄の頸が無い。

演技で司馬懿に稀代の天才と言わしめた諸葛亮孔明がそれを疑わな
いはずが無かった。

「朱里ちゃん、調べてみたけどやっぱり華雄は朱然軍の方に行った
らしいよ・・・」

孔明と肩を並べる劉備軍の軍師No.2の鳳統が報告に来た。

孔明は頷き、張飛にもうひとつ聞く。

「鈴々ちゃんが華雄を討ち取った時に周りに誰か他の軍の人はいた
？」

張飛は考える素振りすら見せずに即答した。

「お兄ちゃんがいたのだ！」

お兄ちゃん、先ほど朱然軍の天幕で北郷一刀に向かって張飛が言っていた言葉だ。

孔明はそれを忘れていなかった。

「本郷、一刀・・・」

不完全なものとはいえ見事連合のほとんどの勢力は彼の流した『噂』、
「劉備軍の張飛が華雄を討ち取った」という流言を信じている。

張飛隊の全員に仕込みを済ませた手腕も凄いがそれ以上に忠臣と名高い華雄をどうやって自陣に連れて行けたのか、孔明はある仮説を立てる。

朱然軍は董卓軍と通じているのかもしれない・・・

おそらく曹操軍と孫策軍は同じ結論に至っているはずだ。

なのにどちらも報告しないということは報告する必要がないのか報告する気がないのか。

おそらく後者だろうと孔明は予測する。

なんにしても次の虎牢関攻めで何かが明らかになることは確かだった。

急襲（後書き）

うーむ・・・

なんか頭いいような小説にしようと思ったけど・・・

自分でどうまとめようか悩む。

合流と虎牢関（前書き）

たまに道を大声で歌いながら歩いてる奴っているよね・・・

え？見たこと無い？・・・深夜とかにたまに出るんだよ

合流と虎牢関

泗水関は華雄が討ち取られた（と思われた）時に迅速に行動した曹操軍が制圧した。

突破後の連合軍は破竹の勢いで次々と戦に勝利する。

虎牢関に迫る前の戦いで董卓軍に奇襲する一軍があった。

その戦いはその奇襲が無ければ勝てなかったといえるほどに鮮やかな奇襲であった。

その軍の長は西涼の馬騰の代行で来た馬超と名乗った。

その後西涼軍と合流した連合軍はますます士気を上げ虎牢関前に迫るのだった。

しかし泗水関の戦い以来朱然軍と劉備軍はなかなか戦いに参加できなかった。

朱然軍はチヨイチヨイ手を出していたが劉備軍は華雄を討ち取ったと信じられているので中々手柄を立てさせてもらえなかったのだ。

これは華雄討伐という大きい手柄に嫉妬した袁紹と他の諸侯がわざと2軍を後方に回していたのだった。

よって虎牢関攻めでは

先陣・袁紹軍

右翼・曹操軍

左翼・袁術軍（孫策軍）

その後ろに朱然軍、劉備軍が控えており、そのさらに後ろに諸侯の軍が配置されることとなった。

連合軍陣地・朱然軍天幕

「……じゃあ今回の虎牢関攻めは俺らは攻撃できない訳ね……」

陽炎はため息をつきながら今回の条件を確認していた。

「面目無い……」

華雄を納得させる条件、『董卓軍に攻撃をしない』『董卓を救出する』は陽炎のあずかり知らないところだったのだ。

「董卓を助けることはともかく、攻撃しないってのは……どう思うよ紡ちゃん？」

陽炎は紡へ軍師としての言葉を待つ。

「それについては問題ないと思います。」

「ほう……その心は？」

「泗水関で私達は先陣となりました。おそらく劉備軍の手柄を目の当たりにした袁紹は自分が先陣を切ろうとするはずです。そうすれ

ば必然的に劉備軍と私達は後方へ下げられるはずですので華雄將軍の条件については気にすることはないでしょう・・・ですが。」

紡は一息ついて続ける。

「相手は飛將軍・呂布と神速・張遼です。突撃に関してはこちらの西涼軍も負けていませんが突撃を捌く力は袁紹軍は皆無ですしおそらくこっちにお鉢が回ってくるかと・・・」

「まあ配置しだいではそうなるだろうわな。」

紡の予測は大抵当たる。

一刀がこの数ヶ月彼女を見てきて学んだことのひとつでもあった。

「だが総大将が前面に出てるんだぜ？俺達まで届くことはねえと思うが。」

左慈が机の上にある地図を見ながら言った。

その地図の上には便宜上の例えとして木製の駒が各軍として置いてある。

「確かにこの中で袁紹軍は1番数で勝っていますからねえ・・・壁と考えたら分厚いですよ。」

宇吉も顎に指をつけて言う。

「ですがそれが壁ではなくて扉だったら？どんなに分厚くても袁紹軍がこちらにあの2人を回そうとしたらなんの問題なく私達が生贄になります。」

こういう話をしている時の紡は恐ろしいまでに冷静で舌が回る。

「しかし総大將はあくまで袁紹だろう？むしろ袁紹が囿になってくれる気がするのだが。」

真羅はあくまで反論する気だった。

「確かに呂布、張遼の2人も袁紹を狙うでしょうが、もし例えば袁紹が単身こちらに来たら？」

そんなばかな。

一刀は思案する。

（だがあの袁紹のことだ・・・自分の兵力をケチってこっちに来ることもありうる・・・）

「これについては完全とは言えませんがありえない話でもないでしょう・・・ねえ、主様？」

「何故ここで振る！？」

（くっそ〜さりげなく責任を押し付けるつもりか！？）

一刀が答えるかべきかで悩んでいると紡はすぐに言葉を続けた。

「このように主様も悩む程度ですから可能性としては五分五分です。」

「あれ？俺今馬鹿にされた？」

「いえいえ（苦笑）」

なんかはぐらかされた感じがするが陽炎が口を挟み言及は出来なかった。

「まあそう来るとしたら迎撃体勢をとつかないとな・・・よし！俺と宇吉はちよつと出かける。1週間くらいしたら帰ってくるから気にしないでいいぞ！」

「1週間って・・・敵は今にも出て来そうなんだよ！？2人がいないで誰が率いるんだよ！？」

一刀が食って掛かる。

「なあに、武においては左慈に真羅、知では紡ちゃんがいる。お前もいるんだし心配はいらないと思ってるぜ。」

陽炎はニヤリとしながら出て行くとする。

「でも行き先くらい教えてもらってもいいじゃないですか。」

「洛陽。」

「は？」

一刀と紡が凍りつく。

「いやいやいや、洛陽って董卓の根城やん！？」

たしかに今連合が堅牢といわれる虎牢関を突破してまでたどり着き

たいのは洛陽であり董卓がいる場所ではあるが。

「ちよいと視察というか下見というか・・・まあ虎牢関抜いたらお前らと合流できるかもな。」

ということは虎牢関を突破するまで陽炎と宇吉抜きで戦うこととなると言っているようなものだった。

「だから左慈と真羅は残すつつてんだろ？2人がいりゃ大丈夫だ。」

「まあ私はご主人様以外に負ける気はしないがな。」

「俺は呂布に勝てるかどうか解らねえがお前の補佐くらいはやつてやるよ。」

2人が頼もしそうに言うてくれる。

「主様、陽炎様なら無事に帰ってくると思いますし計算通りにいくなら2人がいなくても充分捌けます。」

紡もフォローを忘れない。

「という訳だから後はヨロシク！」

今度こそ風のように宇吉を連れて行ってしまった。

虎牢関

「霞・・・お帰り・・・」

「おお、恋！・・・すまん・・・華雄を止められへんかった。」

「うん・・・こつちでも噂になつてゐる。」

華雄が劉備軍の張飛に討ち取られたという噂は虎牢関にまで伝わっていた。

「もう連合の奴らがそこまで来とる！このままじゃ月守るところが自分達の身も守れへんで！」

張遼は若干焦り気味に捲くし立てた。

恋と言われた褐色で赤毛の少女は無言で頷き城門まで向かう。

「ちょ、ちよつと恋殿！何処に行かれるおつもりです！？」

学生帽のようなものを被ったどう見ても幼女です本当にありがとうございましたな子がトテトテと近寄っていく。

「イカが言つてた・・・月は任せて皆は自分の身を優先しろつて・・・」

「アイツの言い分も大事やけど・・・いくら飛將軍と言われた呂布でも单身突っ込むのは自殺行為やで！？」

呂布は大丈夫と言いながら自分の得物、方天画戟を手にする。

「皆もいる・・・だから大丈夫・・・」

後ろを見ると呂布隊の面々が付いてきていた。

「ハア・・・まあ恋なら大丈夫か・・・様子見てウチも出るわ。」

「うん、行つて来る・・・」

まるでちよつと散歩にでも行つて来るという風に呂布は城門を開け出撃した。

虎牢関前

いきなりの呂布隊の突撃に連合軍は慌てふためいていた。

「なんですの！？私の華麗なお昼ねを邪魔したのは！！」

袁紹は口元に涎をたらしながら配下の顔良と文醜に怒鳴りつける。

「姫ゝそんな場合じゃありませんよゝ！」

文醜が泣き付く。

「今深紅の呂旗を掲げた軍隊がこちらに突撃してきてるんですよゝ！」

「ありや呂布の軍ですよ！危ういっすよ！-！」

袁紹は頷いて2人に言った。

「慌てることはありませんわ・・・」

「おお！何かいい策があるんですね？」

「ウフフ、当たり前ですわ。」

袁紹が高らかに言い放った。

「雄雄しく！華麗に！迎撃なさい！！」

「・・・・・・」

2人は諦めるようにうなだれるだけだった。

「と、言うのは1つ目のことでもう1つ考えがありますわ。」

「ええ！？麗羽様がまともな策を！？」

「昨日妙な男がやってきましてね・・・私に天啓を授けて下さったのですわ！！」

「妙な男？そんな奴がいたんですかー」

「私はしばらくここを離れます。斗詩さん！護衛をしなさい！」

「え？ハ、ハイ！！」

袁紹はそう言って天幕を出て何処かに言ってしまった。

独り残された文醜は首を傾げる。

「姫は何処に行くつもりなんだろう・・・って、呂布をどうにかしなきゃヤバイな!!」

とりあえず文醜は悲鳴と人間が空を飛び交う戦場へと向かうのだった。

朱然軍陣営

「主様！呂布が袁術軍に突撃しました!!」

一刀は既に剣と師錬靴を装備していた。

「ああ、確認した!・・・ヤバイな・・・本当にこっちに来たら・・・」

「今のところは袁紹を探して引つ掻き回しているらしいですがいつか袁紹は探し当てられて討たれてしまいますよ。」

紡と2人でなんとか作戦を練っていると左慈がやってきた。

「北郷！戦うことになるかもしれないからコイツを渡しとく。」

左慈が渡してきたのは、黒い手袋。

「師錬靴と同じ素材だが布のように柔らかい物だ。これなら腕力も

上がるだろ。」

見ると左慈も装備しているようでゆったりとした導師服の裾から見える手足は黒い手袋と靴で統一されていた。

「ありがとう、左慈・・・」

一刀の感謝の眼差しを受けきれず左慈は目をそらした。

「勘違いすんじゃない、あまつたからお前にでも下げてやろうと思っただけだ。」

「うん、いいヤツだ！」

左慈のツンは効かなかった。

そして紡の熱い視線には絶対に応えまいというのが一刀と左慈の意見の一致した部分だった。

「そっぴや真羅は？」

「解らん、とりあえず今軍に臨戦態勢を取ってくれてるのはアイツだから何処かに行っているという事は無いだろう。」

「真羅さんにはさっき私が偃月陣をしくように言っておきましたのでそのために動いてると思います。」

紡は私も指揮があるのでと言って行ってしまった。

「まあそうそこに呂布が直接来るなんてことはねえだろ。俺達

も隊の指揮に・・・」

「ごきげんよう！」

謎の声が飛んでくる。

「ここが朱然軍の陣？オンボロすぎて私がいるにはダメダメじゃありませんこと？」

「れ、麗羽様、失礼ですよ！」

一刀と左慈は固まった。

紡が言っていた完全ではない予想。

これが今現実として光臨してしまったのだ。

「な、何でいるんだよおおおおおーーーー！！！！！！！！」

2人はこれから来るであろう呂布という嵐を想像して頭を抱えた。

合流と虎牢関（後書き）

G線上の魔王、本当に面白いです。
皆さんもやってみては？

飛將軍、舞って（前書き）

押さえ込めない愛で斬っちゃうぞ！

飛將軍、舞って

「今からほんのちょっとお世話になります、袁本初ですわ！苦しゅうなくてよ？」

一刀や左慈もまさか本当に来るとは思わなかった。

袁紹がいる＝呂布がこっちにくるという等式が成り立ってしまうのだ。

「あ、主様！呂布の隊がこっちに……って袁紹さん！？はうゝ！これはまずいのですゝ！」

早速呂布が嗅ぎ付けてきたようだった。

「だが北郷、こんなに早く呂布がこっちに気付くのはおかしくないか？内通者もしくは袁紹軍の策と考えるべきじゃないか？」

左慈の言うことはもつともだった。

戦の天才レベルを超えている呂布とはいえいくらなんでも早すぎるのだ。

「そつえば斗詩さん、猪々子さんにはちゃんと命じておきましたの？」

「はい、呂布と会ったら『袁紹様はここにはいなく後方に下がってる』と言って誘き寄せるといふ策ですよね？」

「ええ、そうですね。」

「て、テメエラー……!!」

「待て、左慈！仮にも総大将に手を出してみる、俺達は連合内でオシマイだぞ!？」

必死に左慈を取り押さえる一刀。

元々の力量は左慈の方が高いので苦労した。

「これもどれも、あの妙な男のおかげですね！」

「そういえばその妙な男ってどんな人だったんですか？」

「……確か……」

「覚えてないんですか!？」

仮にも今回の功労者だろうに。

「お、覚えていますわ!……確か変な喋り方をする男でしたわ。」

「ほとんど解りませんよ!」

そうこうしている内に袁紹軍の方で起こっていた騒音や関の声が近づいてきた。

「紡！偃月陣はしき終わったのか!？」

左慈が準備運動をしながら聞く。

「ハイ、既に真羅さんが迎撃の体勢をとっています。」

「じゃあ軍の指揮は真羅と紡に任せて俺らは呂布の足止めと行こうや。」

俺『ら』ということは一刀も入っているということだ。

一刀は深いため息を吐きながら改めて装備を確認する。

服を隠さんばかりの大きな黒い2本のベルトには6本の短剣に10本の長剣。

足には師錬靴、手には師錬甲しれんこうがある。

左慈曰く、師錬甲は師錬靴と同じ素材なのでやはりダメージが溜まると黄色くなっていき、最終的には赤く光りダメになるんだという。

そこに伝令の兵が駆けてきた。

「伝令！呂布の隊が我が軍の目前まで迫っております！！」

左慈の顔が引き締まる。

「正直・・・勝てるかどうかだな・・・」

その呟きは一刀にしか聞こえないくらい小さなもので、あの強気な左慈らしからぬ弱々しさがあった。

「来たぞ！槍兵を前面に出して迎撃せよ！！」

呂布隊の猛攻を防ぐべく、真羅は軍を指揮していた。

「敵を恐れるな！力の限り食い止めるのだ！！」

呂布隊は見たところ兵力は1万のようで、その倍を誇る朱然軍の敵ではないと思われたが、何せ相手は呂布なのだ。簡単にいくはずが無いとその場の全員が覚悟していた。

「相手・・・戦慣れしてる・・・でも無駄・・・」

先頭を切る呂布は無数の槍の壁をもつともせずに邁進する。

「クツ・・・！できるなら私がやってやりたいが・・・」

紡は鍛えれば伸びしろは高いが今はまだ任せられない。左慈はそもそもこういった隊の指揮というものが向いていない。一刀はそもそも何がどうなのか解っていない。

今この場で呂布に向かいその頸をあげることは簡単だ。

しかし自分以外に隊を指揮できる人間がいなくなると話は別だった。

「袁紹め・・・！厄介ことを押し付けてくれた・・・！！」

紡からの話を聞く限りでは袁紹は朱然軍の陣中で寛いでいるらしい。殴りたいほど狡猾な策だった。

「伝令！」

指揮に勤しむ真羅の元に伝令の兵士が来る。

「左慈様と北郷様が呂布の討伐に向かっています！」

「何！？大丈夫なのか！？」

「左慈様が凄い勢いで敵の部隊を蹴散らしていますので、呂布も気になってそちらに向かっているらしいです！」

おそらく左慈は自分を囿にして呂布を自軍から引き離そうとしているのだろう。

（だが左慈では呂布は・・・）

訓練や実戦で見てきた左慈の実力で足りるのかどうか、その辺が疑問点だった。

「・・・とか思ってたろうな・・・」

「ん？何か言ったか？」

いやなんでもないと左慈は返し、自分達を囿もつとする呂布隊の面々を駆逐していた。

「コイツは間接外すくらいで許してやるか。」

ゴキツという嫌な音が聞こえてくるのを一刀は耳を塞いで防ぐのであった。

一刀の【繰】は黄巾の乱以来ずっと特訓した結果かなりモノになり、今では最高10個ほどの物体を操れるほどになっていた。

今も長剣を6本フル使用し周りの敵のアキレス腱ばかりを狙っていた。

実際左慈と一刀2人は敵の命は奪わず間接を外したり腱を切るなどの戦闘能力だけを奪う戦い方をしていた。

「結構倒したな・・・」

ひととおり暴れたあとで左慈は怪我人の群れの方を見る。

しかし、2人の眼中には所々痛みで呻く兵士達は無く、ただ独り立つ紅い影を見つめるだけだった。

「・・・誰だ？」

武器を全部納めた一刀が目を細めて影を見る。

「・・・やったのお前たち?・・・」

その言葉には別に仲間を倒された怨念や仇討ちなどの感情は無く、ただ淡々と疑問のみを意思として飛ばしていた。

「左慈、まさかアレが・・・?」

「ああ、呂布だ・・・」

馬中の赤兎、人中の呂布という言葉思い出す。

一見したところ触覚っぽいアホ毛がチャームポイントな可憐な少女だと思わせるがその手に持つ得物……方天画戟が彼女の周りを殺伐とさせていた。

まるで周りに転がる兵隊を彼女がやったかのようにも見えてしまう。

「そうだ、何か文句あるのか？」

左慈はイヤに喧嘩腰だ。

「特に・・・ないかも・・・」

ないのかよ！

という言葉葉を喉の奥にしまい込みつつ、一刀は自己紹介をする。

「俺は北郷一刀、こっちは仲間の左慈。君は？」

「恋は呂布・・・字は奉先・・・」

やはり呂布だった。

できることなら左慈の勘違いであったがもう仕方ないだろう。

「お前達・・・どこの所属？」

呂布が聞いてくる。

隙が無い。

「ああ、俺達は「朱然軍だよ。」左慈!？」

どうにかして誤魔化すか時間稼ぎをしたかったが左慈はお構いなしにバラしてしまった。

「朱然軍、連合の中・・・敵・・・敵は殲滅・・・」

瞬間、呂布の纏う雰囲気が一変した。

空気が・・・空気が歪んで見えるよ父さん!

「やべえ!逃げるぞ左慈!！」

一刀が背を向けて逃げ出す。

左慈はそれを咎めることなく舌打ちを残して後に続いた。

「・・・逃げる?・・・でも、逃がさない。」

呂布も2人を追いかけてこの場を離れた。

朱然軍・陣中

「しかし・・・まったく敵が来ませんわねえ、斗詩さん?」

「そうですね・・・いくら屈強を誇る朱然軍でも相手は呂布、そろ

そろ壊滅してもおかしくないですけど・・・」

袁紹と顔良は仲良く談笑していた。

将が全員なにかしら動いてるので袁紹と顔良は特になにもされることなく寛いでいたのだ。

「はぁ~~~~、なんかもてなしがありませんわもてなしが!」

「仕方ないですよ、全員が戦っている訳なんですから対応できないのも当たり前ですよ。」

「そこをなんとかするのが私をもてなす軍の必須条件でしょうが!」
「?」

なんとも勝手な言い分であった。

(もてなすもなにもいきなり押しかけたくせに・・・)

顔良は流石に分別をわきまえていた。

「?・・・なんですの?その『勝手な言い分ばっかで自分では何もしないんだろうな』みたいな目は!」

「!?!全然そんなこと考えてないですよ~やだな~!(なんでこう察しいいんだろう)」

「・・・まあいいですわ、次は劉備軍に行きましょう。」

袁紹が立ち上がる。

「え！？劉備軍にもですか！？」

「ええ、いつまで経っても呂布が来なかったら劉備軍に行けば張遼が誘い出せるとあの男も言っておりましたわ。」

「本当、その人ウチに欲しいですね・・・軍師として。」

顔良の心の叫びであった。

「さあ！行きますわよ！！」

「はあゝい・・・」

袁紹は伝令の兵に劉備軍のところに行く伝えて颯爽と去っていった。

虎牢関

袁紹達が劉備軍に行ったことは袁紹軍から連合軍全域に広まり、董卓軍も知るところとなった。

「なんやて！？袁紹はいま劉備んとこ！？」

張遼の耳にも入り出撃するかどうか迷っていた。

「ねね、どう思う？」

「ねねはなんとなく畏のような気がするのですが・・・劉備軍の所にいるのは本当のようですよ。斥候からも報告は来てるのです。」

「ねねが言うんならホンマモンの話なら、今度はウチが行くしかないんやろなあ」

張遼が肩をストレッチしながら言った。

「しかし恋殿が朱然軍相手に手間取っているので援軍は期待出来ませんぞ？」

「そんなん大丈夫や！武人は戦場で死ぬなら本望ってやつなんや。ここで死んでも悔いはあらへんで！」

陳宮にとって張遼の言葉は酷く不安なものに聞こえた。

「死んだらだめなのです！霞はちゃんと生きて帰るのですよ！！」

陳宮の悲痛な叫びに張遼も少し顔に影を落とした。

「・・・せやな、何言ってるんやろな、ウチ！・・・大丈夫や、ウチは死なへん！」

張遼はそう言い残して得物である偃月刀を持ち、部隊1万を率いて虎牢関を出た。

張遼隊の行くルートは敵右翼に突撃し突破、そのまま袁紹軍を素通りし劉備軍に迫るといったものだった。

西涼特産の汗血馬に乗り地を走る姿は正に神速、自分の部隊を一気

に引き離し敵右翼、曹操軍に突撃した。

「いづくでええええ——！！！！！」

曹操軍は呼応したように展開する。

張遼は恐れることなく突っ込んでいった。

戦場近くの川

小川という訳でもなく大河川という訳でもない、水遊びが出来るくらいの川だった。

そんな休日の家族が似合う風景に入り込んでくる戦場の影が2つ。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……！」

「ここまで来れば……大丈夫じゃないようだな……」

近くと言っても朱然軍の陣からはかなりの距離があり、とても短時間で一般人が来れるような距離ではなかった。

それを一刀と左慈は走り抜いた。

それは褒められるべきことなのだが後ろにピッタリと呂布が付いてくるのが問題点だった。

「……もうおしまい……？」

呂布は息切れひとつせずに涼しい顔で聞いてくる。

「クソ！北郷、飛び込め！！」

「ハアツ！？」

左慈の蹴りによって一刀の体は川に入り込む。

一刀は少し流されたところで立ち上がり川の水位を確かめた。

「あんまり深くないな・・・」

せいぜい股の辺りまで来ている程度であり、とても溺れるような深さではない、その気になれば全身潜れるくらいの深さだった。

ふと、一刀は左慈の居る所を見る。

そこには左慈はいなく、川に2人の姿はあった。

「クソッ！」

「・・・お前、強い・・・」

2人は戦っていた。

それしか解らないくらい一刀にはレベルの高い勝負だった。

「ハアアアアア！！」

左慈が正拳突きと回し蹴りを織り交ぜた攻撃を繰り返している。

一刀が毎日のように受け続けた攻撃を左慈は使っていた。

「速い・・・でも遅い・・・」

「ま、マジかよ・・・!？」

一刀が驚くのも無理はない。

呂布は顔色ひとつ変えずにすべてを避けて見せたのだ。

自分は毎日のように受けてきたが動きが見えても避けることは困難だった。

「チツ！流石は最強の英傑だ・・・やりやがる・・・」

左慈は一旦攻撃を止める。

その間を見逃すこと無く呂布は攻撃を開始した。

方天画戟は西洋でいうパルチザンのように突くことも斬ることもできる武器だ。

その得物を使った数々の攻撃が左慈を襲う。

「クソ・・・やはり厄介だな。」

足が全部水中に入ってしまったので思うように動けない。

呂布は水の抵抗など知ったことではないといった感じで攻撃の速度はどんどん上がっている。

突く・斬るの猛攻の中で一回だけ左慈の肩を掠った攻撃があった。

「ッ！・・・」

一瞬だが左慈の顔色が変わる。

その後も掠る程度だが攻撃が当たる回数が増えてきた。

一刀から見ても左慈が劣勢に回っているということは明らかだった。

しかし、左慈の師錬甲が青く光るのをみて一刀は少し安心できた。

「なめる、な！！」

左慈の拳が迫る方天画戟へと向かっていく。

ガキイイン！という金属同士がぶつかる音が川の流れる音を押し
のける。

呂布は驚いたように1歩後ろに下がり距離をとった。

「一瞬だけ・・・強かった・・・」

「ああ、お前を殺してやる・・・」

左慈の残忍な部分が顔を出す。

今度は左慈の方から突っ込んでいく。

「そら！コイツは避けられるか？避けてみる！！」

空中で回転しながら蹴りを連発していく。

師錬靴を使った蹴りはただでさえ重いのだがそれが連撃で襲い掛かってくる。

流石の呂布も防ぎきれずに一撃だけもらってしまつ。

「ウツ・・・まだ・・・まだ！」

呂布も負けじと方天画戟の連撃を繰り出す。

2人の攻撃がガキインという音を立てて交わっていく。

一刀が自分の手の届かない世界、武の世界を見て思った感想は『美しい』であった。

本人達に自覚はないようだが第3者の視点で見ると解る、『武の共演』とはこのことであつた。

しかし、左慈の様子がおかしい。

攻撃や防御を出し惜しみしている。

明らかに呂布との接触を控えていた。

「クソッ、こんな時に・・・！」

見ると師錬靴や師錬甲の光の色が薄く黄色がかった。

左慈は攻撃をなるべく手足を使って防いでいた。
そのツケが来たのだろう。

「左慈！」

一刀は助けようと水の流れを掻き分けて進むが思わぬ制止が入った。

「来るな北郷！！」

左慈の怒号に思わず体が止まる。

「お前じゃ呂布に敵う訳がねー！逃げろ！」

一刀を横目に叫んでいるが左慈本人も自分が呂布には敵わないことは解っていた。

何故挑んだと言われるのは当たり前だった。

しかし左慈はこう応えたであろう。

『俺以外に誰がヤツを止めるんだ』

陽炎と宇吉はいない、真羅も全軍の指揮で手が離せない、一刀はまだまだ修行中。

なら自分がやるしかないじゃないか。

呂布は野放しに出来ない存在だ。

トランプでいうジョーカーを放っておくほど余裕を見せることもない。

放っておいたら自軍の被害が増すだけなのだ。

だから身を削ってでも止める必要があった。

「ああ、そうさ・・・お前は俺が殺る。」

ほんの少し回復はした。

前にいる呂布も構えなおす。

「用は済んだ？」

「ああ、待つ必要はない。」

その瞬間、呂布が凄まじい勢いで飛び掛ってきた。

左慈は両腕でガードするが勢いが強すぎて吹っ飛ばされてしまう。

左慈の着地点で水飛沫が舞う。

「師錬甲が・・・!？」

黄色みが強くなっている。

限界が近かった。

「その変な手袋も靴も・・・もうオシマイ・・・」

呂布も左慈の戦闘力に師錬が関わってるのは気付いていた。

それでもなお左慈は笑みを絶やさずにいた。

「ヘッ・・・俺がなんの考えなしに川に来たと思うなよ。」

そもそも川のほうに行けと言ったのは一刀ではなく左慈だった。

「ハアアア!!」

左慈が川の水を殴りつける。

ドッパアアンという音と共に水が左慈を覆い隠す。

「目隠し?・・・でも無駄。」

呂布が水飛沫に向かって方天画戟を突き出す。

しかしその切っ先は左慈を捉えられずに空を切る。

「!?!?・・・どこ?・・・」

一刀も呂布も、左慈の姿を捉えきれなかった。

そして彼女の後ろで水柱が上がる。

「もらった!」

呂布が驚いて振り返った瞬間には既に左慈が右正拳突きを繰り出した後だった。

方天画戟でガードしようとするも既に左慈は懐に入り込んでおり、腹に一撃入っていた。

「ウグツ・・・!？」

「まだだぜ!」

水の抵抗があるため足は使わず上半身を駆使して攻撃を当てる当てる。

呂布はその全てを受けていた。

やがて左慈の攻撃が止んだ。

「何でこのタイミングで・・・？」

左慈ほどの武道家ならまだまだ攻撃は続けられるはずだった。

考えられる理由としては疲れたから止めた。

しかしこれは左慈に限ってありえないことであるし、体力より気力の方が高い左慈にとって途中で止めるなどありえないことだった。

なら考えられる理由は1つ。

「まさか、師錬甲が!？」

「北郷ー!逃げろー!!」

左慈が真つ赤に光る師錬甲を見て叫ぶ。

「左慈!？やっぱり師錬甲が・・・!」

一刀は駆け寄ろうとするが左慈が叫んだために止まってしまつ。

「師錬甲が・・・師錬甲がオシャカになったー!!」

早く逃げろー!と左慈は言うが一刀は足が動かせない。

そうこうしている内に呂布が動き出してしまった。

「・・・もう終わり?」

まったく効いていない。

「そんな・・・左慈の蓮撃を受けたのに何で!?!」

その気になれば城の城壁をも破壊できる師錬甲の攻撃も呂布には効かなかったのだ。

一刀はかなり驚いていたが左慈はそうでもなかったかのように見える。

「チツ!だから規格外つてのは嫌いなんだ・・・まだ足があるがな・・・」

「お前、面白かった・・・またやりたい・・・」

「次はねえよ!ここで終わりにしてやる!」

左慈は駄目になった師錬甲を投げ捨てて構えをとる。

「すごい・・・来る?」

左慈の殺気が場に溢れかえるように膨れ上がる。

呂布は迎撃の構えをとりなおかつ殺気を増大させた。

「必殺だ・・・ハアツ!!」

左慈の姿がフツと消える。

いや、消えたかのような高速移動を使って呂布に回り込もうとしているのだ。

呂布の周りでパシャ、パシャという音が左慈の足音として呂布の周りを跳ねる。

一刀はその人並み外れた動体視力によって見えていた。

師錬靴で器用に水面を捉えて水中に入ることなく移動をするので水の抵抗をなくしているのだ。

「すごい・・・あれなら呂布でも！」

しかし呂布はまったく動じていない。

「そんな動きじゃ・・・恋には通じない・・・」

呂布はまるで見えているかのように方天画戟を突き出す。

「グアツ！何!？」

そしてその突きは高速移動中の左慈に当たった。

しかし左慈は咄嗟に足を前に出して師錬靴で防いでいた。

「クソッ！・・・攻撃が当たらなけりゃあとちよつとは持ったのによ・・・」

一瞬だけ見えた左慈の師錬靴は真黄色だった。

そこに呂布の重すぎる一撃が当たったのだから師錬靴がどうなったのかは予想がついた。

「なにやってやがる！早く逃げろ北郷！お前も死ぬぞ！！」

「で、でも・・・仲間じゃないか！！」

左慈を置いては逃げられない、確かに左慈が命を張って足止めすれば一刀だけなら逃げられるだろう。

だが左慈は今の北郷一刀にはなくてはならない存在・・・仲間なのだ。

置いて逃げられるはずがない。

「自分の心配、した方がいい・・・」

左慈のすぐ目の前に呂布が入り込む。

一刀に気を取られていた左慈には気付けなかった。

「これで、終わり！！」

呂布が方天画戟を振り上げる。

その瞬間左慈の右肩口が血を吹いて斬れた。

「ガアアアツツ!!」

「左慈イイー!!」

「バツ!来るなあー!!」

一刀が駆け寄ってくるのが見える。

(チツ・・・あの馬鹿・・・)

そして左慈はゆっくりと呂布の方を見る。

天高く振り上がった方天画戟はさながら天からの罰のように思えてきた。

(悪いな、北郷、鍛えてやるのは少し先になりそうだ・・・)

呂布が一気に方天画戟を振り下ろす。

その光景は一刀にはとても速く、左慈にはとてもゆっくりと流れていった。

飛將軍、舞って（後書き）

今まで没になったサブタイトル候補たち

「左慈、散る」

「北郷さんの秘策」

「呂布vs左慈&一刀」

「江東の麒麟児故に」

うん、没にしてよかった！

男として、仲間として（前書き）

マジ恋のも書こうかなー・・・

男として、仲間として

虎牢関前

張遼は決死の突撃の結果、曹操の命を受けた夏侯惇と夏侯淵によって包囲されていた。

「ハッハッハ、張遼！もうお前は袋の鼠だ！おとなしく降服しろー
！！」

夏侯惇は先程から張遼に熾烈な攻撃を加え続けている。

「なんや、曹操の奴はこの突撃を読んどったつちゆうことかいな！
？」

既に隊の半数が曹操軍に殺されるか捕縛されるかされており、残りも曹操軍の兵士達に囲まれていた。

「いや！ただ私たちは張遼と会ったら降服されると命令されている
だけだ！」

「まあこういう単細胞にはそういった命令が一番効くんやろうなあ・
・」

夏侯惇の攻撃を受け流しながら張遼は周りを見た。

さりげなく夏侯淵が要る。

そして自分の周りには味方は1人も居なかった。

「これってアイツ風に言くと大ピンチってやつやん・・・！」

まさにそうであった。

「よそ見するとは余裕だな！」

「つとと！しつこいねん！！」

夏侯惇の攻撃にはただの大振りも多い。
避けるの自体に苦労はしなかった。

「でやあ！ハアツ！！」

相手に疲労の色は無い。むしろどんどん大剣を振るう速度が速くな
ってきていた。

徐々に張遼が押され始める。

相手は夏侯惇だけではない。

後ろに控える夏侯淵がいつ弓を引いてきてもおかしくは無いのだ。

だがこれは一騎討ち。

そう自分に言い聞かせて精神面の保険を図る。

「どうした張遼！動きがツ遅くツなってるぞ！！」

先程までは捌き、受け流していた攻撃をガードしなければならない。
確かに疲れていた。

「何を、まだまだ！」

自分は負けず嫌いなのだ。

こんな戦いで死ねないし負ける気も無い。

「さつさと負けてウチを袁紹のところに連れてってや!」

今まで防戦一方だった張遼が反撃に転じる。

お互いに笑い合いながら攻防を続ける。

「いいぞ張遼!やはりこうでないとな!」

夏侯惇が負けじと大剣を振るう。

そんな時だった。

夏侯淵の部隊が張遼隊の全員を殺すか捕らえるなりしていたはずだった。

しかしそれ故に夏侯姉妹の部隊は張遼と夏侯惇の一騎討ち以外に目がいかなかったのだ。

その慢心についてなのか夏侯惇の顔目掛けて飛んでいく物があつた。

それは戦では絶対に使うであろう1本の矢。
ただの矢だった。

しかし目標は大きい。

「ッ！あれは！？」

夏侯淵が気付く瞬時にその矢に向かって射かける。

天才的な弓の腕を持つ夏侯淵ならではの芸当だった。

狙い通りに夏侯淵の放った矢は謎の矢に当たる。

普通ならこれで相殺して勝負に介入することはないはずだった。

「なんだと！？」

しかし、謎の矢は夏侯淵の放った矢をものともせず弾いて夏侯惇に殺到する。

「姉者！危ない！！」

夏侯淵の悲痛な叫びも虚しく矢は無情に夏侯惇の左目に突き刺さった。

「ガッ、うああああああああああ！！」

「姉者ああー！！！！！！」

夏侯淵はすぐに駆け寄ろうとせず、矢の放たれた方向を見る。

そこにはまるで見るのを待っていたかのように矢を持った人間が立っていた。

「なッ・・・あれは！？」

夏侯淵はその人間の服装を知っていた。

だが考えるより前に体が自分の姉を傷つけた相手を殺さんと弓を引く。

しかしその相手は自分の持った弓で夏侯淵の矢を弾き、余裕を持って背を向けて逃げ出した。

その間に夏侯惇は立ち直り、矢を目玉ごと引き抜いて周りの人間が驚くほどに自分の目玉を思い切り食らった。

どうやら今のところ心配はいらないようだった。

「何故・・・あの男が・・・？」

夏侯惇を射た男。

それは夏侯淵のみならず大陸中の人間が知っている者だった。

その男は、白く光り輝く衣を着ていた。

30分前・川

呂布が方天画戟を振り下ろした1秒後くらいに左慈の肩から腹にかけて衣服を破り肌も破って血が吹き出る。

「左慈イイイイイイ！ー！ー！ー！！！！！」

一刀は叫びながら左慈に駆け寄る。

返り血を受けた呂布は無言で川に崩れ落ちる左慈を見つめていた。

「・・・お前、強かった・・・でも恋の勝ち。」

呂布がもう一度方天画戟を振りかぶる。

とどめを刺す気だった。

「（ヤバイ！？）させるか！【縛】！！」

一刀が全力で【縛】を使うが呂布が止まる気配は無く、動きがゆっくりになる程度だった。

「?・・・おかしい・・・」

呂布は一刀が何かしているのだとは知っていたが妖術を使っているとは露にも思わなかった。

（流石に動きは止められないか・・・でも動きが遅い内に！）

一刀の師錬靴が水中で青く輝く。

瞬間、一刀が水底を蹴り大きく左慈に向かって跳躍する。

呂布が振り下ろす少し前くらいに一刀は左慈を掴んで川に突っ込んだ。

まさに間一髪だった。

一刀はもう一度水底を蹴り岸へと移動した。

呂布は追ってこない。

おそらく一刀が左慈を担いで逃げたところで追いつけると踏んでるのだろう。

その通りではあったが一刀にはそれが悔しかった。

「左慈！無事か！？」

まだ意識はあった。

「ガフツ・・・ハアツ、ハアツ・・・やつ、め・・・浅く・・・斬りやがった・・・」

話せるくらいの元気があって一刀は一応安心した。

しかし左慈の表情は苦痛に歪んでおり、血は未だ止まってはいなかった。

「しっかりしろ！・・・なんとか止血しないと・・・！」

一刀はゴメンと言いながら左慈の上着を剥ぎ取り斬られた部分を結ぶ。

いかんせん範囲が広いため、上着の布を全部使ってようやく止血が出来たようだった。

「左慈・・・」

「なに、やって、やがる・・・速く、にげ、ろあ・・・」

なおも左慈は一刀に逃げると言ってくる。

何故？

左慈や宇吉が自分を使って外史とやらを調節したいという打算があるのは承知の上だ。

しかし妖術を教えてくれる宇吉は勿論、毎日毎日特訓に付き合ってくれる左慈はいい奴だ。

左慈はどうだったか知らないが少なくとも一刀は2人に多大な恩を感じていた。

自分はそんな2人にどう返せるというのか。

一刀は少し考えた後で立ち上がった。

「左慈、ちょっと待っていてくれ。」

左慈からの返事はない。

息はあるので意識を失っただけだった。

「別に勝てるとは思ってないけど・・・」

川の水で顔を洗っていた呂布に歩き出す。

「お前、弱い・・・恋と戦わない方がいい。」

呂布が川から上がってくる。

血は全部流したようだった。

「気遣い嬉しいけど、男として君に負けるわけにはいかないし・・・」

言ってて恥ずかしくなってきた。

「君は俺があつた男を置いて逃げたらアイツを殺すだろう？」

呂布は無言で頷く。

「だったら、俺は左慈を殺させない。」

固い決意で言い放つ。

「でも、あの男を担いで逃げても、無駄・・・追って殺す。」

可愛い顔して物騒なことを言うなあと一刀は心中肩を竦める。

「だから俺が君を倒す。」

「無理・・・お前じゃ。」

そんなことは解っていた。

だから完全に倒す訳ではない。

「仲間として、俺は全力で左慈を連れて逃げてみせる！！」

一刀は宣言した後、長剣、短剣併せて15本を【繰】で宙に浮かべ

長剣1本を手につ。

（12本以上やって長時間成功したことは無いけど・・・）

今なら出来る気がする。

（なんとか呂布を足止めして、後は師錬靴で全力で逃げる！）

「凄い・・・でも勝つのは恋。」

「わぁーてるって!!」

一刀が呂布に突っ込む。（ツッコミじゃなくて戦いの意味でね!）

まず短剣5本ほどを呂布に飛ばす。

「無駄・・・」

呂布はいとも簡単に5本全てを弾き落とす。

一刀は短剣の残り5本を飛ばすと同時に落とされた短剣を下から呂布に殺到させる。

計10本もの短剣が上下から呂布に襲い掛かる。

「小細工は、効かない・・・」

しかし呂布は方天画戟を回転させ短剣を全て防いで見せた。

「今度は、こっちから・・・!」

呂布がとてつもないスピードで一刀に迫ってくる。

通常、人間は徐々に筋肉の力速度をあげて筋肉を使うが獣は違う。チーターやライオンといった肉食獣などは獲物を見つけた瞬間にMAXスピードで駆けることができる。

呂布の獣じみた身体能力が0 100の筋肉速度を実現化し、一刀の予想以上に呂布は文字通り一瞬で懷まで飛び込んできたのだ。

（肩に斜め斬り！）

一刀が呂布の腕の筋肉を見て攻撃を判断する。

そうしたらちゃんと避けることが出来た。

「・・・避けた？」

呂布が不思議そうに攻撃を繰り返すも一刀はことごとく避ける。

一刀は避けながらもさっき呂布の居た場所に落ちている短剣を【繰】で呂布の背中目掛けて飛ばす。

（孫策の時は読まれたが・・・今度こそ！）

いけるはず、という一刀の予想はまたも覆された。

「恋には、無駄・・・」

「なっ!？」

呂布は飛び上がった短剣を10本全て避けてしまった。

そして呂布の居た場所の延長線上にはもちろん操っている一刀がいる訳で・・・

「クッ！止まってくれるか!？」

勢いが強すぎたせいでなかなか止めるのは難しそうだった。

「止まらない、なら追撃だ!」

一刀は勢いをそのままに短剣を呂布のいる空中へと向ける。

空中では身動きが取れないと判断した一刀の考えは正しくはあった。

しかし相手は天下無双と言われた呂布なのだ。

一刀の誤算はそこにあった。

「やっぱり、弱い・・・」

呂布のその言葉を聞いたとき、一刀の脳裏に浮かんできたのは自分が呂布に殺される風景だった。

（ヤバイ!このままじゃ・・・!）

思ったとおり呂布は短剣をものともせず着地して一刀に斬りかかって来た。

なんとか斬撃は防ぎきれたが呂布に疲れの気配は無い。

一刀は観念したように俯き、口に何かを含む。

それを呂布は見逃さなかった。

「なに？それ。」

「ちょっとした薬さ・・・まあ、効果は俺には無いけどね。」

あまりこういう手は使いたくなかったがこれしか方法は無かった。

1ヶ月前・新野

「北郷く〜ん、いますかー？」

宇吉が一刀の部屋に訪れた。

「何だ〜？新しい妖術の特訓？」

一刀は部屋で政務をしていた。

「いえいえ、今日は北郷君にある物の実験台になって欲しくてですね〜」

「帰れ。」

結構マジ発言だった。

「おやおや、そんなことでいいんですかね」

いやに宇吉は余裕だ。

「これさえあれば、紡はおろか世界中の人間を君の虜にすることが出来ますよ」

「なに？」

一刀は食いついてしまった。

「これは俗にいう惚れ薬というものでしてね、これを相手に口移しで飲ませれば相手を自分にメロメロにすることが可能なんですよ」

「なんと！？男が夢見た伝説のアイテムが俺の手に！？」

なんとも夢のある話だった。

「高い費用を出して成功したのがコレ1つだけなのですが私では不安ですので北郷君に任せようと思います。」

「オイオイ、そんなにヤバイ薬なのかよ！？」

「余程のことが無ければ心配はいりませんが・・・用心に越したことは無いと思ひましてね・・・」

なんともヤバそうな話だった。

「という訳で頑張ってくださいね」

「なにを！？」

回想終了

（まさかこんな時に使っなんてな・・・とっという良かったという
か危なかったというか・・・）

いずれにせよ呂布にキスをしなければならぬ。

かなり難しい話であった。

「とにかくやらなきゃな・・・【縛】！」

まずは呂布の動きを止めないまでも鈍らせる。

「また、動きが・・・」

呂布には効いているようだった。

師錬靴で一気に呂布に密着をする形に持っていく。

呂布は鈍い体を動かし後退しようとするが後ろに木があり、動けな
い。

一刀はさりげなく立ち位置をそうするように仕向けていた。

「もらった!」

「ッ、しまっ!」

呂布が初めて焦ったかのような声を出す。

「うおおおおおおお!」

このまま殺される。

呂布はかなりの確率で刺されることを予想した。

しかし一刀は武器を構えず、そのまま顔を――

「ッ!?――ナッ!?」

唇と唇が触れ合い、呂布は驚く。

(口を開けさせないと薬を流せない!)

一刀は舌を使い呂布の口をこじ開ける。

「なっ、アッ・・・ふぁあっ・・・」

呂布は嫌がるも【縛】の効果と口付けされたという事実により、一刀にされるがまま薬を流し込まれた。

役得とばかりに少し舌で呂布の口内を蹂躪してから飲んだのを確認して口を離れた。

銀色に光る糸が2人を繋ぐ。

「ハア、ハア、（これで大丈夫かな？）」

呂布は無言で俯いていたがやがてぐつたりと倒れた。

「えええ！？不安要素って相手限定だったのかよ！？」

意識は無い。

川の傍には気絶して動けない人間が2人と少し妖術を使いすぎて疲れた人間が1人居た。

「仕方ない・・・2人とも運んでいこう・・・」

【繰】を使い2人を浮かべて歩き出す。

剣をしっかりと回収しているところが貧乏性一刀の特性だった。

早く戻ろうと思い師錬靴を使って戦場に出る。

見ると曹操軍がいた。

（ここは曹操軍、ちょっと前線に出たのかな・・・クッ！？）

突如一刀の頭に激しい痛みが襲い掛かる。

「なん、で・・・クソッ・・・！」

一刀はその場にドサリと倒れこみ気絶した。

彼が目を覚ますのは戦いが終わって朱然軍による搜索隊が探しに来るまでであった。

虎牢関前・夏侯惇 対 張遼

「なあ、大丈夫なんか？左目が無いと結構不便やで？」

「フン、気にするな。たとえ片目であつても貴様を倒し、華琳様に献上してくれるわ！」

夏侯淵に眼帯を貰った夏侯惇は元気そうに大剣を振るつた。

片目になつても夏侯惇は距離感とかは大丈夫そうだった。

（姉者を射たあの男・・・服装を見るに間違いなく天の御使い・・・何故彼がこんなことを？）

夏侯淵は1人、先程の白く光る服を着た男のことを考えていた。

兵から報告が来ないということは恐らく逃げられたのだろう。

（フツ、まあいい・・・）

夏侯淵は一笑して決意する。

（姉者を害した男、何者であろうと排除してくれる！）

そうこうしている内に勝敗は決しようとしていた。

「ハッハッハ！やはり私は強い！張遼、おとなしく華琳様に付いてくるのだ！！」

「まだや！まだ負けた訳ではあらへんでー！」

張遼は負けじと奮戦したが、もう時間の問題だった。

「でやあー！！」

「なっ、しもた！」

夏侯惇の渾身の一振りに張遼の得物、偃月刀が宙に舞う。

張遼がそれに気を取られた隙に夏侯惇は大剣を彼女の首筋にピタリとつけていた。

「ウチの・・・負けっちゆうんか・・・！？」

張遼はその場にへたり込んだ。

その後曹操がやってきて張遼を説得し配下に加えるまで、そう時間はかからなかった。

男として、仲間として（後書き）

なんか無理やり感が否めない・・・（汗）

という訳で恋✓確立！？

どうしようか、作者も考え中ですw

感想・評価お待ちしてます

更新停滞のお知らせ

どうも、作者のもっこりーズです。

最近この小説の更新というか次話の投稿が遅れていますね。

真に申し訳ないのですがPCを取り替える際にデータが飛んでしまいましたorz

目下全力で前のPCの中を搜索中ですので、見捨てずにもうしばしお待ち下さい

作者より

次回予告的なもの

ストーリー的には今は虎牢関の対呂布戦でしたが、次話では目覚めた一刀が呂布にあんなことやこんなことをされるとか・・・

ついでに陽炎も洛陽にて色々やります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5130t/>

【真・恋姫†無双】天の御使いは2度死ぬ！？

2011年10月9日02時46分発行